

558  
101



0045635-000

558-101

実業道德

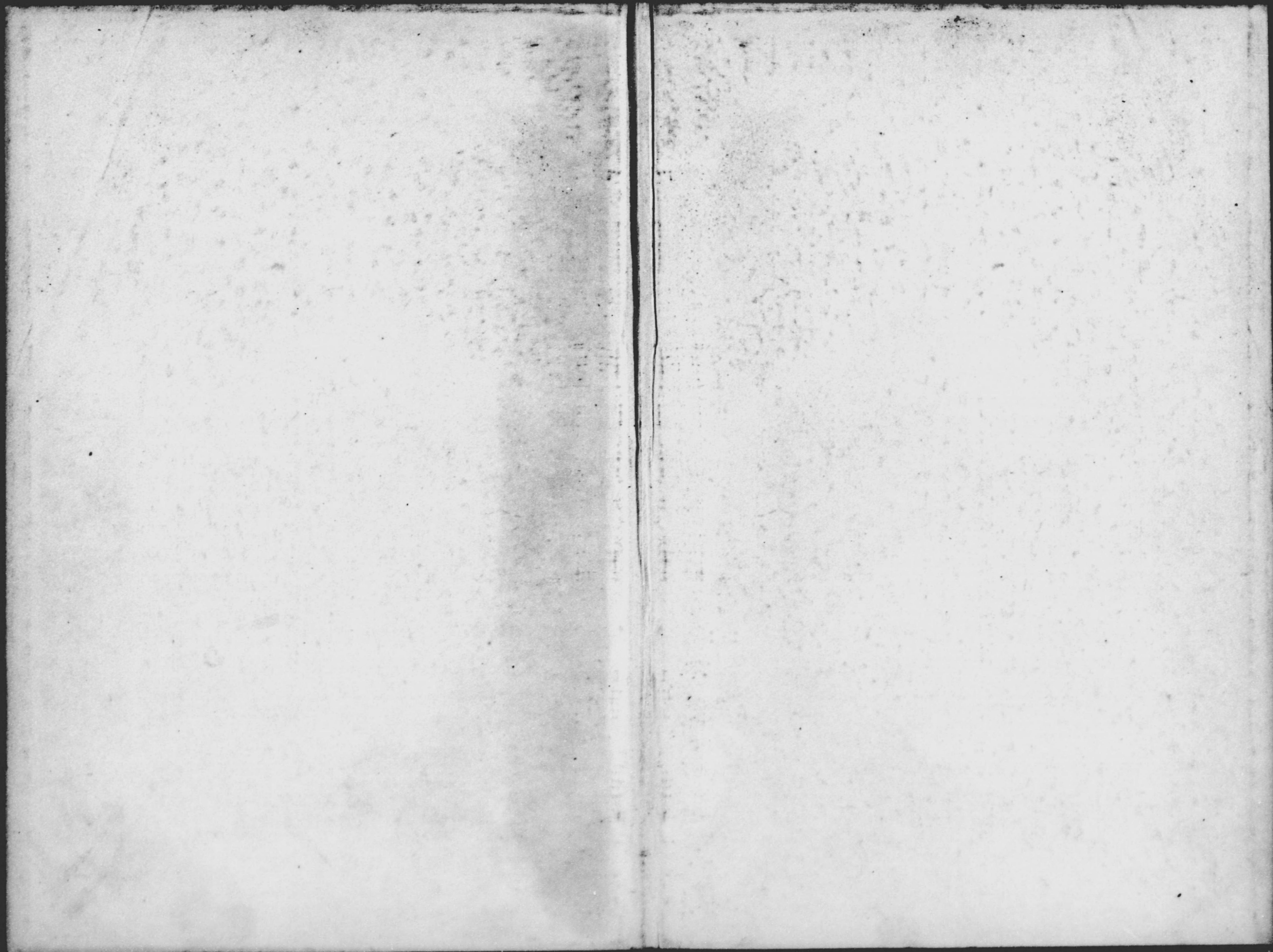
菰田万一郎・著

甲子社書房

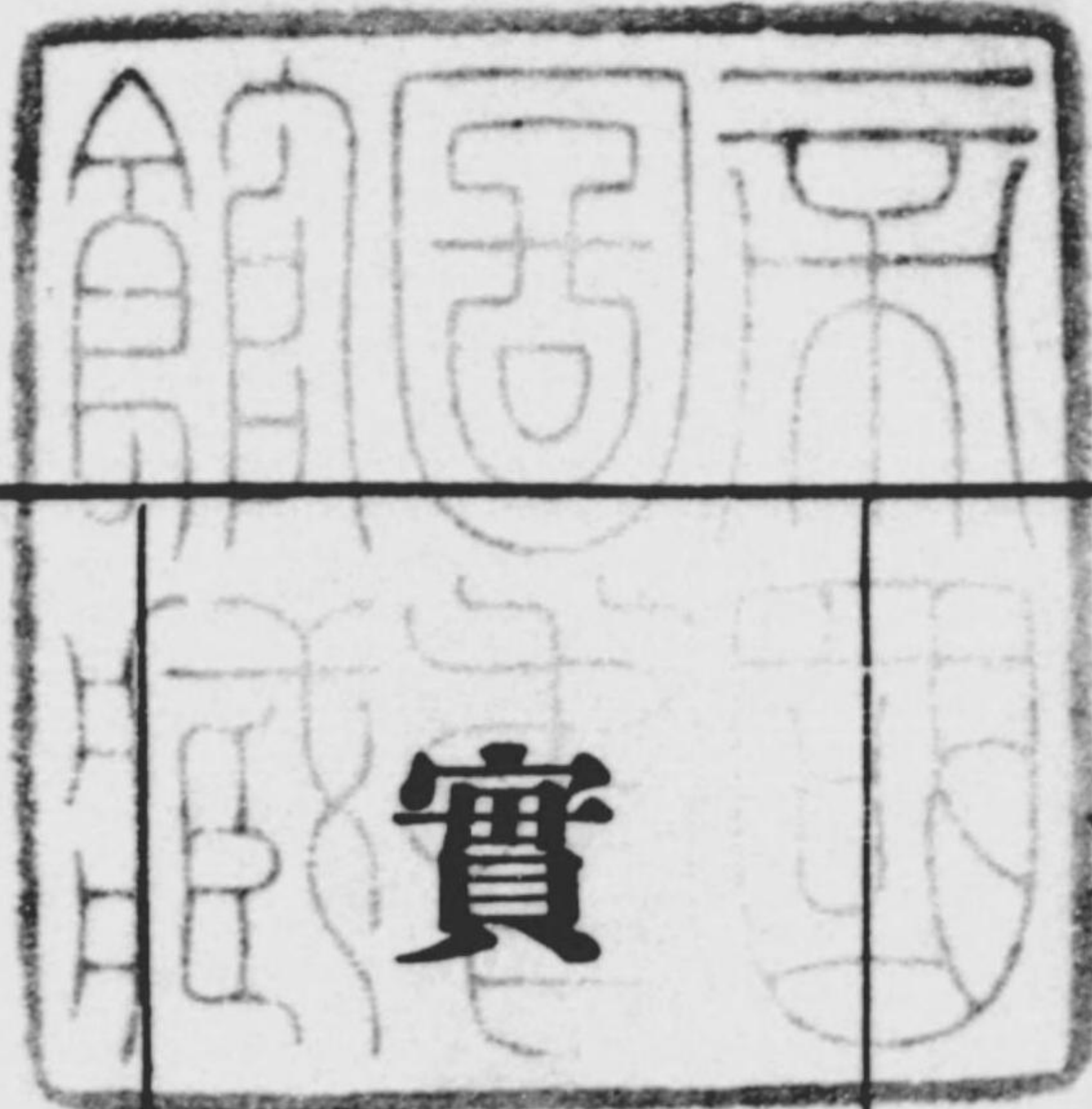
昭和3

AHF









菰田萬一郎著

實業道德

東京・甲子社書房・發兌





## 序

本書は山口高等商業學校で口述した講義を纏めて大正八年に刊行した「現今の實業道德」（岩波書店發行）に根本的な修正と多大の増補とを加へて其の面目を一新したものである。「現今の實業道德」を刊行した主旨は、將來實業界に出ようとする學生に對して、豫め實業の使命任務を明かにし、實業界に存する諸種の問題に就て明確な觀念と一定の見識とを與へんとするのにあつたが、本書の主旨とするところも別にそれと變つてはゐないのである。唯だ「現今の實業道德」に於ては、我が實業界の現状に就いて觀察し、そこに存する道德上の問題には、歐米に於けるそれよりも遙かに低級幼稚なものが少くないから、我が實業界の道德的標準を先づ歐米の程度まで高めねばならぬといふことを述べたのであるが、其の際に歐米の實業道德の方が進んでゐるのは、永い間に於ける自然的發達の結果その慣習的威力が強くなつてゐる爲めだといふことより外は述べて置かなかつたので



ある。事實又その當時には歐米の實業界に於ける道德は重に慣習に従つた他律的なものであつたのである。

然るに最近に至つて歐米の實業界では實業の社會的使命を認め、實業家の放漫無檢束な行動の恐るべき害惡を痛感し、各種の團體が擧つて道德法典を制定してその厲行に努め、成員は各自堅く之を守つて、決して之に違ふまいと深く心に期するやうになつて來た。

歐米に於ける斯る進歩の狀況を察し、その長所を取り入れて、我が實業界の進むべき方向と高むべき道德的標準とを明かにしたのが本書である。されば本書は學生を主にして述べたとは云へ、單に將來に於ける處世の心掛けに就いて説いたのではなく、時には實業家の位置に身を置いて實業の實際を察知し、時には傍觀者として實業界に於ける諸種の問題を解説批判し、又時には純學究として實業道德の原理を究め、かくして現今の我が實業界の取るべき方針と進むべき方向とを明かにしたのである。されば本書は單に學生に取つてのみでなく、現に實業に従

事せられつゝある人々や、又實業界の道德問題に深く心を寄せられてゐる人々にも何等かの參考にならうと思ふのである。

更らに又實業は文化生活の四分の三を占めて居り、實業界に於ける道德問題はど世人の興味を惹く活氣のある問題は外にはないと云はれてゐるといふやうなところから、本書が社會問題に興味を有する人々に向つて何等か寄與する所でもあらうものなら、それは私の存外の望である。

本書は之を三編に大別したが、これは讀者が見當を附けられる便宜の爲めに設けた區劃であつて、各の編の間に截然たる限界が存するわけではない。又本書の各章は最後の結論に達すべき階段を成してゐると云ふよりは、寧ろ各章が或る程度まで獨立してゐて、何れにも同一の原理が現はれてゐるものと觀るべきである。此れは無味乾燥な形式的理論の絮説を成るべく避け、讀者がどの章を繙かれても相當に意義と興味とを感せられるやうなものにしたいと云ふ切なる考が手傳つた結果である。



私は又熱心な讀者の便宜にもと思ひ、本書を著はすに當つて参考した書名や又本書に載せた引用文の出典等は之を一括して、本書の末尾に「註」として掲げて置いた。

浦和にて

昭和三年三月

著者

目次

第一編 實業道德の概念及び發達

第一章 實業道德の意義	三
第二章 經濟活動に對する道德的勢力の變遷	一四
一、原始時代——二、農耕時代——三、商工業に對する古代人の見解——四、基督教の影響——五、中世期の傾向——六、近世の初期——七、近代の變化——八、最近の狀況	
第三章 我が國民性と營利心	三三
第四章 徳川時代に於ける實業道德	四〇
一、實業家の社會的地位——二、實業の狀況——三、實業道德	
第五章 明治維新以後の實業道德	六九
一、社會上の變動——二、産業上の革新——三、新機關の及ぼした影響——四、實業道德の真相	

第二編 實業界に於ける道德問題

目次

目



第六章 粗製濫造……………八九

第七章 雇者及び被雇者……………一〇〇

第八章 信用及び契約……………一〇九  
一、現今に於ける信用の實況——二、道德的觀察——三、契約

第九章 廣告……………一二二

第十章 正當な價格及び正當な利益……………一六八

第十一章 投機取引……………一六六  
一、投機取引とは何ぞや——二、經濟上の利弊——三、制度の改善——四、道德的  
缺陷

第十二章 競争……………一五三  
一、定義——二、實質——三、競争の利害——四、不正競争——五、道德的矯正

第十三章 國家と實業……………一七四

第三編 實業道德の理論及び實踐

第十四章 營利心の價值……………一八四

第十五章 眞の成功……………一九九

第十六章 實業に於ける武士道……………二〇八

第十七章 道德と經濟との關係……………二二三

第十八章 實業家の精神的特徴……………二四五

第十九章 主徳……………二五三

第二十章 正直……………二五八

第二十一章 體面……………二六五

第二十二章 好意……………二七三

第二十三章 思慮……………二八一

附 錄 註……………二八七

(目次了)



實業道德

菰田萬一郎著



第一編 實業道德の概念及び發達



## 第一章 實業道德の意義

實業道德の意義を明かにする爲めには、先づ實業道德と云ふ語の現はす意味に就て尋ね、次に實業界に於ける道德の意義に關する代表的意見に就て考察して觀るのが最も簡便である。

實業道德と云ふ概念を構成するところの實業と云ふ語は勞役、商品、又は金錢の交換に關する人の活動のことを云ふのであり又、道德と云ふ語は社會、就中理智に長けた公平無私な人々によつて代表されるところの社會が妥當と認められた正行爲の規則を指すのである。されば實業道德とは、勞役、商品又は金錢を交換するに當つて社會が妥當と認められた行爲の規則のことを云ふのである。次に實業上に於ける道德の意義に關する意見に就て觀るにそれには代表的なものが二つある。第一は道德は社會に於ける正行爲の規則であるから、社會の一部たる實業界にも當然適用さるべきものである。されば實業道德と云つて社會一般の道德と異つたものがあるやうに考へるのは間違で、たゞ道德の原理原則を實業界に適應したのを斯く云ふまでのことであると唱へる説である。

第二は道德と云ふやうな窮屈な迂遠な規範は迅速機敏を尙ぶ實業界に取つては禁物である。實業界は營利を主眼とする所で、慈善や博愛を行ふべき所ではない。されば道德など、云ふものは實



業界に取つては何の役にも立たぬ邪魔物だとする説である。

この二つの説には一面の眞理があると共に又大なる誤謬を含んでゐる。元來道德は人類が社會生活を営む必要上から生じた行爲の規則であるから、其の社會に於ける個人は是非共之に従はねばならぬのである。この事實は、若し吾々が現今世界の各處に生存する野蠻人を人類進化の初期の階段と看做し、その現状に就て觀ると、孰れにも慣習とか風俗とか云ふ行爲の規律が存在してゐて、個人はその履行を強ひられ、それに反く時には社會の人々全體から非難攻撃を受け、果ては其の社會から追放されるものであるが、かゝる慣習又は風俗の合理的に發達したものが文明社會の道德であると云ふことを以て觀れば、容易に之を了解することが出来るのである。この意味に於て道也者、不可須臾離也、可離非道也と云ふ語には重大な眞理が含まれてゐる。更らに實業界は社會生活の一方面であるから、社會生活の規律たる道德が實業界にも行はるべきは當然のことであるが、嘗にそればかりでなく實業は人類の生活上の必須品を供給する體制で、その活動は人類に最も差し迫つたものであるから、その遣り方の如何と云ふことは最も活氣のある道德上の問題となるのである。この意味に於て第一の説には眞理を含んでゐるが、それと同時に第二の説の如く實業界に道德が無用だとするのは甚だしい謬見だと云ふことになる。若しも實業界に道

徳が行はれないならば、その活動の大部分は停止せねばならなくなる。信用や正直が守られなくて、何うして現今のやうな複雑大規模の活動が圓滑に行はれやう。又熟慮とか先見とか勇氣とか云ふ働がなくて、何うして個人が其の實務を敏活に又有効に處置することが出来やう。

併し又他方から觀ると、近來實業界に於ける事務は甚だしく複雑多様になり、其の活動は極めて迅速となつた爲めに、苟も實業に従事する程の人々は、先づかゝる繁多な活動に機敏に順應せねばならず、其の爲めには有らゆる能力を傾注して懸つても尙ほ足らずとするほどである。然るに道德は斯る場合にも不相變清廉であれとか、實直であれとか、謙遜であれとか云ふ消極的な態度を強ゆるのである。斯くては道德はたゞ人心の活氣を殺ぐだけで、他に何の用もなきぬことになる。それが爲めに實業界に於て一大事業を起さうとするやうな人々の中には、道德を顧慮せぬことが、事業成功の第一要件だとしてゐる者さへあると云ふことになる。是れは極端なる考であるが、併し道德が現今の實業界に取つて何等の威力をも有せず、時にはその活動を阻害するといふ點を明かに示したものである。今之を幾分か具體的な實例を以て説明するならば、現今の如く多數の職工を役する大工場に於ては、雇主は從來の如く職工の一人一人に對して人情づくで應對して行けるものでない。そんなことをしてゐては大規模の組織を敏活に運轉させることは出来



ない。先づ仕事と賃銀との標準を一定し、それに憑つて凡ての職工を一律的に取扱つて行かねばならぬ。それにも拘らず、道德では雇主は普通りの情誼づくの主従關係を持続せねばならぬと主張するのである。斯くては道德は實際に於て勢力のないものとなるばかりでなく、甚だしく仕事の進捗を妨げることもなる。此の點から觀て、實業上に道德を否定せんとする第二の説にも相當の眞理を含んでゐるのである。

斯く此等の兩説には長所と缺點とを含むのであるが、仔細に之を觀察すると、その缺點は實は同一の誤解に基いてゐるのである。それは道德を一定不變のものと考え、その進歩する方面を認めぬことである。第一の説は道德を過重する結果、色々の徳目をば從來のやうな型のまゝで實業界に適用しやうとするものであり、第二の説は特別の發達を來たした今の實業界に取つては從來の如き道德は其の自由な活動の妨げをなすものと觀たものであつて、何れも道德をば舊い形式のものだとして觀てゐるので、この點がその誤解の由て生ずる抑々の原因である。

斯やうに道德は一定不變のものではなくて時代と共に進歩發達するものであるが、是れは吾々が人類社會の進化を認めるならば當然想ひ到らねばならぬことである。野蠻人の間に於ける慣習と文明人の間に行はれる道義との間に著しい差違のある事は一目瞭然であるが、人文發達後にし

ても昔の勇氣と今日の勇氣とが其の内容を大に異にしてゐることは誰れにも解からうし、尙ほ一層手近な例で述べれば、我が國に於て近來デモクラシーの思想とか、富の分配の問題とか、權利侵害の問題とか云ふものが逐次論壇の中心をなしてゐるが、是れは正義の觀念が如何に著しく發達しつゝあるかを示すものである。斯く道德の進歩といふことは極めて明白な事實なものにも拘らず相當に見識のある人々でも往々之を看過するのは一體何う云ふ譯であらうか。それは第一には道德が是非善惡の區別を確然と規定して之を厲行する結果、此の區別は如何なる場合にも一定不變であり隨て普遍的に強制されるべきものだとし易い所があると云ふことゝ、今一つは道德は元は慣習から生じ慣習は同じことを度々繰り返した結果として生じたものであるが、慣習は其の性質上別段に努力を加へずに行ひ得るが爲めに、人々は動もすれば是れに固執して保守的に流れ易い所があると云ふことゝの爲めであつて、而かも此等の事情が互に重り合つて、道德に一定不變であるが如き容觀を呈せしめるが爲めである。

上に擧げた二つの説も道德を一定不變なものだと觀たものであつて、一方は之をそのまま、實業界に適用しやうとし、他方は斯る適用を拒まうとしてゐるのである。尤も此等の説を唱へる人々の中にも、道德の進歩を認めてゐる者もあるが、其等の人々は大概、道德は社會の變化の跡を追



ふて行くものゝやうに考へてゐるのである。併し道德は單に社會の變化の跡を追ふのみでなく時には社會進歩の原動力をなすものである。殊にこれは近世期の初めに歐羅巴に於て個人に反省力又は叡智の發達したことが現今の如き實業の勃興の原因をなしてゐるといふ事實が明かに證明するところである。多くの人々は現代に於ける實業の隆盛と云ふことは、實業界の自發的發展の結果であるやうに考へてゐるが、事實は全くその反對で、道德の發達の結果なのである。

此の如く道德は常に進歩し、時代によつて其の内容を異にするばかりでなく、團體や階級の異なるに從て其の内容が異ると云ふことになる。勿論個人なり團體なりの内容や形式は大體似通つてゐるし、又其の間には交通も行はれるから、其等の道德は大體類似したものになるが、併し細目に至ると其の差異は決して少くはないのである。今試みに文明人の道德と野蠻人の道德とを比べて觀るならば、「若し吾々が或る野蠻人に向つて、其の種族の中の一人から僅かばかりの品物を盗み取るのと、隣りの種族に屬する者を殺すのとどちらが悪いかと尋ねるならば、彼等は必ず盗む方を惡いと答へて、吾々のやうに人殺しを惡いとは決して云はない」のである。又同じ文明人にしても、西洋の女尊男卑と東洋の男尊女卑、彼れの主我と我れの沒我などは特に著しい差違である。更らに一國の内でも我が徳川時代のやうに武士の道德と庶民の道德とが全く其の標準を異にしてゐたこ

ともある。かく團體又は階級によつて行爲の標準を異にすると云ふことが最も注目すべき點で、現今の實業道德の問題も亦、實業界に於ける行爲の標準が社會一般のそれと異なる所に存在してゐるのである。即ち一般の社會から離れて著しく發達した爲めに甚だしい變調を來した實業界の活動を如何に整頓し統一して社會一般の秩序と調和せしめるかと云ふことが其の中心をなしてゐるのである。

吾々の指す實業道德は出來合の道德的原理をそのまま、實業界に適應するものゝことではない。若しかゝることを主眼とするならば、今日の實業界の事情は以前とは全く一變してゐるから、そこに起る色々の邪惡に對して適切な處置を取ることが出來ない。吾々の唱へやうとする實業道德は實業界に於ける實際の經驗から歸納した道德のことなのである。隨てその規定する事項は何れも實業の永續と能率増進との爲めに必要なものであり、その禁止する行動は何れも實業を危険の地位に陥れるものである。言ひ換へれば實業界に働く人々が自己の屬する團體に好い影響を及ぼす行爲は之を善とし、悪い影響を及ぼす行爲は之を惡とするのである。言ふ迄もなく實際の經驗から達する道德の見地もやがて既定の道德律に一致することになるが、併し既定の道德律のやうに保守的な形式的なものではなくて、新奇な事情に應ずるものであり、又詳細の點まで規定して



るから、實際上極めて適切で且つ有効なものである。

實業道德の眼目を大體かゝる點に置いて、先づ歐米の實業道德の實況に就て觀るに、近代に於ける自然科学の勃興と機械の發明とが基になつて實業は是迄にない素晴らしい發達をなし、個人には新しい活動の方面が開けて來た。隨て手腕力量のある人は充分にそれを伸ばすことが出来るやうになつた。それに又近代に至つて個人主義的傾向が勢力を占めて來た結果、實業界は營利を主眼とする所で、營利の爲めには如何なる手段に訴へてもよいとされるやうになり、人々が擧つて皆その營利的衝動を充たさうとしてあらゆる機會を利用し、時には他人を偽り世を欺き道德的原理を無視して顧みぬと云ふ風潮が高まつて來た。これが今より凡そ三十年前まで全盛を極めた傾向であつた。

然るにその後に至つて、道德を無視する活動は、結局個人の損失であり、又實業界の破滅であると云ふことが解つて來、實業界に於ても一定の道德的標準を立て、それによつて商品や勞役や金錢の交換を行はねばならぬと云ふ要求が高まつて來た。かゝる所から多くの同業組合では道德法典を設け、實業家の守るべき條項を詳しく規定するやうになつた。されば現今の歐米の實業道德の問題は團體又は組合によつて、それ／＼異つてゐる道德法典をば整理統一して、社會一般に

行はれてゐる道德的原理に一致せしめようとするところに懸つて存してゐる。

翻つて之を我國に就て觀るに、明治維新の際に従來の社會組織が打破されて人々がその去就に迷つてゐた際に、西洋の個人主義的な商工業の法式が輸入された爲め、商工業に従事する人々は我が意を得たりとして利己的に走り、己が利益を得るためには如何なる手段を取つても構はぬものとなし、種々の惡辣不正の行爲を敢てするやうになつた。又社會一般の人々も實業界は營利を主眼とする特殊な社會だとして、實業家の傍若無人の振舞を大目に見た傾向があつた。勿論識者の中には此の現象を深く憂へた人もあつたが、併しそれは一般の輿論となるまでには至らなかつたのである。然るに實業界に於ける不正惡徳が日増しに募るに従つて、斯る行爲は嘗に一般公衆に多大の害惡を與へるばかりでなく、結局實業家自身の損害になると云ふことが漸やく認められて來た。併し我國の實業家には未だ自ら立つて此等の不正惡徳を矯正しやうとする自覺と意氣とが乏しいやうである。されば我國に於ては、社會一般の人々が實業家の行動に注目し、その惡辣不正の行動を指摘し、之を改善するやう彼等に反省と自覺とを促すことが極めて緊急の要件であつて、是れが又我國の實業道德振作の一大原動力をなすのである。されば我國の實業界に於ける道德問題は單に實業界に限られた問題ではなくて、實に社會全體に關する問題なのである。



## 第二章 經濟活動に對する道德的勢力の變遷

## 一 原始時代

原始時代に人類が如何なる生活を營んでゐたか、甚だ不明瞭であるが、併し現今世界の各所に棲息する野蠻人を人類進化の初期と見做し、其の生活から類推して觀ると群集生活を營んでゐたことは確かである。其の初めは結婚上の關係及び必要から十數人の群をなして生活してゐたが、後には敵に對する防禦の爲め多數が團結して互に血縁的關係を生ずるに至り、部族 (Clan) 又は其の集團たる種族 (Tribe) を成したもののやうである。そして此等の群集に於ては、戦争や狩獵は勿論のこと、勞働も祭禮も養護も悉く共同一致して之を行ひ、個人の專斷に出づることを許さなかつた。所で此の一致の行動を滞りなく行はしめたものは全く慣習の力であつた。時代から時代へと傳襲された此の慣習は、當時に於ける行爲の唯一の標準であつて、個人は如何なる行爲も必ず之に據て判断し、新規な事件に遭遇した場合には必ず之に聯關して解釋したものである。そして此の如き偉大な權威を慣習に認められたと云ふのは、其の背後に一の神靈が存在すると信

ぜられたからである。現今の野蠻人種の間にも尙は殘存してゐるタブー (Taboo) と云ふ戒律の如きは其の最も著しい例で、或る人又は物體に對して一度それが布かれると、其れに觸れた時には見えぬ神靈から祟りを受けるものとして、人々は忌み恐れて、誰れ一人其れに觸れる者はないのである。是に依て觀ても、慣習の權威は神靈を連想する所から生ずることが明かである。されば此のタブーの如きは象徴的性質を帯びた一の宗教とも云へるが、併し現今吾々が指して宗教と呼ぶものとは大に其の趣を異にし、現今の道德、輿論、法律等も含んでゐるので、此れは種族間に存する他の慣習と同じく一の社會精神と云ふべきである。

是れに由て見れば、此の時代に於ける經濟上の活動は、全く共同又は集合に依て行はれ、個人的活動の方面は殆んど認められなかつたのである。されば若し吾々が道德を廣義に解して、社會に於ける規範だとするならば、かゝる協同動作に叛いて自己の利益を圖らんとするやうな個人に對しては、慣習を墨守する社會一般の人々が擧つて懲罰を加へたもので、此の點からすれば、經濟は全く道德の勢力の下に踰踏して居たとも云へるのである。



## 二 農耕時代

進んで農耕時代に入り、各人が一定の土地に定着し、食料を培養するやうになると、將來の目的を認め、其れに達する爲めに辛抱強く働かねばならなくなる。左うなると漁獵の場合のやうに一時的興奮や冒險的勇氣よりは、將來に對する先見、目的の持續、衝動の抑壓等が必要になつて来る。そして此の先見の働によつて、過去に於けるが如き缺乏空腹の苦しみ經驗は再び之を繰返すまいとし、一度獲得したものは將來の用途に供する爲めに貯蓄し保存するやうになる。更らに斯る先見の働が目前の衝動を抑制するやうになると、個人主義的傾向が生じ、其れが他人と對峙する時に、利己主義となつて現はれ、自己の苦心して獲た物をば遊惰に耽つてゐた他人に願つことを欲しなくなる。そして斯る主我性の發達が纏て自己の必要品を自己で調達しようとする所謂自足自給の個人的經濟時代をなすのである。

乍併こゝに注意すべきは、この時代にも尙ほ戦争が絶えなかつた爲め、從軍と云ふことが此上なき光榮とされ、之に適する勇氣又は強壯等が最も尙ばれ、質實な生産的勞働の甚だしく輕蔑されてゐたことである。かのタシクスの言の如く「少しの血を流さへすれば得られるものを、額

に汗して集めるほどもどかしい愚かなことではない」と考へられてゐた。されば農業や其他の生産的勞働は多く捕虜とか奴隸とか婦人の手で營まれてゐた。そして此等の者は屈從的狀態に在つて其の收穫の多くは自由民に捧げてゐたと云ふ事情が、此の時代に於て既に萌してゐた主我性を殆んど屏息の状態に陥らしめたのである。

## 三 商工業に對する古代人の見解

然るに商工業が發達して、個人が自己の利益の爲めに他人を相手にして産業や交換を營むやうになると、自づと個人的自覺が高まり、主我性を露骨にむき出して来るやうになる。そして個人の主我性が強くなると、其の見解が狭くなり、國家とか社會とか云ふやうな大きな目的は顧みなくなる。斯る傾向が商工業者の間に次第に募つて來たが爲めに、古代の希臘羅馬の識者は商工業を賤業として輕蔑した。例へばソクラテスの如きは「家内工業に従事する人々は、終日室内に閉ぢ籠り、時に依つては終日爐邊で之を營むことのあるが爲めに、自然、身體は弱くなり、氣力は衰へ社會に一大事の起つた場合にも、充分に盡瘁することが出來なくなる。だから是れは尙ぶべきものではない。そのみならず家内工業に従事する人は他人とか公共の利益とかを慮る暇がな



いから、朋友や國家の爲めに毫も役立つ所がない」と云ひ、又プラトンは「手工業にたづさはると其の主義が低くなるから宜しくない。又其の身心を不具ならしめる傾向がある。苟も市民たるものは手仕事に従事してはならぬ。何故なれば國家の安寧秩序を保たうとする人は大なる勤勉と知識とを要し、斯る二流に位する職業に従事する暇などは到底ないからである」と述べ、アリストートルは「貴族政治の行はれてゐる社會に於ては、工匠や勞働者は市民とは云へない。何故なれば市民は徳と功績とを積むべき人だのに、工匠や勞働者の生活は徳を養ふといふことがないからである」と説いてゐる。

羅馬人の考も略ぼ是れと一致してゐた。其の代表者たるシセロの説に依て觀ると、吾々は自己の勞働に由て利益を得る所の雇人を賤しとする。何故ならば彼等の賃銀は其の隷屬の報酬だからである。次には小賣商人を賤しとする。何故ならば彼等は最も下劣な嘘を云つて成功する者だからである。凡て此の不誠實ほど下賤なものはない。又凡ての工業は其の職業上から觀て下賤である。何故なれば工場には紳士にふきはしいものは何も無いから。殊に肉屋とか料理人とか漁師とか云ふやうな、人の肉慾を充たすやうな職業が最も感服しない。之に反して醫術とか建築術とか藝術とか云ふやうな多くの智力を要し又其の効用の大なるものは尊敬すべきである。商業は小規模で營

む時には下劣であるが、若し大規模で營み、世界の各地から多量の商品を齎らし、詐偽を行はず正直を以て多數者に食料を給する時には、別段輕蔑すべきものではない。乍併若し商人が其の得たる利益で満足し、商業を止めて、自己の貯へた財産で生活するならば其れは最も賞讃すべきものである。併し凡ての實業の中で農業ほど人に取つて好適な又愉快な職業は他にはない。

今此等の見解と吾々の考との間に如何ほどの徑底があるかを示す爲めに假りに之を現今の場合に當て嵌めて見ると、鐵道株の賣買に由て金を儲ける人よりも汽車に停止を命じて掠奪する人の方が道徳上尊敬すべき人だと云ふことになる。何故なれば汽車を差し止める人は其生命を賭して勇ましく戦ふのであるから、正々堂々の態度に出たものである。此の場合に金を奪はれるのは臆病の爲だから其の方が悪い。然るに株を安く買つて高く賣る人は少しの危険も冒す所なく、而かも自己に信賴してゐる人々を掠めて金を奪ふのだから、甚だ卑劣である。

#### 四 基督教の影響

基督教の現はれてからは手工業を希臘のやうに輕蔑はしなかつた。それは基督が大工の家に生れ、其の使徒や信徒が大概勞働階級に屬してゐたと云ふことが重なる原因をなしてゐる。乍併基



督教の主眼とした所は地上の事ではなくて、天國を求めることであり、此世の財寶を集めることではなくて、天國の財寶を積むことであつた。されば貧乏と云ふことは基督の生涯であつたばかりでなく、其の教訓でもあつた。貧しくとも心の清き者は幸福である。天國へ行かれる資格がある。之に反して心の賤くして富める者は來世に於て必ず神の刑罰を受くべきものである。「金錢を慕ふのは諸の惡事の根なり」とされた。

この思想は中世に至つても最も強く人心を支配し、不義にして富むと云ふことが此上もなく卑むべきものとされた。

「金錢を慕ふは諸の惡事の根なり」と云ふ使徒の言を記憶せよ。富は汝の幸福の一部をなさぬことを記憶せよ。又富は汝の精神を誘惑し、危険を齎らすことの少なからぬを記憶せよ。……基督が富に對して多くの訓戒を與へ、此の世の富の愚であり、危険であり、憐むべきものであること、及び富める人は救はれぬと云ふことを述べたのは無意味ではない。

### 五 中世紀の傾向

斯く希臘の昔から商工業は頭下し輕蔑されて其の採るべき手段に就て懇切なる指導を受けなかつたが爲めに、此等の業務に従事する者は道德の埒外にあるものだと自ら卑下して益々不義を敢

てしたやうである。乍併、他方から觀れば、社會の發達に伴ひ商工業の必要が次第に増加して來て、其の實際の勢力は世人の好惡を以て容易に之を動かせなくなつた。其所で社會に實業の必要なことを認めた人々は、之に對して輕蔑的態度を取るやうな道德的勢力からは須らく分離して獨立の方針を取るべきものとした。かゝる意見は主として羅馬の法律家によつて主張され、パールの如きは「賣買の場合には、價值の多いものを安く買ひ、價值の少ないものを高く賣り、人を出し抜いても構はぬ。それが人々の自然的權利である」と云ひ、之を以て民法の根本原理とした。乍併、道德と經濟とは何れも人類の生活にとつて必要缺くべからざるものであるから、斯く互に離反させては宜しくない。何とかしてその間の調和を圖らねばならぬ。斯う云ふ考が中世の後半期に至つて生じた。其の代表者とも云ふべきトーマス・アクイナスの意見に依れば、商業は必要なことで、其の利益も或る程度までは正當である。悪いのは利得其のものではなくて、貪慾又は無制限な欲望である。若し物價が其の品物の生産費を現はすものであるなれば、其れは正當なものである。斯る正當な價格を以て商品をば其の需要される時や場所に向つて供給するならば、其の人は社會に對して有用な職能を營むものである。乍併社會に商品の稀少なのを附け込んで高値で賣り附けるのは甚だ宜しくないと云ふことになる。



以上述ぶる所に由て観ると、經濟活動は其の初め、慣習道德から分化して、其れと相對立し、更らに其れに對して反抗し、再び其れと調和するに至つたもので、此の徑路はヘーゲル(二二)が辯證法に於て述べた正、反、合の順序を追ふたものと云へるが、併し調和と云ふ點は一時的なもの、或は寧ろ外觀上のものであつて、未だ其の完きを得たのではない。されば其後に至つて經濟界が進歩發達するに従つて、經濟行爲は道德的標準より益益離反するに至つた。

#### 六 近世の初期

一 道德力の殘存。經濟行爲に對する道德の制裁力は十七八世紀の頃に至つても尙ほ存續してゐた。この時代に論議された經濟行爲は重に競争に關するものであつた。即ち商人が互に競争して他人の顧客を奪ふと云ふのは己の欲せざることを人に施す勿れと云ふ原理に悖るものとして固く戒められたのである。西紀一六二七年に發布された獨逸サクソニー州の規程では「商人は他人の顧客を自分の方へ引き入れてはならぬ。又其等の顧客が他人の店で買ふのを妨げてはならぬ」とある。他人よりも安く物を賣ると云ふことは紳士的でない。斯る行爲をする者は幸福の身となれぬと非難されてゐた。併し是れよりも一層攻撃の激しかつたのは廣告である。「吾々の時代には安

賣りと云ふことが嵩じて或る人々は他の人々よりも安く賣ると云ふことを公然と廣告するやうになつた」と云はれてゐた。佛蘭西に於ても廣告に對する非難の激しかつたことは十八世紀の後半に於ける文書によつて認めることが出来る。西紀一七六一年の規定によつて見ると、自己の商品が普通の値段よりも安いと云ふ廣告するのは商人が困窮した時に最後に採るべき手段であつて、斯る行爲の非難すべきは云ふ迄もないとされてゐた。(二五)尙ほ此の規定の中には商人が顧客を得んが爲めに諸方を駆け廻り、自己の商品に對し他人の注意を惹かんが爲めに引札を配ることを禁じてゐる。(二六)其の他、仲間の商人を犠牲にして自己の利益を圖らうとするやうな行爲は悉く禁止されてゐた。

二 功利主義。併し此の時代に道德上から經濟活動を掣肘しやうとした斯る勢力とは反對に經濟上より道德に接近した思想があつた。人智が進み社會が發達すると、商工業者が狡猾や詐僞によつて一時の利得は收め得やうが、其れが何時となく世間に知れ互り、顧客の信用を害し、結局己が職業の破滅を來たすことになる。されば若し己が職業の繁榮を圖らんとせば、道義を守り顧客の信用を得ねばならぬ。假令自己の利益を求むるにしても、其の手段又は方便として道義を守らねばならぬ。道義を守るのは結局自己の爲めであると云ふことを經驗上から知るに至つた。かの



「正直は最良の政策である」<sup>(一七)</sup>と云ふ諺は正直を守る方が不正直な事をするよりも一層多く快樂が得られるから、結局得策だと云ふ觀念から生じたものである。

かく實業家が自己の成功の必要上から道德を守ると云ふことは、取りも直さず物質的幸福の爲めに道德を守ると云ふことで、「幸福は凡ての人的行動の適當の目的なり、凡ての正行爲の標準なり」<sup>(一八)</sup>とか又「裨益、便利、快樂、利福、幸福又は不幸を其の關係者の上に與へる傾向のある事物の性質を功利となす」<sup>(一九)</sup>とか云ふ功利主義の思想と一致するものであつて、是迄道德から懸け離れてゐた經濟が、再び道德に接近して來たものと云ふべきである。そして是れが十六世紀から十八世紀まで最も勢力を占めてゐた思想であつた。伊太利の商業が最も盛んであつた十五世紀に於てアルベルチは「己が一家の成功したのは單に營業上に於ける鋭敏ではなくて、全く商業上に於て正直を守り、全智全能の神から報酬を受けた爲めだ」<sup>(二〇)</sup>として自國の商人に對して頻りに此の主義を鼓吹し、降つて十八世紀には米國のフランクリンが又盛んに之を唱導した。フランクリン曰く「悪行は禁止されるが爲めに有害なものではない。有害だから禁止されるのだ。されば此世に於て幸福たらんとする人は須らく有徳ならんことを欲すべきである。……實直と廉直ほど隣人に幸福を與へるものはないのである。」<sup>(二一)</sup>

## 七 近代の變化

一 舊道德の打破。然るに近代に於ける經濟上の著しい進歩は再び經濟行爲を道德的制裁から隔絶せしめた。近代に至り多額の資本を以て大規模の生産を營む所の企業が勃興したと云ふことは、經濟上に於ける一大進歩である。何となれば此れは廉價を以て多量の生産物を供給し、物品を迅速に送達して、富と利益とを著しく増進するからである。今此の中の物品送達と云ふことを取り出して、其れが以前には如何に緩慢であり、そして其れが又如何に當時の道德と聯關してゐたかを示すものとして次に興味ある一例を擧げて見やう。それはデフォアの著「完全なる英國の商人」の中にある話である。ウイルトシャイアで製造された羅紗がノースハンプトンで小賣されるまでに四人の手を経ることになつてゐる。即ちウイルトシャイアの製造人は自己の製造した羅紗を運搬人に託して倫敦の間屋に渡す。そうすると此の間屋が其れを呉服屋に送る。この呉服屋は更に其れを運搬人に託してノースハンプトンの商人に賣り、この商人からノースハンプトンの住民が羅紗を買ひ受けるのである。斯く多くの人の手を経るのであるから、其の度毎に口錢が付き、値段の高まるのも亦己むない次第である。所が茲にノースハンプトンに一人の富裕なる商



人があつて、この手續の迂遠なことを知り、ウイルトシャイアの羅紗製造人に交渉して、直接それから羅紗を買ひ受け、其れを荷馬に託してノースハンプトンに取り寄せたとする。この際彼は羅紗製造人に向つて、現金で支拂ふから、倫敦の間屋が呉服屋に賣り渡すよりは一ヤードに付半クラウン安く賣つてくれと申込んだとしても、其の製造人に取つては倫敦の間屋に直接賣り渡すよりも高價に當るのであるから、恐らく其れを承諾するであらう。かく彼は同じ品物を隣の商人が買ふよりも一ヤードに付半クラウンだけ安く買ふことになる、若し隣の顧客を奪はうと思へば自由に其れを奪へるのである。單に隣の店の御客ばかりでなく、多くの人々の職業まで奪ふことが出来るのである。先づウイルトシャイアから倫敦への運搬人、次には倫敦からノースハンプトンへの運搬人、更らには倫敦の間屋及び呉服屋が其れである。そして其の利益を占める人は誰かと云ふに其れは言ふ迄もなく、一ヤードに付半クラウン安く買ふ所のノースハンプトンの豪商である。斯う云ふことになると思ふ人が益々金持になる譯である。是れが道德的だと云へるだらうか。否々是れは商業の流通を杜絶し、多くの商賣人の職業を奪ふものである。若し斯う云ふことが一般に行はれるやうになれば、英國に於て現今裕福な生活をしてゐる百萬の商人は職業を失ひ、其の家族は路頭に迷ふに至るであらう。

是れがデフォアの書に述べてある大要である。

この様な見解は多量生産とか、交通の迅速とか云ふやうな所謂「經濟的裝置」の擴張を以て經濟上の一大進歩となし、斯る進歩が聽て又文明の進歩に取つて必要缺くべからざるものとしてゐる現代人の眼からすれば甚だしく迂愚の話である。想ふに經濟が因襲的な道德から分離して其れ自身の目的を明かに認め、其れに向つて直進すると云ふことは、單に經濟活動其のものに活氣を呈せしめるばかりでなく、斯る分化は聽て社會に取つての一大進歩である。さればこの場合に舊組織を墨守する人が犠牲となるのも亦己むを得ないこと、云はねばならぬ。

二 實業界の分離。併し其れが極端に走ると、實業界が道德の制裁から脱却することになる。

近來實業界が純然たる實利を目的として集合的非人格的に組織され「商賣は商賣だ」といふ格率に依て凡ての行爲を律するやうになつたと云ふことが、實業家の行爲の標準——從て德の内容を著るしく變化せしむるに至つた。今假りに勤勉とか節儉とか正直とか云ふ德に就て觀るに、此等は極めて特殊な専門的な意味を持ち、従前の如く實業家の一身上の德ではなくなつて、其の事業の上に働く力と云ふことになつた。換言すれば個人の意力の支配から脱した、實業上に於ける客觀的原理となつた。されば勤勉てふ德に就て云ふならば、以前には個人が或る方向に向つて其の意



力を充分に集注するのが勤勉だとされ、斯る習慣を積んだ人は自ら進んで其の仕事に取り掛かるものとされたのであるが、今では個人が實業界全體の歩調に壓されて働くことになり、最早や徳を履むのではなくて、必要に迫られて已むなく働くのである。昔は職工は其の道具を勝手に使つたものであるが、今では器械に促されて働かねばならなくなつた。節儉も是れと同じことで、事業の上に於ては、一厘一毛一砂一塵も無駄にせぬといふことが、益々必要になるのであるが、私の生活に於ては華美贅澤を盡し、其れが新社會の中流生活に取つて必要な要素だと考へるやうになつた。又正直でふ徳にしても、個人的性質から轉じて職業上の活動に移り、現今正直だと云はれる人は職業上に於てたよりになる人、言ひ換へれば報酬を間違なく支拂ふ人か、左もなければ其の經營する商會なり銀行なりの評判の良いといふことであつて、その人の私行上に於ては嘘偽を云つても構はぬと云ふことになつた。

三 營利心の發達。 是れは經濟界が道徳と背馳した例であるが、個人に於ても是れと同じ變化を來たしてゐる。近代の實業家は以前の人のやうに其の事業に人情や義理を挿むと云ふことはなくなつて、營利一方に向ふやうになつた。假りに之を藥種屋に就て觀るならば、其の藥を賣る場合に昔は病人に効果あらんことを希つたものであるが、今では金さへ得れば、病人に効果があら

うと無からうとそんな事には少しも頓着しないのである。かく營利てふ物質的利益が主眼となつて來ると、其れに對する手段たる技術上の能力のみが尊ばれるやうになる。されば近代の實業界では、投機とか經營とか簿記とか計算とか云ふやうな、技術的方面は異常の發達を來たしたが、併し行爲に於ける精神的又は主他的方面は、之を無視没却するやうになり、人心は甚しく皮相淺薄に傾いて來た。殊に其の行爲の對象が貨幣のみとなり、選擇事項が唯一つに限られて來た爲めに、問題は性質又は種類に關するものではなくなつて、全く分量に關するものとなり、各自何うにかして金錢を多く獲やうとして焦り、他人の利益は毫も顧みぬばかりでなく、時に依つては其れを蹂躪したり犠牲に供するやうになる。そして斯る傾向が偽製、濫造、贈賄、違約、詐偽、瞞着等の不正惡徳の原因をなし、社會の風紀や秩序を紊すること決して尠しとしないのである。

#### 八 最近の狀況

近代に至つては實業は營利を主眼とする特殊な世界だとされ、物質的利益が實業に従事する人々の唯一の目的だと考へられるやうになつてから、人々は利益を得るが爲めにはその手段を擇ばず、對手を偽り、他人に損害を與へ、多數者を犠牲に供しても平氣であると云ふやうになつた。



殊に同業者の間の競争が激しくなつたために、實業に従事する人々は他人に負けまい、否寧ろ他人を凌がうとして種々な悪辣不正な手段を講ずるやうになつた。或る商會ではその競争者を驅逐しやうとして法外な廉價を以て商品を賣却する。或る製造業者は競争に勝たうとして製品の品質を粗悪にする。或る商店では價格を決めずに、人により時に應じて掛値をしたり割引したりする。又或る製造會社では職工に夜業をさせたり又職工の賃銀を値切つたりする。そして景氣の好い時には無闇に設備を擴張するが、景氣が悪くなると忽ち事業を短縮して無慘にも多數の職工を一時に解雇する。

實業界の斯うした亂脈によつて最も損失を蒙るのは顧客である。顧客は品物を買ふ度毎に値切つて、適當の價格を探し當てねばならぬ。商人の巧言詐欺に乗せられぬやう細心な注意を拂はねばならぬ。『買手は充分に用心するがよい。』(Let the buyer look out!) と云ふのが實業界の警語となつた。

併しかゝる實業界の亂調は、單り顧客に迷惑を及ぼすばかりでなく、實業家自身の不評判となり、結局實業界の破滅となるのである。此の點を心ある實業家は次第に認めて來て、何とかして之を救済しやうとする氣運が高まつて來た。その最も目醒ましいのは米國である。<sup>(三五)</sup>

米國では實業家が各自無檢束で無法なことをしてゐては充分な利得と満足とが得られず、結局己が業務の破壊となる。實業の使命は同胞の福祉の増進を圖るにあるのだから、正直と公平と奉仕とが實業家の最良の政策であると云ふことを強く認め、この十數年來數百の實業團體が道德法典又は實業上の行爲の標準を定め、それによつて競争者なり又顧客に對して公明正大な態度に出でやうとしてゐる。そして此等の團體では是迄のやうに、法律や政治にのみたよらずに、實業上に於ける行爲は各自之を統制するのがその責務だと感じ、實業が却て法律や政治の役目を大部分引受けるやうになつた。かくして過去數世紀に亘つた實業界の反道德的傾向は今や道德の本道に戻つてしかとその足を踏みしめるやうになつた。



## 第三章 我國民性と營利心

我國に於ける經濟的發達の階段と經濟的行爲に對する道徳的評價の變遷とは大體に於て上に記した歐洲に於ける其れと同じ步調を取り、階段としては、漁獵時代、農耕時代、商工業時代の順序で進み、道徳的評價としては、希臘の哲學の位置に儒教、基督教の位置には佛教が立つてゐた。そして近代に於ける實業の發達に至つては我國は歐洲よりも遙かに飛躍的だと云ひ得るのである。

併し是れは極く大體の觀察であつて、一步立ち入つて觀ると、我國には一種特別な國民性が存在してゐて、それが經濟的活動の上に明かに現はれてゐるのである。國民性の根源が其の國民の先天的素質に存することは勿論であるが、併し國民性は更らに地理的環境の影響や、政治的經濟的文化的活動の加はることによつて發達するものである。我が國民の天賦の素質の如何なるものなるかは容易に決め難いが、古典を通じて觀るに生命を尊崇し、その彌榮を欲する生々發展的傾向が特に際立つてゐたやうに思はれる。それは四面海を以て圍まれてゐるとか、風光明媚で氣候が溫順だとか、地味が肥沃で天産が裕かだとか云ふやうな環境の影響を受けて身邊の風物に對して

満足するといふ樂天的な特性を形づくるに至つたやうに思はれる。それは彼の天照大神が天鈿女命の舞の可笑しさに笑ひ興じた神々の笑ひ聲に誘はれて天の岩戸から再び此の世に出られた時に八百萬の神が一齊に笑つて「あつ晴れ、あな面白、あな手伸し、あな明け、おけ」と歡呼されたとか云ふ話が明かに證明してゐるが、尙ほ其の外に、「寶の山」とか「蓬萊山」とか云ふ金銀財寶に満ち／＼した樂天地が存在するものとして想像してゐた話や、かゝる物語の終をば必ず「めでたしめでたし」で結んでゐることや、「笑ふ門には福來る」と云ふ諺や「鬼は外福は内」の傳説などは孰れも皆斯る特徴を示したものである。ところで此の樂天と云ふことには必ず現在のと云ふことが含まれてゐる。吾々は現在の世の中を樂天地だと思へばこそ笑ひ興じてゐることが出来るのである。若し死だとか未來だとか云ふことに考へを及ぼしたならば、何うしても樂天的ではゐられないのである。かの大伴の旅人の

生ける人遂にも死ぬる物にあれば

今世なる間は樂しくを有らな

と云ふ歌などは最も明らかに此の現在の樂天主義を現はしたものである。

そして古代の人々は實業も亦斯る見地から觀察してゐた。萬葉集に山上憶良が意氣青雲の上に



在る人を戒めて詠んだ

久方の天路は遠し尙々に

家にかへりて業をしまさね

と云ふ歌がある。こゝに憶良が業と云つたのは父母妻子を養ふ本務を指したのであるが、併し之を一層廣く解して其の職業をも含めて見ても差支ないと思ふ。斯く観ると天上の理想と云ふやうなものは遙かに懸け離れてゐて、吾々には追ひも附かぬものだから、そんなものに憧れることは止めて家に歸つて自分の業務に勵むるがよいと云ふ意味を指したものである。是れは一見、知足安分を説いたものゝやうにも思はれるが、併し其れよりは自己の現在の境遇の價値を認めよと云ふ現在の樂天主義を説いたものである。

その後佛教が傳來してから、此の特徴は殆んど一變した。脱俗厭世主義の佛教が現在の樂天主義の我が國民に採用されたと云ふのは、それが無邊の福德果報を生ずとされた爲めで、この點から又佛教が永らくの間人心を支配してゐたものである。されば佛教は初めの間は皇室の御不例を救治するとか、國民に豊作や幸福を齎らすとか云ふ息災延命の原動力として其の生命を有してゐた。そして此の幸福の爲めに利用すると云ふ態度は一轉して、その鬪弄となり、其れが「知らぬ

が佛」「佛の顔も三度」「借りる時の地藏顔、返す時の閻魔顔」「百日の説法屁一つ」の俚諺さへ生ずるに至つた。

然るに其後人文が開け智力が増進するに従ひ、この教が人心の要求に應じて其の奧秘にまで浸み込むやうになつたが、この場合に最も強い印象を國民の上に與へたのは死の問題と其れと連關した來世の觀念とであつた。是迄人々は死と云ふことは考へず、假令其れが心に浮んでも、現在の快樂を以て強いて之を打ち消してゐたのであるが、死を當面の問題とする佛教によつて、現在斯く愉快な生活を送つてゐる吾々も遂には死なねばならぬ。幸福とか名譽とか云ふのは塵の世のことで、生命は無情の風の前の燈火の如く忽ちにして消え去るものである。されば吾々は死後に於て往くべき世界を想ひ、そこをも支配してゐる宇宙の絶對力に歸依することに由て安堵せねばならぬと濕々と説き聞かされて、初めて眞面目に死の問題を考へるやうになり、是迄生を樂み、自然と親んでゐた國民は、因果應報とか輪廻轉世とかいふ理法に對する小心な畏服者となり無心な子供のやうに其の日／＼の樂に追はれてゐた民衆は、氣に弛みのない老人のやうに先々までも考へるやうになつた。隨て從來大雜把な間に合せの行動を採つてゐた人々も來世の懲罰を恐れて不義不正を避け、從來情欲名利に走つてゐた人民も涅槃の境地に憧れて戒律を守り、情欲を禁斷



するやうになつた。

この佛教と前後して傳來した儒教は一方に於て佛教の空寂な來世主義とは反對に實生活に即した適切な徳目を掲げ、佛教の寡慾恬淡てふ眼目に對して不義にして富み且つ貴きは浮べる雲の如しと點睛し、國民の道徳心の發達に對して多大の貢献をなしたものであるが、同時に又惑はざる智を説き、大道を知る賢者を尊んだ此の教は、佛教の理觀の力調と合體して、樂天的な我が國民を甚だしく合理的裁智的ならしめた。

そして是れが商工業の發達に連れて、益々我利貪慾に傾きつゝある人心に對して其の反省を促し、各自の本分を明かにする有力な制裁力となつた。かの「徒然草」の中に兼好法師の引いた或る金満家の

「人はよろづをさしおきて、ひたぶるに、徳をつぐべきなり。貧しくては生けるかひなし。富めるのみを人とす。徳につかむと思はば、すべからくまづ、その心づかひを修行すべし。その心といふは、人間常住の思に住して、かりにも、無常を觀することなかれ、これ第一の用心なり。つぎに、萬事の用をかなふべからず。人の世にある、自他につけて、所願無量なり。慾に従ひて、志を遂げむと思はば、百萬の錢ありといふとも、しばらくも住すべからず……次に、錢を奴の如くして、つかひ用ゐるものと知らば、長く貧苦を免るべからず。君の如く、神の如く、おそれ尊みて、したがへ用ゐることなかれ。次に、耻に臨むといふとも怒り恨むことなかれ。次に、正直にして約を固くすべし。この義を守りて、利を求めむ人は富の來ること、火の乾ける

につき、水の下れるに隨ふが如くなるべし。錢積りて盡きざる時は、冥冥に色を事とせず、居所をかざらず、所願を成さざれども、心とこしなへに安く樂し」

の如きは當時に於ける一般思想を代表せるものである。ところで斯やうに人が其の幸福の爲めに財産を積み、財産を積まんが爲めに道徳を守らうとする打算的態度は一の功利主義であつて、かゝる思想は商工業の一通り開けた所ならば何處にも見出されるのである。十五世紀の頃伊太利の商業の盛況を呈した時アルペルチがかゝる主旨を以て自國の人々を戒めたことは上に述べた所であるが、今左に十八世紀の初頭に於て商業發達の氣勢を高めた時に英國に現はれ、其後に於ける歐米の通俗的功利主義の淵源をなすものとされてゐるデフォアの著「完全なる商人」の中を觀ると

「商人は贅澤を慎まればならぬ。贅澤は熱病のやうに人の心命を侵害するものである。商賣は盛裝を凝らした人々が其れよくの役割を演ずる舞踏ではない。卒直な飾り氣のない正直を交はすべき、裁智と儉約とで堅められた舞臺である。そして斯る裁智と儉約とを守つて生活する人は必ず財産を積み、其の出費を收入以下に切り詰める人は常に榮えるが、然らざる人は必ず零落する。」

とある。是れと上に引用した金満家の説とを比ぶれば、其の主旨に於て符節を合するが如きも



のがある。

乍併わが兼好法師は斯る普通の功利主義よりも一頭地を擡でてゐたことを忘れてはならぬ。兼好法師は一般の人々のやうに人生の理想を物質的幸福とはせず、自然の風物に於てあはれを感ずる恬淡な交感融通の生活であるとし、「其の爲めに、朝夕なくてかなはざらんものこそあらめ、その外に何も持たでそあらまほし」と云ひ、更らに

「そもそも人は所願を成ぜむがために、財をもとむ。錢を財とすることは、願をかなふるがゆえなり。所願あれどもかなへず錢あれども用あざらむは、全く貧者と同じ。何をか樂しまむ。このおきては、たゞ、人間の望をたちて、貧を憂ふべからずと聞えたり。欲をなして樂とせむよりは、しかじ、財なからむには、癩疽を病む者は、水に洗ひて樂とせむよりは、病まざらむには如かじ。こゝに至りては、貧富わく所なし。究竟は理即にひとし、大欲は無欲に似たり。」

と教へ、名利に溺れるのは、「命を終ふる大事(五)に接近してゐるのを知らぬ」のである。「身の後には金をして北斗にさそふとも、人のためにぞわづらはるべき(五)」と看破してゐる。吾々は此の思想に於て、佛教の來世的寂滅主義を現實界に移し、儒教の實踐主義を實生活に適用した所の國民性独自の順應力を明かに認め、かゝる恬淡な自足主義が永く我が國民の精神を支配してゐたと云ふことは、單に現實生活の眞義を捉へて國民の歸趨を明かにしたばかりでなく、淺薄な金錢至上

主義に對して最も有力な掣肘を加へてゐたと云ふことに就てその偉大な功績をたゞえんとするものである。

その後戰國の世となり、群雄互に割據して家の子郎黨を養ひ、軍事を専門とする武士でふ階級を生ずるに及び、その目指す所は主君に對する奉仕であり、その重んずる所は現世に於ける功名である所から「大義名分」でふ儒教主義の格率が唯一の標的となり、是迄人心を深く支配してゐた往生寂滅主義は此の格率の實現の爲めに身命を潔く擲つと云ふ精神に移り變つたのである。併しかゝる所にも我國民固有の現實主義が現はれてゐる。

更らに徳川時代に至つて、武士は俸祿を受けて生活し、生産行爲は凡て之を嚴禁された所から、徳其ものゝ爲めに徳を行ふ道義心が發達して來た。之に反して庶民は町人又は百姓と呼ばれて武士の下風に立ち、年貢の上納を強ひらるゝのみで、何等の特權も名譽も與へられぬ爲め、ひたすら金錢利慾に走り、「死ぬまで金銀を神佛と尊び」、そのために徳義も守ると云ふ私欲的功利主義が其の唯一の道德をなすに至つた。



## 第四章 徳川時代に於ける實業道德

## 一 實業家の社會的地位

徳川時代に於て實業家の社會的地位に向つて著しい特徴を與へたのは階級の制度である。是迄とても階級の區別は存在してゐたが、甚だ弛緩なものに過ぎなかつた。然るに徳川氏に至つて、社會の動搖を防ぎ國內の統一を圖るために特に此の制度を嚴重に規定し世襲的に固定せしめた。此の制度は形式的には皇族以外に公家、武家、平民、賤民の四つの階級に分つたのであるが、是れよりも士農工商てふ職業上の區別の方が實際に於て強く行はれてゐた。されば武士は何處までも武士、百姓は何處までも百姓、町人は何處までも町人であつた。尤も中には武士と農民との中間の階級に屬すべき郷土とか、武士と商人の中間階級とも云ふべき御扶持人があり、又百姓や町人の子が養子となつて武士の階級に加はつたものもあるが、其れは極めて稀れな事で、普通、子は父の職業を繼ぎ、百姓は祖先傳來の田地を耕やし、商人は昔ながらの店頭で商ひをし、工匠は家傳の技術を磨いてゐた。

この中で武士は俸録を受け、道義の支持者として庶民よりも一層高い社會的地位を與へられてゐた。是れは永い戦亂の後を受けて、武力によつて國內を統一した徳川氏としては當然の處置である。かく武士が高い社會的地位を與へられては、其の地位の手前、何うしても道義を守らねばならぬ「高位顯官は責任を伴ふ」(noblesse oblige)のである。されば武士は嚴重な訓練と修養とを積み、其の心術に於ても言語動作に於ても、又その容貌に於ても庶民とは異つた高尚な所があつた。之に反して農工商は武士よりは一段低い種屬と見做されてゐた。或は人間以下の者で、「土地に附隨してゐる牛馬よりも一段高い生物」又は「時によると、竹槍、鎗旗を持て騒ぐ危険な動物」位に思はれてゐた。又苗字、帯刀、乗駕を禁じられ、何屋某、何職某、百姓某を以て呼ばれ、武士てふ名前の下には笠一蓋の浮浪人の前にも道を譲り、或は又馬の手綱を取つて叩頭せねばならぬ。若し之を行はぬ時は無禮打とか、切捨御免とかいふ暴慢な所置の下に容赦なく自己の生命をも奪はれるのであつた。

農工商の中では農民が幾分他のものよりも尊重されてゐた。それでも農民の個人的人格が認められたと云ふのではなくて、武士に對して生活の資料を供する一の階級として尊重されたまでのことである。本佐録に「百姓には一年の入用作食をつもらせ其の餘を年貢に收むべし」とあるを



以て觀ても、百姓は自己の生産物の中で、其の生活に必要な最低限度を己が有となし、其れ以上は悉く年貢として武士に献ぐべきものと定められてゐたのである。

併し商人になると是よりも一層輕蔑されてゐた。是れは金錢を賤む武士の氣風が然らしめた所もあるが、其外に又當時商工業の活動の範圍が局限されてゐて、其の功績が餘り多く認められてゐなかつたと云ふやうなことも有力な原因をなしてゐる。

此の如く階級的區別が嚴重に定まつてゐた時代に於ては、職業を變へるとか、社會的地位を進めるとか云ふことは逆も望まれません、たゞ自己の身分、職業を堅く守ることに於てのみ満足を見出さねばならぬ。従て自然に知足安分の處世觀が生ずるのである。例へば

うへを見ず身の程をしり暮しなば

士農工商ともに安樂

てふ歌は最もよく此の傾向を示すものである。又早川賢當の「諸人の業凡例」にも此の思想が明かに述べてある。

天が下四民のうちいづれか業のみ暮さん、苦中に樂あり、樂中に苦あり。

士は智仁勇の三徳をたのしみ、こゝろくるしむ、是分際の際を得て、忠義をはげむ故也。

農は體を泥土にくろしむ、こゝろたのしむ、是定る年貢を奉りて飯食する故也。

工はからだも心もくるしむばかりにて、たゞ名をなしてみて、上手の譽れたのしむ。

商は差有ども、體こゝろともてたのしむは商也、能く三社の御詫宜をもふべし、但元來無祿の者なれば富貴を得るも數代續くことかたし、況今日父母妻子を養ふ渡世に紛れて小商の輩禮儀を過つとも用捨にあづかるべきことなり、依之四列の下座なり。

農民は常に自然に接近し、自然を相手としてゐるから、自己の意志を以て事物を變更しやうとする所なく、自づと安定な精神状態に至り易く、隨て其の日々を樂むことが出来るし、又工匠は其の製品の出来ばえの巧妙と云ふことに於て充分の慰藉を見出すことが出来るから、大概は自己の職業に満足するのであるが、その活動の最も變化に富む商人までが知足安分の思想を抱くに至つたと云ふのは全く四圍の境遇が然らしめたのである。殊に上の引用文の末段に在る「父母妻子を養ふ渡世に紛れて小商の輩禮儀を過つとも用捨にあづかるべきことなり、依之四列の下座なり」てふ句は商人が名譽とか權力とか云ふやうな徳義や特權から全く疎外され、只管、現實の生活其ものに執着せねばならぬ境遇に在るのだから、道德や禮儀などは別段顧みなくとも差支ない、そしてその代りに彼等は其の地位が最も低いのであると云ふのであつて、當時に於ける商人の道義に對する態度を示したものととして興味の深い所がある。



## 二 實業の状況

經濟活動を歴史的發達の上から漁狩時代、牧畜時代、農業時代、商工業時代の五段に區分すると、徳川時代は業務に従事する人々の多數と云ふ點から觀て、農業時代に屬するものと云へる。又この時代を自足經濟から都市經濟、都市經濟から國民經濟と云ふ交易發達の上から觀れば、自給自足の時代であると云ふことが出来る。この時代に於ては米が經濟上の單位で、凡ての財貨は米を標準として見積り、諸侯の収入も武士の俸録も悉く之に依て計上した。そして農民は年貢として米穀を上納する外は、自家の生産せるものは自己の用に供し、その使ふ道具でも、其の着る着物でも悉く自分で造つてゐた。幕府も農業を立國の基礎となし、財政經濟の中心を農本主義に置き、農民に對しては特別の保護を與へて専ら農業を獎勵した。幕府が田地の永代賣買を禁じて農民を其の業に安んぜしめたり、或は倉庫を設けて凶年の用に供したり、又領主が種子の選擇、苗代の手入、種子の交換等にまで立ち入つて世話したなどは其の實例である。農民の側でも斯る政府の懇切な保護に力を得て、各自其の業に安んじて精勵怠らず、使ひ得べき土地は悉く利用し、改良すべき點は充分に改良したからして、農業はこの時代に於て殆んど全盛の域に達してゐた。

之に反して商工業に對しては幕府は甚だ冷淡であつて、寧ろ虐待の態度を採つてゐた。この當時既に藩の所在地に多數の商工業者が居住して武士と農民との間に貨物の分散融通の任に當つてゐたが、幕府は此等の町人を武士と同じ町内に住ましめず、多くは廓外の濠や城壁で隔絶された城下町に住はせたりでなく、商人が動もすると物價を高めたり、奢侈品を賣り附けたり、金銭貸借に關して不正不義を行ふ所から、幕府は米價や酒の醸造高を初め、其他日用品の價格に制限を加へたり、奢侈を挑撥するやうな、工業品の製造を制限し、其の發賣を禁じたり、又貸借上の不正行為に對して嚴罰を加へたりして商工業者の營業上の自由を甚だしく束縛してゐた。

然るに幕府が治政の必要上から設けた參觀交替てふ制度は、單に諸侯の往來すべき道路の改築を促したばかりでなく、其の宿泊すべき驛所、宿屋、更らに通行の手段たる傳馬、飛脚、助郷等の發達をも進め、斯る交通機關の發達が應て又庶民に參詣、見物、遊山、湯治、商用の旅行等の機會を多からしむることに由て、各地の宿驛を賑かにし、此等の宿驛を其の地方に於ける貨物集散の中心地たらしむるに至つた。次に海路の交通は遠い昔から自然の裡に開けてゐて、この時代に至つては、幕府の保護の下に江戸と大阪との間に菱垣廻船、樽廻船等の海運業が營まれるやうになつた。かゝる海路の交通と上に擧げた陸路の交通とが主となつて、古來の帝都たる京都の外に



は江戸及び大阪でふ大都會が發達するに至つた。即ち江戸には大名屋敷の外に商人の居住する下町が出来、全國に於ける消費の中心となり、大阪は交通の便利な土地であつた爲め、各地の物産の集合分散の地、即ち天下の臺所となるに至つた。

此の如く幕府が諸侯の權勢を削がうとして設けた參觀交替でふ制度が商工業の發達でふ意外な結果を來たしたのであるが、是れは社會活動の原動力たる商工業が既に隱約の裡に熟成してゐた爲め、政府が社會の秩序の維持の爲めに採つた政策が、何れも之れの發達に對する刺戟となつたのである。尙ほ此の點を明かにする爲めに個々の商工業組織の内容に立ち入つて觀察して見ようと思ふ。

先づ海路の開拓に由て發達せる問屋組織(六)に就て觀んに、是れは足利時代に其の起源を有したのであるが、其の頃は問丸と稱し、宿舍、貨物の運送及び預り、其他今日の委託販賣を兼ねてゐたそれが徳川時代に至つて、卸賣を專業とするやうになつた。この時代には既に江戸と大阪との間の海運が開けてゐて、貨物運送の任に當つた商人も少くなかつた。然るに海路の常として時々難船にも逢ひ、船頭の悪事も行はれるので之に對して相當の處置を講ぜねばならず、又運賃の決算荷積の監督等色々煩雜な事務のあるが爲め、一人では到底遣つて行けない。其處で多くの荷主

が共同して之に當る必要がある。斯る所から一の共同の組織となつたのが此の問屋である。初め此れが大阪に十組出来、後に二十四組となつた。江戸にも是れと相前後して十組問屋が起つた。幕府でも之に對して保護の方針を採り、貨物の賣買上に於ける特權を與へ、如何なる大商店でも問屋の手を経なければ、原産地から商品を仕入れることを許さなかつた。問屋の方では斯る特權に對する返禮として毎年幕府に冥加金を納め、仲間の間には誓約、規則を設け、血縁者か然らざれば一定の金額を出して其の株を買つた人でなければ之に加はることを許さなかつた。此等の問屋は單に其の手船を以て貨物の運搬を營んだばかりでなく、仲買人や小賣人に對しても直接商品を取引した。即ち各地から輸送された貨物は必ず先づ此の問屋の手にかゝり、其の手を経て仲買人や小賣人に頒たれたもので、原産地の貨物が直接仲買人や小賣人の手に渡ると云ふことはなかつた。されば問屋は此の時代に於ける財貨集散の中心機關であつて、其の大きなものになると宏大な店舗を構へ、船舶倉庫を有し、經濟界に於て一大勢力をなし、天保の頃には、江戸に於ける物價の騰貴は此等の問屋の買占めに基くものとされてゐるのを見ても、如何に當時の經濟界を支配してゐたか容易に推測されるのである。

この問屋と同じく幕府が特權を與へた商人の組合に座と云ふものがある(七)。是れは足利氏の頃に



起り、政府が一定の由緒ある御用商人に與へた營業上の免許であつて、多くは粗製濫造の弊を防がん爲めに生じたものである。そして仲間以外のものが同じ營業を営むことを禁じた一の株であることは問屋と同じである。

次に參觀交代の制度が商工業の發達を促したと同じやうに、幕府の採つた農業に對する保護政策が商工業の機關を發達せしむるに至つた。是れは主として米穀の賣買に關するものである。諸侯が其の領地より徵發する米穀には自己の使用に供したもの、外に多くの餘分を生ずるが、既に貨幣經濟の發達した此の時代に於ては、米を以て直接貨物を交換するのは甚だ不便であるから、勢ひ之を賣捌いて貨幣と代へねばならぬ。是れが爲めには交通の最も便利な大阪が好適である所から、幕府及び諸藩は此處に藏屋敷を設け、商人に入札させ、高札の者に之を賣り下げたのである。されど諸侯自らはこの事に當らず、多くは出入の商人に藏元を托した。是れが掛屋と云はれるもので、後になると是れが藏屋敷の物品拂下の代金を預り、又其の在荷を擔保として金錢を融通する隨一の機關となり、遂に財政上の一大勢力となつた。江戸にも此の掛屋に似た札差と云ふものがあつた。是れは旗下の廩米の受取賣買を請負ふ商人であるが、併し纔かに甲府、田安、一橋、二卿、加州藩に限られてゐて、大阪に於ける掛屋ほどに經濟上の勢力は持つてゐなかつた。

かく大阪に於ては各藩の米穀が賣買された爲めに、其の値段の相場を定むべき取引場が出来、こゝで定められた相場が全國の米價を支配してゐた。又この米取引の方法としては切手賣買から延米賣買、後には張合といふ方法にまで發達した。又この取引に附随した物として、商人の仲間の間に敷金、差引勘定等は一切請負ふ所の遺來兩替てふ機關も生じた。そしてこの米取引が如何に盛であつたかと云ふことは、大阪の堂島に米問屋が二千軒、仲買の數が千人ほどあり、江戸堀には現金店といふ相場師共が結構に暮すなりと「世事見聞録」に在るを以て觀れば略ぼ察せられる。尙ほ此れと聯關して兩替屋てふ金融機關の活動したことや、爲替手形などの發達したことは注目すべきである。

商工業が此の如く隆盛になると、其の因となり果となつて多數の富裕者の生ずるは當然のことである。「大阪は商の景氣も賑はしく損徳あらく、運と考へとがよければ俄かに大身上に成る人も多し」とあるが如く、一代分限者も少なからず生じた。そして此等の富豪が經濟界を支配してゐた。之に反して幕府及び諸侯は、永らくの泰平に慣れて、遊惰に耽り、奢侈を事とした爲めに次第に金策に窮するやうになつた。幕府は其の初め問屋、座其他の仲間組合に特權を與へた代りとして徵集してゐた冥加金だけでは不足を感ずるやうになり、後には町人に對して大びらに御用金



を仰付けるに至つた。是れは幕府が其の政權を以て町人の金權を支配してゐたことを示すものであるが、同時に又經濟上の權力が町人の手に移つたことを示すものである。殊に斯る金權の移轉に隨つて生ずる現象を面白く物語るものは次の事實である。文化十年に米の出來がよくない割合に米價が上らぬから、幕府で其の原因を調べて見ると、御用金を仰付かつた町人が儉約を専らにする爲め、金銀の融通がわるく取引に差支へて自然と米價も引立たぬと知れたので、幕府は兼々奢侈を戒め儉約を勧めた手前も憚らず、米價が引立てば諸大名の手許は裕かになつて町人の用立てた金銀の返却に都合もよからうから各自引受けた御用金だけの用意さへあれば此上何も遠慮には及ばぬから平常の通り手廣に取引をして餘り儉約をせぬやうにせよと達してゐる。<sup>二三</sup>かくの如く幕府が草創の當時には、最も重んじた儉約の布達をも撤回せねばならぬことに至つたのは、如何に幕府が財政上に於て困窮してゐたかを明かに示すものである。諸侯も亦甚だしく財政に窮するやうになり商人から借財するものも多く出て來た。幕末には大名貸して倒れた大賈巨商も少くなかつたが、是れは身分の高い大名から強いて取立てることが出來ない、言ひ換へれば債權者が債務者に向つて十分に債權を主張することが出來ないと云ふやうなことや、又金を貸した爲め武士てふ身分に引き上げて貰つたので其の義理合上催促が出來ぬとか云ふやうに、主として身分の相違

が原因をなしてゐるやうにも思はれるが、其れは別として、かゝる倒産者が多く生じたこと云ふ反面には、諸侯が富裕な町人にたよつて金策を講ずるに至つたと云ふ物寂しい光景が動いてゐる。以上に述べた所を掻い括んで見るに、徳川幕府は、初め商工業を輕視して殆んど其の存在を認めなかつたが、商工業は社會の實際の必要上から、自然に發達して來て、後には幕府は財政に關しては商工業者に依頼せねばならなくなつた。事實又商工業者が財政上の實權を握つてゐた。乍併商工業者は階級的には常に壓迫を受けてゐて、富裕な者と雖も幕府の道具として使はれたものであつた。此等の事情が次に述ぶるやうな實業家の道德を形成するに至つた。

### 三 實業道德

階級制度が世襲的に固定したと云ふことが既に實業家の活動に對する一大制限である。彼等は地位の榮進とか職業の變更とかは到底望むことが出來ず、又開拓すべき活動の分野が悉く塞がれてゐるのである。そこで祖先代々仕來つた家業に従ひ、家法とか風俗とか格式とか、商の道とかに従ふより外に取るべき途がなかつた。換言すれば慣習が行爲の唯一の標準であつた。されば若し個人が新規な欲望や、奇抜な考を起す時には、人心の動搖を氣遣ふ幕府から嚴重に罰せられ



たものである。圖子口と云ふ長崎問屋が同じ町人から千四五百貫程金を借りたが商賣上の手違ひからどうしても其の金が返せない。債権者は争うて之を取らうとしたが、どうしても取れないので、遂に町奉行に訴へた。町奉行は圖子口に返せと命じた。併しかく命令されても圖子口は返すことが出来なかつた。そこで町奉行は町人の分際で千貫餘杯といふ大金を借り込んで其れが返せぬのは甚だ不届の至りだとして、時の奉行板倉周防守は彼を磔刑に處したと云ふ話がある。<sup>(二三)</sup>借金が返せないといふ理由で磔刑に處するなどは、現今の人の考からすれば甚だ残酷であるが、平安の維持を主眼としてゐた當時の政府の立場からすると、商人の癖に身分不相應な大金を借りるのは單に商人としての分際を超ゆるばかりでなく、若し一人が斯る竝外れた欲望を起す時には他の人々も其れに倣うて法外の欲望を起し、遂には社會の動搖を來たす恐れがあると云ふので、斯る嚴罰を加へて一般民衆の見せしめとしたのである。

既に境遇上から制限を受けてゐる上に、斯く政府から嚴重な掟を定められて、庶民が何うしてそれを守らずに居られよう。彼等がひたすら之に従はうとしたのは當然のことである。

我心に利方よき事と思ふ筋にても、人に相談して、幾人も惡しといはゞ、むざと取かゝらぬがよし、利方よくても世上の氣にかなはぬ事なり、人が歸服せれば、首尾調はぬものなり、是非なき事は、自然と世上の氣に叶ふものなり、時節を見合せて

取組がよし、左程になきことも時の氣につれて殊の外はやる事なり。<sup>(二四)</sup>

假令己れに利益なことでも、世人の誹りある時にはそれを棄てやうとし、急いでせねばならぬことでも、ぢつと堪へてゐて時日の解決を俟たうとする様に兎に角自分に向つて定められたものを堅く守り、其の分を超えて人目を惹くやうなことは成るべく避けやうとする。かく極めて消極的な又屈從的な所が此の時代に於ける實業家の道德的態度の特色であつた。

尙ほ此の特徴を明かにする爲めに、此の時代に主徳及び不徳と認められてゐたものに就て攻究を進めて見やう。幕末の智者脇坂義堂は「カネモウカル傳」に於て、カネモウカル藥方として儉約、堪忍、家事の出精、正直、知足、實義と其の他に柔和、謙遜、氣量、發明、慈悲を挙げカネナクナル藥方として美食、色欲、遊戯、遊所、奢僭上、名聞、我慢、諸勝負、相場、殺生好喧嘩、口論、不忠不孝、家内不和合、諫言嫌、氣隨身勝手、不實情、吝嗇、無慈悲、奸妄邪曲、不敬、殘虐、虛言、諂諛と其外に不養生、短氣、世方、墮弱、不算用を擧げてゐる。又上川某は『商人夜話草』の中に商人の服膺すべきものとして次の如き掛物の挿繪を掲げてゐる。







- 一町人蒔繪之乗鞍縁職仕間敷事
- 一乗掛蒲團袖木綿毛氈之外無用の事
- 一町人祝言結袴には仕間敷事
- 一町人長かたな大脇差さし申間敷事
- 一町人がふきたる體仕間敷事

又農民に對しても同じ主旨の布達があつた。寛永十年の御物諸度に

- 一祭禮佛事等結袴に仕間敷事
- 一男女衣類之事此己前より御法度庄屋は絹袖布木綿を着すべし隨百姓は布もめんたるべし
- 右の外はふり帯にても仕間敷事
- 一嫁とりなどに乗物無用事
- 一不似合家作自今己後仕間敷事
- 一御料私領共に本田畑にたばこ不作様に可申付事
- 一荷鞍に毛氈を掛乗る間敷事

又寛永二十年の御書付には「百姓之食物常に雜穀を可用米は猥に不食様に可申聞候事」とある。若し斯る政府の主旨に叛いて奢侈を敢てする者のある時には政府は之を嚴重に罰した。大阪の淀屋辰五郎と云ふ商人が怖ろしい贅澤をした爲めに時の町奉行松野河内守の爲めに咎められ、後

世の見せしめの爲めとて家財は缺所され、遂に淀屋が絶滅したと云ふ話や、又江戸の伏見屋四郎兵衛と云ふ商人が次第に贅澤を極め、京都の眞如堂の稻荷の社や、大師堂や、常念佛堂を拵へて人々の目を驚かした爲遂に政府から罰せられたと云ふ話や、又石川六兵衛と云ふ商人が其の妻に美服を着せて常憲院殿が上野へ御成の途中で其れを拜ませたところ、餘りに美服なるが爲めに殿様の御目に留まり遂に奉行所に呼び出されて、町人の分際に過ぎた奢侈の振舞だとして江戸から追放されたと云ふやうな話は孰れも奢侈に對して政府が嚴重な制裁を加へたことを示すものである。

かく政府からの制裁が嚴重であつた爲めに、町人は其れを恐れてひたすら質素を守り、財産を積むに従て益々儉素を旨として人目を惹くやうなことは専ら避けてゐた。併し又個人に取つて見ても、當時職業上の活動が一定の範圍に限られてゐたから、質素を守らないと忽ち生活に窮して來る。殊に町人は武士のやうに一定の俸録を受けてゐないから、腕一本で働いて凍餒を免るゝ道を講ぜねばならぬ。假令財産が裕かであつても、其の財産は多くは先祖代々少しづゝ積み上げたものであるから、一旦奢侈に陥れば、忽ち其れを失ふと云ふ危険に陥る。斯う云ふ點から自づと奢侈を戒め、質素を守つたものである。

商は商ものを仕込、諸方の用を辨じ、其内にて繰の利分を取て、渡世の種となす、身には血服を著、血食を食してくらすべし



……人と生れて榮花に誇り、奢り極めんや、急度つゝしむべきことなり。<sup>(二五)</sup>  
 家財は先祖より子孫榮久のために貯へおくものなれば、我一身分の榮華に失ふは大なる罪人なり。<sup>(二六)</sup>

單にかゝる教訓の聲が高かつたばかりではない。實際に於ても庶民は極度の儉約を守つたもので、『一生苦を積み、身には絹物を當てず、口には濃茶の味もしらず、鼻に名の木もきかず、秤目かしく捨り行く塵塚迄も錢さしにこしらへ、拾ひ草鞋をして大阪へも歩行で行き、腰に付けたる焼食を出し、板方の茶見世はあれども、これには目もやらず、一里塚の松の木蔭を宿として、天の川の水手してのみこみ、枒かたげたる男に在商ひの道を問行、かくのごとく萬事に心をつけ、晝夜たゞるせずに持出した』<sup>(二七)</sup>とか、或は飯の外には鹽菜、折々味噌の汁を吸ひ、或は飯と鹽とのみ食し、汁と茶と酒と煙草とを禁じて借財を返済したとか云ふやうな話が少くない。

(ロ)吝嗇。此の如く質素儉約は強制もされ、又實行もしたが、此等は本來が自己の生活の安固てふことから割り出した考であるから、其れが一段進むと、物質にのみ執着して、社會公共の爲めに出すべきものを出し溢り、自己の體面上用ふべき所にも用ひないと云ふ所謂吝嗇の弊に陥り易い。事實又この時代の町人には吝嗇の徒が少くなかつた。それは釋雲解が其著「生財辨」の中に『動もすれば儉と慳吝とを混雜して、物を惜み人にも與へぬことを儉約とする人有り』と述べて

ゐるのを觀ても略々推察される。又町人に對する教訓ものに儉約と吝嗇との區別を説くものが少くないのを以て觀ても此事が良く解かる。例へば

儉約は道にかなふなり、驕をはぶきなすべき事には金錢を惜まぬを云ふ、吝嗇は嘆ぶべき者をもえくらはず、着べきをもえ着す、其心から人の爲にはもとよりなす事なきをいふなり、此二つの差別をさとて事はなすべし。<sup>(二八)</sup>

二 誠實——詭譎。(イ)誠實。誠實の徳は農民の間に自然に養はれるものである。農民は常に自然を對手として生活する。其の自然には毫も偽りが無い。春夏秋冬の循環の規則正しいことは申すまでもなきこと、草木が芽から花、花から實、實から種となるまでの順序には一點の偽も無い。かゝる自然を對手にし、天の時を用ひ地の利に因つてゐた農民は自ら誠實の徳を養ふことが出来た。されば報恩農本を説いた二宮尊徳翁は此の點に着眼して至誠不欺を以て其の綱領とした曰く

我が道は至誠と實行のみ、古諺に至誠神の如しと云へども至誠は則神と云ふも不可なかるべきなり。凡世の中は智あるものも學あるものも至誠と實行とにあらざれば成らぬ物と知るべし。

然るに徳川時代に於ては單に農民のみでなく、商工業者も是れと似寄つた事情から誠實の徳を守つてゐたのである。當時交通の範圍が一地方に局限され、其の應對する人々も少數に限られて



ゐて、御互が面識の間柄であつた爲め、其の場限りの無責任な詐偽を行ふと、單に商賣上の信用を害するばかりでなく、引いては其人の品性に對する非難の聲が近邊に高まることになる。恰も農民が欺りなき自然に感化されて自づと誠實の徳を養ふやうに、商人は顧客の信用てふ情誼に動かされて誠實を守つたのである。

第一商人に表裏ある事大きにあしき事なり、かげひなたなく眞實を第一として、實にも人も相應の利得あるやうに、また買ふにもれぎりころして人の難儀をこのむべからず、一たんは表裏にて賣得一旦いれぎり勝ても人に損させて、商人の冥加よるしかるまじき事なり。(二九)

實際この時代には此の信用と云ふことが最も重んぜられ、暖簾の手前恥しからぬことをするのが商人の第一の心得だとされてゐた。この當時、出入商人が諸侯に商品を届ける有様を見るに、例へば呉服屋ならば、諸侯より御用を命ぜられた場合には、色々の品を見計らひ、風呂敷に包んで、之を其の御屋敷に差出して置いて、數日の後に又伺ふのである。其際に御屋敷では入用の品だけ取り除けて残りを風呂敷包の儘商人に返してやる。併し商人は別段商品を改めもせねば、又領收證も戴かぬのである。是れは商人が間違つた事も言はず、附け掛けもしないと云ふ所を示したものである。又諸侯の方でも出入の商人を定め、特別の不都合のない限り、其れを更へると云

ふことはしなかつた。(三〇)かゝる信用の交換は單に武家と商人との間ばかりでなく商人同志の間にも行はれてゐた。この時代の小賣商人が問屋から商品を仕入れる場合には、支拂勘定は三月五月七月九月十二月の五節季に之を済ました。是れは其の當時の金融状態にも基くのであるが、併し又互に信用を重んじたものと観られる。又多年主家に忠勤を盡した奉公人に對して、主家では金圓の外に屋敷を染め抜いた暖簾を與へた。この暖簾を貰ふことは此上ない名譽であつて、是れあるが爲めに商人間の信用も厚く、新しい暖簾の持主は主家の信用に應じて相當の信用を分前するのである。隨て又顧客に對しては常に暖簾の手前を重んじ、之を汚さざらんことを深く心に念じてゐたものである。此等に關する記事は多くの著書に於て散見する。左に引く一例は大きな商店の番頭頭が部下の奉公人に對して店勤めの心得を諭した一節である。

他所より御買物に御出掛被下候御方連も御心持に何れ御替り是なきものに候へば、是非共此方の取扱とても善惡につけ御風聴に預り申ものに候ゆへ、兎角世間の御評判宜やうに仕向差度事に候。(三一)

併し斯く信用を重んじ、誠實を守つたのは結局、己が商賣の繁榮の爲め、自己の生活の安固の爲めである。即ち自己の幸福の方便としてかゝる徳を守つたに過ぎなかつた。この事は通俗の道德説の大概のものに依て窺はれるのである。



商人は田地家督としてはなし、出入の人の影にて商をなして妻子を養ひ、渡世するゆへ、貧なる人いやしき人にては賣買用に来る人は主人のごとくおもひつとむべし、此方へ買物する人は先より此方を得意として敬ふゆへ、心得違ひ出来るものなり、賣口より買口は猶大事なり、利口なる代ものさへ買出せば利を得る事稀なり、少しも我ま、無理をいはず、念比にして貧なる人の爲めに成やうにするがよし、少し損なるやうでも重て入合なり。<sup>(三三)</sup>

(ロ) 諂諛。かく結局は自己に利益であると云ふ處世上の便益からして正直を守つたのであるから、是れはまさしく「正直は最良の政策である」と云ふ觀念と同じ主旨である。斯る功利的見解は一步踏み外すと「ウソも方便」と云ふことになるが、其れ程に至らぬにしても、少しく其の度を超せば自己の意志を其儘表示すると云ふよりは、他人の意志に其儘迎合する諂諛と云ふことになり易い。是れに就ての適切な例は見出し難いが、左に掲ぐる商人に説いた心得に就て觀ても大體是れが窺はれるのである。

十方旦那のふり商ひ、殊に女わらべを相手にする事多きものなれば、すゝどう見せず柔和の體をかざり、買人のたんのうするやうに口詞をもつて賣て通るか、ふりうりあきんどの上手、兎角何商人でも腹立す、堪忍するものは商内相應の立身して、一生喰かれぬものなり。<sup>(三四)</sup>

三 堅忍——卑屈。(イ) 堅忍。是れに二つの方面がある。積極的と消極的で、積極的の方は持久(根氣)とも云ひやう、自己の職業を固く守つて變へざることである。消極的の方は堪忍と云

へやう、自己の生活の安固の爲めに不快なことをも堪へ忍ぶことである。活動の範圍の狭い職業に従事してゐたから、普通の努力では親譲りの財産を維持して行くだけでもなかく骨が折れる。少し油断すると忽ちにして財産が傾く。況して親譲りの財産の無い者に取つては餘程の奮發と耐久とを以てしなければ、其日其日の生活を續けて行くことが出来ない。其所で持久と云ふことが尊ばれ、派手な時めくやうな營業は「霸道」又は「名聞商ひ」だとして堅く之を戒めた。商家の子が相場に手を出して大儲けをしたことが親に知れ、斯る不實な商ひをしては先祖代々續き來つた家運が斷絶すると云ふので勘當された<sup>(三五)</sup>と云ふやうな話が少くない。斯様な風で此の當時は飽く迄も地味な手堅い遣り方が尊ばれた。

先祖より傳へたる商賣をかゆるは本意ならぬことなり、たとひいかなる身なりとも一向に仕來の商賣にて渡世すべし、不時のまうけあてにすべからず、外の業にて渡世せんとおもふ兆あるは終に身代持崩すべき基なりとしるべし。<sup>(三六)</sup>  
父の志をつぎ且其事を述べんと欲せば、常に名聞商ひ必成す事なかるべし。<sup>(三七)</sup>

堪忍と云ふことは此の時代の道德の殆んど凡てを彩る着色であるから、これは識者によつても説かれ、庶民自らも特に心を用ひて守つてゐたものである。此れに關する説論は數多いが其の中から、特徴ありと思はれるものを左に二三擧げて見やう。



商人は御客の氣を計ひ、たとへば代呂物元四十五匁の物を懸直なし代五十匁と申を、客人四十匁に致せと無理を申され候とも、今暫くの御出情御買被下と腹立鋪色を見せぬが、則勘忍也其心得を忘れず兎角誤りて居るかよし。(二七)

よく忍べ忍びがたきを忍ばずば

誠にしのおこゝろならずと

商人組建の簡條

- 一 するどいと、けんなると、腹立とは、第一嗜むべき事。
- 一 柔和第一にしてふり買の人も、年々得意と心得べき事。
- 一 やすく値付するとも、悪口難言決してあるましき事。
- 一 初もの賣節は、なほく心得、はら立ましき事。
- 一 百のもの三文に値付するが、買人の常なる嘘、急度忘るべからざる事。(二八)

(ロ)卑屈。堅忍が嵩すれば卑屈になる。併し此の卑屈と云ふことは庶民が生活に執着したことの外に無教育であつたと云ふことが重に原因してゐる。人は心の弱いもので、假令自ら恃む所あつても、人から馬鹿だとか、下等だとか云はれると遂其の氣になり易いものであるのに、況して何等の自信のない人が、人から賤められて其まゝ之を承認するのは無理のない事である。徳川時代の商人は何等の自信も持たなかつたのだから、武士から賤められて自屈の状態に陥つたのである。一體自信と云ふことは何うして生ずるか云ふに、それは重に修養の結果である。所が徳川

時代には此の修養の道が庶民に對して開けてゐなかつた。當時修養を積んでゐた者は武士のみであつた。所がこの武士すら専門的學修とか、新説の樹立とか云ふ研究上の自由は與へられてゐなかつた。況して庶民に對しては教育上の施設と云ふものは殆んどなかつた。勿論全然無かつたと云ふのではなく、庶民の子弟と雖も好學の者には武士の爲めに設けられた私塾に入學することが許されてゐたし、又一般の教育機關としては寺子屋が設けられてゐた。併し寺子屋で教ふるのは読み書き算盤に過ぎない。私塾ではその外に修身、齊家、知足安分の道が加つたのみであつた。されば此等の教育機關が各人に授けた學問は低級な常識のみであつて、職業に對する準備の知識などは全く授けられなかつた。隨て庶民は自己の職業を改良しやうとする念慮を起すことなく、従來の經驗をば家傳とか秘法とか云つて之を護つて行くことにのみ心を注ぎ、學問に耽るのは家業を傾ける基だと云ふやうな考を抱いてゐた。かくては高尚な識見を養はうなどと云ふことは逆も及びも附かぬのである。隨て品位とか識見とかの養はれよう筈はない。既に品位や識見が養はれないのであるから、自ら恃む所がなく、自ら恃む所がないから、他人から、侮られると云ふことになる。

植て見よ花のそだゝぬ里もなし



である。随て多少の不義不正を行ふても、下劣な人間共のしたことであるからとて、武士から容赦に預かつてゐた。庶民は其れを好いことにし、己が生活の安固を欲して、益々卑屈に陥つたのである。想ふに此の卑屈てふ性向も單に自ら屈すると云ふことだけならば、左して咎むべきものではないが、併し此の性向の常として相手が弱いか愚かだとかと見ると忽ち附け込んで不正を働くもので、さうなると、是れは悪性を帯びたものになる。

以上に擧げた徳と不徳とは、顧客の意向に投ずることに由て間接に利せんとするのと、直接露骨に自己の利益を目指すのとの違はあるが、併し自己の慾心を充たさうとする點に於ては何れも同一である。ところでかく凡ての行動の終極の目的を利己心の満足に置いたと云ふことには、事情又止むを得ない所もある。既に述べた如く、徳川時代には庶民は武士から壓迫され、一段低い階級として取扱はれてゐて、個人の人格と云ふものは殆んど認められなかつた。先づ一の町人又は百姓であり、然る後に何の某とされてゐて初めから何の某としては認められてゐなかつたのである。若し個人の人格が認められ、其の権利なり自由なりが尊重されてゐたならば、個人は其の天賦の創造力を働かせたり、自由な論議や研究を試みることによつて、物質では測られぬ深い精

神上の満足が得られたのであるが、此の方面は全く無視又は禁壓されてゐたが爲めに、人々は唯だもう自己の職業に執着し、其の齎す利益に於てのみ自己の満足を求めてゐたのであつた。そして又財産や、金銭が裕かであれば生活の安固は勿論のこと、其の希望も或る程度までは遂げられるし、愚人も其の愚を隠すことが出来、束縛も幾分か解放されたからして、彼等が無精に之を愛し、少しでも蓄財し得ばそれが此上ない幸福と考へてゐた。金銭は實に此の時代の庶民に取つての唯一の生命であり力であつた。如何なる時代でも、實業家が營利を主とせざることはないのであるが、他人から下劣だ野卑だと云はれても構はず、外に致し方がないからだと云つて、無我夢中に營利に走つたのが、此の時代の實業家の際立つた特徴である。次に擧げる近松の作「壽の門松」の中に淨閑が其子を詰責して述べた語は斯る特徴を示したものである。

侍の子は、侍の親が育て、武士の道を教ゆるゆゑ武士となり、町人の子は、町人の親が育て、商賣の道を教ゆる故に商人となる。侍は利徳を捨て、名をとめ、町人は名を捨て、利徳を取り金銀をためる。是が道といふもの、如何なる大病難病も、病ひに療治種々ある、國法で取らる、命には、人參で行水させてもいかなく、助かられど、金銀では助かる。命の買はる、金銀大事の賣といふ事を與次兵衛めが知つたれば、此難儀は仕出かさぬ、何程惜み、貯へても、死でも帷子一枚とは此淨閑も知たれど、死ぬるまで金銀を神佛と尊ぶ是が町人の天の道。

又同じ近松の作「淀鯉出世瀧徳」の中には「親祖父の貯へを冥加も知らず遺捨て、金の罰があた



つて金銀に疎まれ手ぶりになつた」と云ふやうな文句もある。

町人は名譽を捨て、利徳を求むる者であつて、如何なる難病でも金さへあれば治るといふ金銭萬能主義と更に之を神佛として崇めんとする拜金の思想は、實に當時の町人の心に深く行き亘つてゐたのである。

## 第五章 明治維新以後の實業道德

### 一 社會上の變動

明治維新の改革の中で最も大なる影響を社會に及ぼしたものは階級制度の撤廢である。即ち明治四年に發布された廢藩置縣の勅令に由て、是れ迄七百年の間儼として存続してゐた封建制度が打破され、四民は平等に取扱はれ、職業選擇の自由が與へられ、個人的權利が認められるやうになつたことである。

この改革によつて最も大なる打撃を受けた者は云ふ迄もなく武士である。彼等は單に階級的特權を失つたばかりでなく、家祿を取り上げられて生活の根據を失つた爲めに、其の道德及び思想に大なる動搖を來たした。彼等は家祿を奉還した際に應分の下賜金を貰ひ受けたのであるが、其れ丈けでは永く生活を保持することは出来ない。そして又食扶持から離れて來ると、今迄のやうに仁義や廉耻のみを守つてゐる譯には行かない。何とかして凍餒を免るゝ道を講ぜねばならぬ。其所で朝臣とか無祿移住とかになつた少數の者を除いた外の者は、悉く農商に歸し、實業の方面に



向つたのである。併し此の中で農民となつた者は極く少数で、大多數は商業に従事した。併し境遇は變つても、是れ迄何百年の間に養ひ上げて來た格式とか行装とか云ふものを一時に脱ぎ捨てる譯には行かぬ。其の上商業に就ては全く無經驗で、計算には極く疎い爲めに、十中八九は失敗して「士族の商法」てふ輕蔑の語を残すに至つた。之に反して下級の武士や一介の書生が社會の混亂に乗じて、一朝にして高位高官に躍進し、此等の俄分限者が從來の秩序と風習とを悉く舊弊の名の下に打ち毀はしたと云ふことが、少なからず國民の射倖心を挑撥し、破壊思想を高めるに至つたが、殊に從來武士から全く齒されなかつた町人や百姓が、從來養ひ來つた職業上の手練により、或は社會の混亂に乗じて、非常な奇利を博し、次第に其の頭角を顯はし、遂に國家の中堅を形づくるに至つたことは大に注目すべき現象である。次に掲ぐる福澤諭吉翁の言は、斯る變動の光景を簡潔に示すものである。

士百姓が無闇に人に詫るばかりなら宜しいが、先き次第で驕慢になつたり、柔和になつたり、丸でゴム人形見るやうだ、如何にも頼母しくないと大に落膽したこともあるが變れば變る世の中で此の節は其ゴム人形も立派な國民となつて學問すれば商工業も働き兵士にすれば一命を輕んじて國の爲めに水火にも飛び込む。

## 二 産業上の革新

開國後間もなく歐米諸國の經濟組織と其の活動の法式とを輸入した爲め我が國の經濟活動は殆んど根本的に改造されるに至つた。今其の中の特に著しいものに就て次に少しく述べて見よう。

一 交通機關。 (イ) 郵便電信電話。政府は明治元年に驛遞規則を設け、是れ迄行はれてゐた飛脚の通信方法を一定し、五年には新郵便制度を制定し、距離の遠近に拘らず、郵便税額を均一にし、切手を貼用することに定め、又端書も發賣した。八年には爲替事務を開き、郵便貯金法を設け、十年には萬國郵便條約に加入した。電信は明治二年に初めて横濱燈明臺役所より開港裁判所に架設し、更に東京と連絡した。其後漸次各地に之を敷き、五年には京阪間の布設を了り、赤間海峡に海底線を敷くことによつて長崎まで通じ、七年には北海道まで通じた。電話は明治十年に米國より器械を輸入し、二十六年には東京大阪間に布設し、二十九年以後には全國に普及するに至つた。

(ロ) 鐵道。政府は明治五年に品川横濱間に鐵道を布設したのを初めとして七年には神戸大阪間に、十年には大阪京都間に、二十二年には東京神戸間に、二十六年には高崎直江津間に之を敷設した。又明治十五年の創立に係る私設日本鐵道會社によつて十七年には前橋上野間、十八年には大



宮宇都宮間の開通を見、二十年後に至つて、宇都宮線は青森まで延長した。其他私設山陽鐵道會社、九州鐵道會社を初め、各地に數個の私設會社が起り、此等の手に由て全國各地に亘つて鐵道の布設を見るに至つた。

(ハ)海運。明治二年には東京靈岸島と大阪中の島の間の貨物及び旅客運送の目的を以て廻漕會社が設立されたが、負債の爲めに倒れた。同四年には日本國郵便蒸汽船會社の創立を見るに至つたが、是れも社運振はずして解散の悲境に陥つた。この年土佐藩士岩崎彌太郎が三菱商會を起し日本國郵便蒸汽船會社所屬の汽船十八艘を譲り受け、政府の保護の下に内地上海朝鮮等の諸航路を開き、郵便遞送及び旅客貨物の運輸の任に當つた。斯くて開國と同時に來つて、横濱神戸長崎經由の桑港上海間定期航海を開き、我が沿岸の航海業を獨占してゐた北米合衆國太平洋郵船會社と激烈な競争を演じたが、遂にそれを壓倒して其の所有船を悉く買収し、我が近海の航海權を悉く其の手中に收むるに至つた。其後に至つて、日本郵船會社と大阪商船會社とが起り、郵船會社は二十六年に孟買航路を開き、二十九年に至つて歐洲航路、米國航路及び濠洲航路を開いた。大阪商船會社は初めは主として東洋の運輸に當つてゐるが、後には又歐洲航路をも開くやうになつた。

## 二 金融機關。

(イ)貨幣。織田信長の鑄造に創る貨幣は徳川時代に入つて、様式も進歩し又流通も頻繁となつたが、幕府が財政に窮する度毎に惡貨を鑄造し、諸藩も又藩札を發行して紊亂せる財政を彌縫した爲めに、國民は貨幣の眞價を疑ひ、次第に之を嫌ふやうになつた。殊に開國以來、外國との交際と内部に於ける兵亂の鎮定との爲めに多額の費用を要し、其の爲め幕府の財政は甚だしく紊亂してゐた。かゝる亂脈の跡を受け繼いだ政府は何とかして之が整理を圖らねばならぬことになり、明治元年に大政官札を、翌年に民部省札を發行したが、是迄金札に對して反感を抱いてゐた人民は餘り之を歓迎しなかつた。仍て政府は明治四年に造幣寮を設け、新貨幣條例を發布し、金貨本位制を布告した。されど金の産出少くて豫期の如く新貨を鑄造することが出來ず、已むなく不換紙幣を増發した爲め、金貨が甚だしく海外に流出した。そこで此の弊害を矯めんとして十一年に金銀複本位制を採用した。其後一方に紙幣の整理に着手し、その手段として銀貨兌換の制度を設けた爲め事實上銀貨本位となつたが、是れは外國との通商上其の不便が少くなかつた。かゝる所へ二十七八年の日清戦争の結果として、多額の償金を得たので、それを好機として三十年に金貨本位制を實施するに至つた。是れによつて初めて歐米諸國と貨幣の本位が同じくなり、世界經濟の仲間入りをする事が出來た。



(ロ)銀行。是迄政府は米を年貢として取り立て、其れを藏元又は用達に托して販賣させてゐた。隨て米は物價の標準となり、場合に依つては一種の貨幣として流通してゐた。斯く米が經濟上の單位として使用されてゐたが爲めに、金融機關は未だ甚だ幼稚の状態に在つて、前章に述べた如く纔かに御爲替組、掛屋、兩替屋、札差等が米を抵當として當座の貸附を行ふに過ぎなかつた。維新の際政府が発行した金札は政府の爲めには幾らか役に立つたが、市場に於ては其の流通が甚だ鈍く、其れが爲めに米價が甚だしく暴騰し、却て政府の歳出に於て多額の超過を見るに至つた。依て政府は全国各地の豪商をして爲替會社を起して銀行一般の業務を營ませ、之に金札を貸し出して其れを流通させ、又紙幣の發行をも許して官金の出納を司らせたが、何れも失敗に歸した。そこで政府は不換紙幣を無制限に發行するの弊害を悟り、之に對して制限を加へたと同時に、明治五年に東京を初めとして横濱、新潟、鹿兒島等に國立銀行を設立し、九年より十一年に掛けて全國を通じて百五十餘行を増設した。併し此等の銀行は各自分立して、互に連絡を取ることなく、銀行毎に資金に非常な差違が生じ、金利の高低が不揃であつた爲め金融上その不便が少なくなかつた。そこで之を統一せん爲めに政府は明治十五年に日本銀行を設立して、之に兌換券發行權を與へ、是迄國立銀行に與へてゐた紙幣發行權を停止した。其他特殊銀行として横濱正金銀行、勸業銀行

農工銀行、北海道拓殖銀行、臺灣銀行、朝鮮銀行等が設立された。又民間にも大小の銀行が設けられ、各地のものを集めると其數が數百に上つた、かやうにして金融界が初めて整頓し、銀行は資本運轉の唯一の機關として經濟界に有要の地位を占むるに至つた。

此の銀行の發達と關連して注意すべきは手形の流通である。大阪に於ては既に徳川時代から手形が流通してゐた關係から、明治十二年に手形交換所が設けられた。東京には十三年に至つて其れが設けられ、二十四年に至つて初めて完成した。最初に交換された手形は組合銀行にて仕拂ふべき小切手、送金手形、振出手形に止まつてゐたが、後にはその種類が多くなり、今では諸官衙の支拂命令書、商業上の諸種の手形、會社の配當金、郵便爲替、公債利丸等苟も一定の金額で受取らるべき權利の明かな證券は凡て此の交換所で決済されるやうになつた。

三 機械工業。政府が明治三年に製絲器械を輸入して先づ上州富岡に模範製絲工場を設け、十年には同じく上州新町に屑糸紡績の模範工場を設けて生絲の改良を奨勵した。同三年に政府は又紡績器械を輸入して、東京府下瀧の川村に試験的工場を設け、同八年に撚絲器械を輸入して、東京山下門内勸業試験場に於て之を試みたが何れも其の成績が良かったから、此等の器械は忽ちにして全國に傳播した。又同八年に政府は深川にセメントの模範工場を、九年に北品川に硝子製造所



を、十年に千住町に製絨所を設けて此等の工業の發達を獎勵した。其他印刷器械、紡績器械、製紙器械、製機器械、燐寸製造機等各種の器械が輸入され、それに依てあらゆる工業が勃興するに至つた。

### 三 新機關の及ぼした影響

一 交通及金融機關の影響。從來の交通は飛脚又は驛馬に據つたもので、其の行程は一日に二十里が最大限度であり、隨て又運賃も甚だ高かつた。然るに新に輸入された汽車汽船を以てすれば、是迄少くとも三日を費した東西兩京間の交通が十二三時間で滞りなく済まされるし、又電信電話を以てすれば西京は愚か、日本國中何れの所へも數分の内に通信が行き亘り、以前の百里は今の十里となり、世界が甚だしく短縮して來た。是れが我が經濟界に及ぼした直接の影響は自足經濟の破壊と云ふことである。是迄生産者の大部分を占めてゐた農民は前章に於て述べたやうに、未だ自足自給の状態に在つたが、交通が便利になると、手際の良い品物が安く買へるから、不細工な品を手づから造ることをよして、自分の生産した原料品の餘計な分を賣り拂ひ、其の金で此手際の好い品物を購求するやうになり、其れが一步進むと自己の使用の爲めと云ふよりは、専ら顧客の爲めに市場に向つて生産するやうになる。即ち是迄の自足的生産は營利的生産に代つて來

る。之を場所の上からすれば分散的團體から集中的團體へ移轉し、形體の上からすれば單純な分裂的體型から複雑な有機的體型へ變つて來る。此の變轉に當つて、金融機關が與つて最も力あることは極めて明かなことである。是れは實業界の動脈とも云ふべきものであつて、生産物の流轉を敏速ならしめる爲めには必要缺くべからざるものである。

斯く經濟組織が有機的に體制されて來ると、從來のやうな不規則な生産や亂雑な營業振りでは到底其の活動を圓滑ならしむることが出來ない。そこで其の組織や營業法の改正が必要となつて來た。組織の改善としては各種の分業の整頓、即ち會社組織とか、工場經營とか云ふもの、確立とそれから此等の分業の一貫的整頓——例へば製鐵業であるならば、原料の發掘から仕上品の製造までを一手で經營して其の間の勢力金錢の浪費を省くこと——が發達した。次に營業法の改良としては標準の定立が行はれるやうになつた。即ち以前のやうに不規則に生産し目分量目安で測定することを改めて一定の法式に従て生産したものを、目錄とか見本とか一覽表とかを以て測定し定價とか、正札とかを附けるやうになつた。斯く物價の標準が一定するに至つたのは、重に生産者の増加に由て來る所の競争の激烈に原因してゐるから、隨て利益額の減少を意味してゐる。されば利益の額を多くしやうとせば、何うしても是迄にない速さで事に當ることによつて時間の上で



他を制せねばならぬ。そこで個人商店でも營業の敏速を尊ぶやうになつたが、殊に各種の相場の決定報告などには分秒を争ふやうになつて來た。

斯く我國が自足經濟から世界經濟に飛び移つたことは、實は經濟上の長足の進歩と云へるが、併し其の間に經由すべき國內交通時代を飛び越したことが甚しい混亂を惹き起すに至つた。歐洲に於ては此等の時代を順當に経過したのであるが、其れでさへ近代に至つて各種の器械が發明された結果、産業界は前代未聞の變調を呈したのである。然るに我國では單に經濟的發達の階段を飛び越したばかりでなく、其の上に激變せる歐米の經濟組織を其儘取り入れたが爲めに、其の亂脈に至つては實に名狀し難いものがある。是れが爲めに舊時代の法式を以て營業を持続せんとした巨商の多くが倒産の厄に遭ひ、却て素寒貧の一擔夫が徒手を以て一代に巨萬の富を積むと云ふ奇態な現象も起つた。

二 器械輸入の影響。器械輸入の影響としては、資本の勢力が偉大となつたこと、新しい階級が生じたことが擧げられる。大仕掛の器械を購入して、其れを運轉する爲めには大なる資本が必要である。若し資本が充分でないと、差當り器械を購入することすら出來ない。よし又此れは購入し得たにしても、資本が無ければ其れを運轉することが出來ない。されば器械の輸入さ

れたと同時に資本が産業界に於て大なる勢力を有して來る。是迄簡單な道具を以て物品を作製してゐた間は、生産力は多くは生産者若しくは生産者並に資本に比例してゐて、資本のみに比例してはゐなかつた。隨て生産者が主で、資本は客の位置に在つて、資本は左程重要なものではなかつた。然るに大規模の器械が人力に代るやうになると、資本さへあれば、生産は思ひ通りに行はれることになり、資本が主となり生産者は客の位置に下るのである。又大規模の器械を以て生産を營むやうになると、是迄人力でしてゐたことを器械が代つてすることになるから、人力の驅逐となる。唯單に人力のみでなく、小規模の工業も亦驅逐されるのである。されば大規模の紡績器械が支那の舊式な紡車を排除し、ジャツカード式織物器械が手機を壓倒し、大規模の製粉器械が手挽の臼を除外したのである。斯く一方には器械が人力を驅逐するが、他方には新しい器械が新しい職業を生じ、此の方面に人力の集合と云ふことが生ずる。各種の工場に雇はるゝ職工は申すに及ばず、電信電話電燈電車自動車とか、タイプライターとか、簿記とか計算器とか、カード式索引とか云ふものは何れも特別な熟練を積んだ職工を必要とするやうになつた。そして此等の勞働者が經濟界に於て一の階級を形づくるに至り、是れが一團となつて自己の權利を主張する所に新しい社會問題が生ずるのである。



## ■ 實業道德の真相

維新前には社會に二個の道德的標準が存在してゐた。一は仁義廉耻を重んじ、奉公を主眼とせる武士の道德で、他は誠實節儉を重んじ、生活を主眼とせる庶民の道德である。前者を嚴肅主義の道德と云ふならば後者は功利主義の道德と云へるのである。併し當時一般の人々の抱いてゐた觀念からすれば、道德と云ふものは生活問題から超絶した高尚な抽象的な規範であつて、所謂衣食足りて後到達すべきもの、徳其ものゝ爲めにする所のものであつた。隨て此の意味に於ける道德の支持者は武士を措いては外に無かつたのである。武士は衣食の爲めに心を傾けず、金錢富貴を眼中に置かず、専ら仁義其ものゝ爲めに盡力精進することが出来た。かく武士が純乎たる道德の保持者であつたと云ふことが、彼等に賦與された權利以上に高尚な品位を生じ、それが私欲に走る庶民に對して精神的威壓を加へたもので、かゝる道德力の優越が社會の秩序を保ち、國民の風紀を維持し、永きに亘つて社會の健全な發達の原動力をなしてゐたのである。斯く道德は武士の專有物の如き觀を呈してゐた爲め、營利を主眼とする庶民の功利主義は殆んど道德としては認められなかつた。乍併生活の安固てふ必要に迫られて、已むを得ず繼り附いてゐたものだけに、其の

底力は甚だ強いものであつた。

然るに階級制度の撤廢と共に、武士は封祿を取り上げられ、新に飢餓を免るゝ道を講ぜねばならなくなり、是迄自己の專有とした道德も自然放棄することになつた。彼等が是迄道德を遵守してゐたのは生活上の保障があつた爲めであるから、斯かる保障が無くなると、道德も自然と崩壊せざるを得ないのである。そして彼等は生計の道を講ずる必要上時には何うしても是迄蔑視してゐた庶民の道德又は慣習に従はねばならぬ。若し之に従はなければ業務の上の成功は愚かなこと營業其ものを充分に果たすことが出来ぬのである。されば封建制度の打破と云ふことは、道德上から觀れば、是迄中等社會を維持してゐた健全高尚な道德が破壊されて、下級社會の低級卑俗な道德が其れに代つて現はれたと云ふことになる。斯く中等社會の道德が突然外部から破壊されたと云ふことは、社會全體に取つては正に其の柱石の崩解であつて、是れほどの手ひどい打撃は西洋に於ても恐らく其の例を見ないのである。西洋の中等社會と云はるゝものは、主として市民即ち商工業者である。古昔の希臘に於ける都市國家は申すに及ばず、中世に於ても都市は一の城塞であつて、附近の住民が敵の攻撃を避ける爲めに是れに立て籠つたものである。かの佛蘭西語の中等社會 bourgeois と云ふ語の城塞 bourg に由來せることが之を證明してゐる。元來この城塞の住



民は其の職業に於て田舎の住民と毫も異なる所が無かつたのであるが、城塞を永久に守備する必要上から、遂に多數の人々が此の内に集まるやうになつた。左うなると單に防禦に當る人ばかりでなく、生活の資料を供給する人々の居住することも必要になり、遂に市場や工業の發達を來たした。これと同時に又近在の農民も自己を防禦してくれる城塞に對して其の生産物を貢いでゐたのである。かく初めには軍事的防禦の必要上から生じた團體が、次第に經濟的團體となり、其所に住む人民が市民と呼ばれるやうになつた。そして斯る市民の間に發達せる道德が歐洲の中等社會の道德をなしてゐるのである。かく歐羅巴に於ては幾多の政治的革命や、經濟的變動の間を通じて、中等社會は一定の道德を把持して一貫的に發達してゐたもので、突然道德其ものを外部から破壊されたこと云ふやうなことはなかつた。然るに我國に於ては從來道德的訓練を積んだ人々は新境遇に適しないことになり、新境遇に適する庶民は元來道德の劣等なものか、左もなくば周到な道德的訓練を積んでゐない者である。そして斯る道德的訓練の不足が、維新以後に於て一般の道德の廢頽した原因をなしてゐるのである。

次に商工業者が外部から受けた影響も亦其の道德を動搖せしむるに至つた。是迄商工業者の間には、慣習又は規約てふ不成文律が存在し、是れに由て個人間の秩序が保たれてゐた。然るに維

新の際に改革てふ名義の下に多くの舊弊が打破された時に、此等の規約も又多くは破壊されてしまつた。例へば是迄獨占業であつた十組問屋が瓦解したとか、從來禁じられてゐた勝手な開業とか紛らほしい屋號をば遠慮なく實行したり使用するに至つたとか、其の他從來重ぜられてゐた口約や信用貸借を廢棄してしまつたと云ふやうなのは其の最も著しい例である。元々庶民の道德は自己の生活を主にした利己心に基いたものであるが、其れが團體の外的制裁のあつたが爲めに辛うじて適當に制御されてゐたのである。然るに今この外的制裁が弛むと個人的利己の方面が勢力を占めて來るのである。

次に新に輸入した歐米の商工業の組織も亦個人をして其の去就に迷はしめた。我國が歐米より各種の發明品を輸入した結果、經濟組織が全々一變し、從來の地方的分裂的組織は集中的整合的組織となつた。是れが爲めに農業に於ては堅固な地方的團體が崩れて社會的營利的集合體となり商工業に於ては交通の範圍の狭かつた時代に行はれてゐた、顧客との間の親密とか信用とか云ふ美風が薄らぎ、御互の間が通一遍の非人格的關係となつた。又器械工業の盛になつて來た結果として事業主と勞働者とが生じ、事業主は資本の運轉者として、勞働者は器械の運轉者として互に相對峙し、其關係が非人格的となり、人情とか義理とかは殆んど顧みられなくなつた。隨て利益



の一致した場合には平穩であるが、一旦其れが齟齬すると階級的反感を喚び起し、互に敵對し、破壊的交戰的狀態に陥り易い。斯る所から個人的權利を主にして立つ階級的反撥が新しい經濟上の問題となつて現はれて來た。其他、新組織となつてから婦人や幼少者が段々多く雇使されるやうになり、此所にも新しい問題が生じて來た。

此等は我國にのみに限られたことではなく、世界共通の道德問題であるが、併し西洋に在つては、是迄に道德的訓練を積んでゐた個人が、從來とは變つた新しい境遇に適應せんとすること、即ち順應の度を一步進めると云ふことが、其の主たる問題をなしてゐるのである。然るに我國に於ては何等の道德的訓練も積まざる個人が封建打破てふ大波の中に漂はされた上に、更に經濟的激變てふ第二の一層激しい荒波に打ち寄せられたのである。されば西洋に比して其の整調が二倍も三倍も困難なのである。是れが爲めに昔片氣な律氣一方で押し通さうとするやうな眞面目な人々でも、かゝる變轉を見通す眼識が無かつた爲めに時勢に乗することが出來なくて悲惨な境遇に陥つたのに反し、外部の變動に甘く乗じ、之れと歩調を合せることにのみ腐心した人々が却て案外な成功を博すると云ふやうな現象を呈した。其の結果手腕とか機敏とか先見とか云ふ才能のみが尊ばれ、個人的品位を高むべき徳義の修養などは殆んど顧みられなくなつた。更らに進んでは道德

を顧慮せぬ人ほど成功し、眞面目に正直を守り、勤勉を積む人々が却て其の生活に窮すると云ふやうな奇態な現象を呈し、その爲めに社會一般の人々は益々利己的になり背德的傾向を高めて來た。

之を要するに一方に於ける社會組織の混亂と他方に於ける個人の道德的觀念の薄弱と云ふことが我國の實業道德を不振ならしめた重なる原因であつて、是れは我國にのみ限られたことではないが、我國では社會一般の道德が未だ西洋ほどに整頓してゐない爲めに其の醜態が一層甚しいやうに思はれる。



第二編  
實業界に於ける道德問題



## 第六章 粗製濫造

現今の實業界に於て特別の考究を要する問題を、生産に關するものから觀察して行かうと思ふその中で特に注意すべきは、製品の性質に關するものと、企業に於ける雇者と被雇者との關係に關するものである。

先づ品質に就て觀るに、内地に於ては、我が商品の中には混製又は粗造の傾向を帯びたものがないと云ふ譯ではないが、同じ種類の生産に従事する者が多く、其の間の競争が激烈な爲め、消費者は商品選擇の自由を有し、値段と相應せぬやうな粗惡な商品は棄て、顧みず、爲めに此の種の商品は何時しか市場から其の影を没し、別段世人の注意を喚起する迄には、立ち到らないのである。

之に反して外國市場に於ては、我が商品の品質粗惡と云ふ非難の聲が喧しく、久しき以前から未だ嘗て是れの絶えたことがない。殊に先頃の歐洲戰亂に由て殆んど獨占の地位を占めた東洋の市場に於て、一層此の聲が高まつたのである。是れに由て觀ると粗製濫造の事實は外國の商品に於けるよりも我が商品に於て一層著しいものと思はれるのであるが、一度之を其の實例に就て觀



るならば、かゝる事實の存在を的確に承認せざるを得なくなる。

例へば先年露國へ輸出せる鉛筆の中には、兩端だけに鉛心はあるが中は空虚なものや、或は鉛心と木軸との抱合が不完全な爲め、之を用ゐんとすれば尖端は除々に木軸の中に退き込んで使用に堪へぬものや、甚しきに至つては全く鉛心の無いものさへあつた。又インキの中には唯インキ臭い黒綠色の液體を入れたものがあり、硫酸には原料の粗悪な爲め、少し寒氣に觸れると固結して使用に堪へぬものがあり、又カテホ越幾斯には粘土塊の如きものがあり、燐寸の中には軸木の粗悪なもの、包箱のきやしやなもの、包箱と内箱とがよく合はぬもの、頭薬の附き方の甚だ脆いもの甚だしきに至つては薬の附けてないものさへあつた。又靴足袋には無理に引き延ばして形を整へたり、粗悪な染料を用ひたりした爲め、それが足に染まるばかりでなく二三日穿くと破れて了ふものがあつた。其他靴には糊で貼つた革の剥がれてゐるものや、靴と靴が糊で喰ひ附いてゐるものなどがあつた。又歐洲戰亂中南洋に輸出されたメリヤス製のシャツ靴下の中には形狀に従つて糸數の増減をなさず、單に仕上の際に鏝で外見を整へた爲め二三日使用すると忽ち破れてしまふものや、又染色の粗悪の爲め一兩日使用すると忽ち褪色するものや、又瑛璃引きの鍋、薬罐の中には使用前又は數回使用後忽ちエメナルドが剥げるとか地金に穴が明くのがあつた。又懐中電燈

用の乾電池の二分の一は使用に堪へぬ不良品だつたといふことである。其他腐敗した鐘詰、粗造の玩具、着色によつて黄鹵と見せ掛けた白鹵、綿屑の外見を與へた竹屑、糊にて體裁を作つた反物、紙製の背囊等一々枚舉に遑ないのである。ここ

斯る實例が示す如く粗製濫造が頻々として行はれるが爲めに、我國の商品全體が不評判を買ひ、外國貿易の發展を甚だしく妨げるのである。我が政府でも此の點を特に憂慮し、是迄度々當業者に戒告を與へ、又検査の法を設けて品質の改良を奨勵して來たのである。其の爲め粗製濫造の事實は以前よりは餘程減つてゐるのである。其れにも拘はらず海外に於て新しい販路の拓かれる度に同じやうな非難が繰り返へされるのは何故であらうか。是れに就ては種々複雑な理由もあらうが、要するに國民全體の輿論が奸商を反省せしむる程に強烈でもなく又痛切でもない。換言すれば其の救治の方法が急所を突く程に適切でないが爲めである。されば苟も外國貿易の健全な發達を期さうとせば、時々世評に上る非難の聲に對して當面の彌縫策を講ずるだけに止まらず、一層進んで其の弊の由て來る所を尋ね、其れに對し最も適切な處置を採るべきである。

今粗製濫造の由て生ずる原因に就て觀るに、經濟的状況に關するものと、道義心に關するものがある。以下少しく之に就て説明を加へて見やうと思ふ。



經濟的状況に基くものは之を工業組織の不備と、物價低廉主義とに分けて觀ることが出来る。

(イ)工業組織の不備幼稚とは、我が工業の大部分が未だ小規模の手仕事にて營まれてゐて、大規模の器械を備へて大量を生産する工場工業にまで悉く進歩してゐぬと云ふことである。かゝる生産法に於ては、其の仕上品の品質の不揃とか、見本と現品との相違とか、質料の不純粗悪とか云ふことは何うしても免れなくなる。元來工業家は其の製作品の技巧を尙び、優良品を仕上げることを以て無上の樂みともし又誇りともするものであるが、商人が外國からの注文を取らうとして賣價を甚だしく糶り下げ、そして其の生産を工業家に求めて止まず、工業家の方でも其の製品の販賣を度外に置く譯には行かぬ爲めに、商人の求めるがまゝに急いで製作に當り、實質は儲て措き、ただ體裁だけを整へて差出さうとする。斯ることが商品の品質を粗悪又は不揃ならしめた主たる原因をなすのである。(ロ)物價の低廉を主とする供給は、如何なる賣買に於ても需要者の必ず欲するところであつて、特に之を此所に舉げるのは其の當を得ないやうに思はれるかも知れぬが、併しそれが文明人に對する供給であると、需要者の眼識が高いから價格と實質とを比較して觀て、實質の方が優良でありさへすれば、少し値段は張つても構はないのであるが、未開人種は斯る眼識なく、たゞ外見のみに着眼し、一見美麗で體裁さへ整つてゐれば、成るべく値段の安

きを欲するのである。殊に東洋人は富の程度の低い割合に見掛けを重んずる性癖を有してゐるから、之に對しては何うしても低廉な品物を供給せざるを得ない。事實又廉價を主にした我が製品は斯る眼識の低い東洋又は南洋の未開人に向つて供給されてゐるのである。是れに就ては初めより擬物安價品と銘打つて出て、他國の高價自然品を壓倒して行く獨逸の商人の遣口が商業の秘訣を捉へたものと云へるのである。此の方法で彼等は近年支那始め其他の市場に於て英國品を驅逐した。英國品は獨逸品や日本品に比べると、品質は遙かに優つてゐるが、價格は甚だしく高くて、趣味の低く購買力の乏しい東洋人種の意向には適合しないので獨逸品の爲めにおびただしく壓迫されたのである。

若し粗製濫造の事實が(イ)に於て述べたやうに、全く工業組織の不備に基いたものであり、之を個人に就て云へば、商業家は其の時の商況に順應せんとしたものであり、工業家は自己と消費者との間に介在する商業家の希望に制せられて事を行つたものであつて、少しも悪意を挿んだものでないとするならば、これは道德上からは別段に非難すべき所はない。此の場合には寧ろ我が工業の實況を具さに攻究すべき任務を怠り、他の先進國に對すると同一の期待を以て商品を注文した需要者の不明と輕卒とを難すべきである。ところで實際に就て觀ると、斯る商工業組織の不備



に對する非難は殆んどなくて、大概は皆顧客を瞞着せんとする殊更な惡意に對する非難である。若し生産者の心に誠意さへあれば、其れが自ら仕事の上に現はれるのである。されば一個の仕上げ品に由て直ちに製作者の心情を察知することが出来る。彼の野蠻人の手工品の如きは、其の實際は極めて拙劣であるが、併し一種雅味の掬すべきもののあるのは、眞摯な誠意が罩つてゐるからである。若し商工業者が正直に且つ誠意を以て調達した品ならば、需要者も其の點を充分に汲み取ることが出来るのであるが、併し彼等には左うした誠意がなく、唯だ外部の體裁だけを整へて、一時消費者の目を奪はうとするから、斯やうに非難されるのである。例へば嘗て問題に上つた羽二重の如きは、決して我が織物業者の技術の幼稚に基いたものではない。或は量目を増さんとして糊を附けたり、水を含ませたりして詐欺瞞着の手段に出たものである。外國人や未開人は品質を識別する眼識がないから、其の場だけ甘く賣り附けて通れば良い、後の評判などは構はぬと云ふやうな劣悪な根性でしたことが非難を受けたのである。されば粗製濫造に對する非難は、技術の未熟と云ふことよりは、其れを調達する商人の心意の邪惡といふことに向つて發せられたのである。事は經濟上の問題ではなくて、道徳上の問題である。

次に(ロ)の商品の低廉を欲して粗造品を販賣することに就ても、一概に非難し去る譯には行か

ぬ。商品の品質如何と云ふことは全く其の値段によつて定まるのである。若し顧客が廉價な品物のみを欲する時には、商人は其れを調達せぬばならぬ。是れに對して商人を非難するのは酷である。寧ろ斯る品物を注文する顧客を攻撃すべきである。例へば歐洲戰亂の際に、東洋に於ては歐洲品が杜絶した爲め、印度より鉛筆の注文があつたが、其の價として一本の代價二三厘のものを要求して來たやうなのはそれである。斯る注文に對して何うして精良品が提供されよう。若し是れに應じて調達した品物が粗惡だと云つて攻撃するならば、其れは我が商人に殊更ら罪を誣ゆるものである。唯だ併し低廉にも程度があり、如何に低廉であつても役に立たぬ程であつては宜しくない。されば法外な低廉な品物を注文して來た時にはその供給を豫め拒るべきである。斯る極端な場合は別として、普通の値段よりは幾分か安く品物を提供したからとて、其れが爲めに商人を責むべき理由は毫もない。之を實際に就て觀るに、粗製品に對して加へらるゝ非難の中には、甚だしく廉價な品物を供給したことに對するものも素より少くはないが、其れよりは粗製品を精巧品だと詐つたものに對する場合の方が遙かに多いのである。甚だしい廉價の場合は、其の罪の注文主の側にあると又は供給者の側にあるとを問はず、商品の資格を具へぬものを授受するといふことになつて、商業の本旨に悖るから、双方合意の上か、又は孰れか一方の注意によつて之を避く



べきである。併し粗製品を精巧品の如く見せ掛けるのは(イ)の場合と同じく、商人の心意の劣悪に基くものであつて、是れこそ根本的矯正を要する悪弊である。

上に述べた所に由て粗製濫造に對する非難は、技術の未熟に對してよりは營業者の心意の陋劣に向つて加へられるものであると云ふことがほど了解されたであらうと思ふが、世間には此の技術的缺陷と云ふことは、我が生産に於て殆んど存在せぬとまで論ずる人さへある。其の説に依れば、歐洲戰亂の際に、東洋の市場に於ては獨逸品は勿論、英國品も殆んど之を見ないやうになつたのであるが、それにも拘らず南洋、印度、支那等に於ては、依然として英獨品が供給されてゐた。是れは不思議と良く調べて見たら、我が商品に英獨の商標を貼り附けて賣り出されてゐたのであつた。この事實は我國の商品の粗製でないことを示すものである。若し我が製品が粗悪であるならば、彼等は其れを自國製だとは偽稱しないのである。我國の製品が英獨の製品と偽稱されて一般需要家を欺き得るものは、我が製品と英獨製品との間に軒輊のないことを證するものである。(三)是れは云ふ迄もなく我が商品の爲めに辯じた説ではあるが、一面の眞理を含んでゐることは確かである。併し公平に觀て我が製品に粗製濫造の事實が全く存在しないと云へないのである。現に南洋方面に於ては、歐洲品の代用品として日本品の輸入甚だ増加し、其の勢力頗る旺盛なるよ

り、狡猾なる歐洲商人等は、我國に於ける粗製濫造の聲の高いのを利用して、其の最も粗悪な品を擇んで故ら之を店頭に飾り、自國製の優良品と比較對照して我が製品の信用を傷け、其の販路の妨害を努めてゐたが、是れなどは我が商人に於ける粗製濫造てふ事實の裏書をしたものである。其處で結局、問題は、然らば此の悪弊を如何にして矯正すべきかと云ふことに歸する。

その經濟的設備の幼稚に基くものに對しては手工業的家内工業を工場的機械工業に進めるとか又は營業者團體の施設に係る検査制度に由るとか、更に弊害の甚だしいものは政府の監督の下に移すとか云ふ所謂經濟的裝置の改善に由つて改むべきで、是れは其の指導宜しきを得ば効果も相當に擧ることと思ふ。

之に反して商人の心意氣魄の陋劣てふことは、其の由て來る所久しく、既に徳川時代の貿易に於ても之が盛んに行はれてゐたものと見え、かの西鶴も「永代藏」に於て之に説き及んでゐる。

和國はさておき、唐へなげかれの大氣、先きは見へぬことながら、唐土人は律義に云ひ約束にたがはず。細物に奥にせず。藥種にまぎれものせず、木は本銀は銀に幾年かはることなし。只ひたすらわるきは日本次第にて針をみぢかくせり織布の幅をちりめ、傘にも油をひかず、錢安きを本として賣渡すと跡をかまわず。身にかゝらぬ大雨に親でもはだしになし只は通さず。むかし對馬行の貧窘とてちいさき箱入にしてかざりもなく時花。大阪にてその職人に刻ませけるに當分知れぬこと、て下つみ手ぬきして、然もの水にひたし遣はしけるに舟わたりのうちにかたまり煙の種とはならざりき。唐人これをふかく恨み、その次



の年も又過ぐる年の十倍もあつらへければ慾に目のあかぬ商人、我おそしと取急ぎ下りけるに大分港につませおきて去年たばこは水にしみされ思はしからず當年は當り鹽につけ見給へと皆々つき返され自に打ちて磯の土とはなりぬ。

かく商人の道義心の陋劣てふことはその根柢が深いから、その矯正といふことも一朝一夕では其の効果は擧らない。併し此の點にまで立ち入つて改善しなければ粗製濫造といふ事實は到底減少しないと思ふ。依て幾分なりとも之が矯正の道を進める爲めに商人の心意氣魄の陋劣に就て左に少しく解説して見よう。商人の心意氣魄の陋劣てふことは、その内容に就て觀ると利己心の強きこと、人格てふ觀念の缺損してゐることに歸するやうに思ふ。そして此の兩者は別個のものではなくて、同一物の兩面に外ならぬのである。

(イ) 利己心。商賣人は金の外に眼が無いから、自分さへ利益を得れば他人にはどんなに損になつても構はぬと云を仕打に出で易い。これが實業界に道德の行はれぬ重なる原因であるが、それも國內であると、同業者の間に激しい競争があるから、斯ることで争ふ時には、第三者たる一般人が其れに由て却て利益を占めることになる。併し外國貿易に此の方針を適用すると、單に外國人に對して不義不正を行ふのみでなく、自國の商人同志が互に惡口造言し、それが我が商人全體の信用を害し、外國との取引の全般に亘つて不振を來たすことになる。されば斯る非運を防が

んとすせば、當業者は須らく其の眼界氣宇を大にして、自己の行動が國威の發揚と密接の關係に在ることを深く心に留め、嚴正實直の態度に出づべきである。

(ロ) 人格觀念の缺損。日本人同志であると、後で顔を見られたり、咎められたりするばかりでなく、御互が何と云つても親しい關係に在るから、人情としてしら／＼しい嘘は云へぬのである。之に反して外國人は全く見ず知らずの他人であるから、其れとの商賣も其の場だけと見、「旅の耻は掻き棄て」の心持で行ひ、好い加減に誤魔化しても知らん顔をして通れるものと決めてゐる。かく外國人は自分等とは違つた種族だとして、其の人格を認めぬと云ふ態度が粗製濫造となつて現れる重なる原因である。されば若し之を根本的に矯正しやうとせば、我が商人は外國人と關係緣故の淺からぬことを覺り其の人格を尊重せねばならぬ。假令外國人であつても、久しく交際を重ねると御互の懸け隔てもなくなり、意氣も投合して來るのであるが、左うした經驗を商賣上にも移して其の調達する商品が成るべく對手の便益になるやうにと心掛け、「賣ることよりは先づ得意を得ること」を主眼とせねばならぬ。



## 第七章 雇者及び被雇者

近頃の實業界の問題の中で雇者と被雇者との關係ほどに論議の喧しいものは外にはない。而かも此れが又極めて重要な問題で、若し兩者の調停が首尾よく行はれるならば、生産上の能率と經濟とを増し、社會の多數の人々の福祉を進めることが出来る。併し今では雇者と被雇者即ち資本と勞働とが未だ敵對的狀態に在るが爲めに雇者と被雇者とは何れも不安と險呑の氣持に襲はれてゐる。

ところでこれを單なる經濟上の問題だとするのはその當を得てゐない。これは社會の大多數の人々の生命と幸福とに關する明かな道徳上の問題である。一つの問題が個人なり家族なりの幸福に關係してゐる以上、それは最早や經濟の範圍を脱したもので、單なる需要供給に關する問題ではなくて、相互の權利と義務とに關する道徳上の問題である。

これから此の問題に就て少しく攻究して見やうと思ふが、此の問題は結局被雇者の側の權利が如何なる程度まで承認さるべきかといふことに歸着するから、先づ被雇者の權利の主張の由て來る原理に就て考察して見やう。

人の有する權利の中で家族を養ふと云ふ權利は最も自然なものである。言ひ換へれば此の權利は何人も條件なしに有すべきものである。されば勞働者が此の權利を行使し、自己の家族に合宜な質素な慰安を與へやうとしてその勞働を賣つたり又は拒んだりするのは當然で且つ妥當のことだとせねばならぬ。されば必要に迫られるとか又は一層の苦境を恐れて、相當以下の報酬を受けると人は暴力と不正との犠牲となつたものと云ふべきである。賃銀に關する此の一般的規準は特殊な勞働の場合にも當嵌る。特殊な勞働はその骨折又は危険の程度に應じて一層多くの報酬を受くべきである。

この原理は又之を社會生活のあらゆる方面に適應しても妥當である。國家にしてもその單位たる各の家族が健實でなければ、その安固は保たれない。安泰な家族を仕立てることが賢明な立法の目的でなければならぬし、又あらゆる社會改造運動の主眼とするところであらなければならぬ。充實した國力の源泉は安定した秩序の整つた家族に存してゐる。若しもかゝる家族が缺けてゐるならば、國家はその優勢を保つことは出来ない。住むに家なく、此の世に何等家庭上の繋累のない人は國家に對する脅威である。されば愛國的政治家に取つては、斯る危険を減少することがその重大な任務である。



家族の維持と云ふことが自然的法則の指示するところであり、且つ又最高の社會政策によつて促進されるところであると同時に、これが又最低賃銀の標準をなすものである。かゝる標準を要求するのは賃銀労働者の當然の権利である。此の権利を主張するために彼は合法的でさへあればどんな手段に訴へても差支へない。彼は之を厲行する爲めに他人と結合してもよい。又此の権利を主張して自己の境遇を改善する爲めに同職者と組合を造つてもよい。彼に對して此の権利を拒むのは無暴であり不正である。彼れには此れより外に彼れの利益を保護すべき方法はない。富者や権力者は色々の武器を持つてゐて、自己の投資を保護するために遠慮なくそれを使ふのである。然るに労働者には結合と云ふことより外に取るべき方法はないのである。尤も労働者は彼等の眞の患苦を除くに有利なやうに輿論を喚起することは出来る。併し此の種の運動は正義や慈善を進め、公共の平和を紊さぬやうに指導されねばならぬので、實行はなかく容易でない。次に又労働者はその境遇に堪へ切れぬ時には最後の據所として仕事を拒む権利を行使することが出来る。即ち同盟罷工を起し、他人にも之に加はるやうに勧誘し、横暴な雇主に對して正しい報酬を要求することが出来る。此の場合にもその憑つて立つところは自然的法則である。自然的法則からすれば個人は自己の家族に質素な合宜な生活と慰安とを與へ得るだけの賃銀を受くべき権利がある。隨

(此の権利は之を充分に主張し、之を侵害する者に對しては合法的な防禦の方法を講ずべきだと云ふことになる。)

て此の権利は之を充分に主張し、之を侵害する者に對しては合法的な防禦の方法を講ずべきだと云ふことになる。

以上は労働者と雇者との間に抗争の起つた際に之を解決すべき客觀的原理である。若しも兩當事者が之を心から承認するならば、労働爭議に於て起り易い醜態は大概之を除去することが出来るやうと思ふ。

次に雇主を支配する原理は既に世間周知のもので、而かも最も安固なものである。それを概括すれば次の如くである。資本家は利益の正しい分前を得べき権利はあるが、併しその分前は飽まで公正でなければならぬ。雇主はその雇使する人々をば正義と人道との觀念を以て取扱ふべきである。雇主は又被雇者の労働する場所の設備を衛生に適したものにし、被雇者の物質的並に道德的幸福を進める爲めにあらゆる合理的な方法を講ずべきである。雇主は人間らしい親切さを持ち被雇者との關係に於て公平であるべきである。

併しかやうな原理は遺憾ながら現今の經濟や實業のどこにも見出されないものである。これは一面からすれば、競争の激烈なる結果で、假令被雇者に向つて正當の報酬を拂ひ、時間に一定の制限を置き、衛生に適した工場を設ける雇主があつても、他に設備の不完全な工場で長時間安い賃銀



で職工を雇使する雇主がある時には、それと競争が出来なくなるから、己むを得ず職工を過度に使役し、賃銀を切り下げると云ふことになるのである。

併し吾々は雇者と被雇者との關係に關する問題は道徳によらなければ他に之を解決する道はないと信するものである。道徳的觀念に訴へることによつてのみ雙方の態度を根本的に改めさせることが出来るのである。若しも道徳的觀念を取り入れないならば、雙方が敵愾心を以て對抗し、御互に利權の爭奪に躍氣となり、その間の空氣がますます險惡なものになる。勞働者が現今の如き悲惨な状態に陥つた重なる理由は、雇者が道徳と云ふことを顧慮せず、全く物質至上主義に支配されたからである。若しも此のまゝで行くならば、勞働者の敵愾心はますます高まつて恐るべき危険な結果を招くことになる。

此の點は資本家や雇者が深く之を反省せねばならぬのであるが、併し實際に就て觀るにかゝる點に着目して被雇者を優待してゐる人は極めて少いのである。併し斯る人が全然無いと云ふのではない。今かゝる篤志家の例を一つあげて見るならば、

數年前のこと、米國の勞働救済組合の役員たる一婦人が、ニュー・ゼルシイ町の硝子製造所に赴いて、幼少者の勞働者の實況を視察したことがある。最初の夜そこへ行つて觀ると、幼年勞働者

を使つて盛んに活動しつゝある多くの工場の中に、唯だ一つ全く暗闇のものがあつた。婦人は是れは多分營業を中止してゐるのだらうと考へた。併し翌朝再び其處へ行つて觀ると、前夜とは打つて變つて、多數の幼少者が其中に働いてゐた。そして孰れも法律に規定した年齢以上のもので工場の設備も極めて完備してゐた。そこで婦人は其の工場主に尋ねた。

「貴君は夜分此の工場を開かぬのですか」

「はい」

「燈火は點けないのですか」

「はい」

「それでは損になりませう」

「はい」

「他の硝子製造業者は夜業をするばかりでなく、幼少者を使はねば競争の激しい今日迎も遣つては行けないと云ひますが、貴君は左ういふことはありませんか」

「全く其の通りです。併し私は他の人々のやうにそんなに多く金を儲けやうとは思ひません。

私は夜業をすることが嫌ひです。私の職工も左う思つてゐます。私は又學校に通ふべき子供ま



で奪つて自分の所で使はうとは思ひませぬ。私の營業には相當の利益がありますから、私はそのれで満足してゐます』と彼は答へた。

想ふにかゝる紳士の態度は、誰れもかも競争に煽られて躍氣となつてゐる今日に於ては、物質以上に超絶した高邁な理想を抱かなくては、とても取り得るものではないのである。乍併私は雇者の大多數の者がかゝる見地に立つに至らなくては勞資の問題は充分に解決されないものと思ふ。

實業家に取つて直接の目的が金錢であると云ふことは、吾々も充分に之を認める。併し之を求めると當つて公正の原理を顧みないならば甚だしい間違に陥るのである。金錢は貴重なものであつても、それ自身は目的ではなくて、善事を行ふ爲めの手段だと考ふべきである。金錢を有する人はその爲めに傲慢や横暴になつたり、又不遇な同胞を輕蔑したりすることは堅く戒むべきである。而かも斯る抑制は道徳の力によつてのみ果たし得るのである。道徳からすれば二重の標準はない。富者でも、賣らるべきでないやうな勞働は之を買つてはならない。かゝることをするのは富の濫用であり、道徳法典の違犯であり、社會に對する罪惡である。

世人は往々その所有するものに對して絶對的な權利を有するものと考え、その欲するところは何でも爲し得るものとし易い。或る意味からすれば此れも素より正當である。彼等は所有者であ

り、而かも獨占的所有者であるから、左うしても差支ないと云ふ理屈も立つ。併し此の世には富者が適用してゐる法則よりも高い法則がある。權利以上に道徳がある。人々が個人的な立脚地に立ち、自分は所有者だと云ふて社會に對し又不遇な同胞に對してあらゆる責務から免かれやうとするのは明かに悖徳的である。富が多ければそれに準じて責任も又大となることを忘れてはならぬ。

近來世間一般の人々が個人主義に傾いた結果、我執と私慾とが嵩じて來た。これが社會を混亂せしめた抑々の原因で、之を救ふ爲めには今少し公共心を喚び起さねばならぬ。人々の間に相互扶助の觀念を高めねばならぬ。富者もその富を成したのは社會の御蔭であることを悟つて、社會に報ゆるところがなければならぬ。もう少し社會に對する義務の念と憐れな同胞に對する同情心とを高むべきである。人々の心に道徳的觀念を一層強く燃え立たせ、爭議に對しては公平無私な態度で向ひ、不遇の爲め躍氣となつてゐる人々に無暗に打ち勝たうとするやうな衝動は之を抑制して、一層高尚な人道的觀念を起すべきである。不遇な勞働者の訴へるところの、富者には少しの親切氣もなく、自己のことより外に考はないと云ふ言には確かに真相を穿つた所があるやうに思はれる。

併し此れと同時に勞働者も雇者と同じく道徳心を高めねばならぬ。勞働者にはたゞ下劣な衝動



に任せて盲目的に行動してゐるところがある。労働者は無暗に嫉妬の念のみを高めて、不平を鳴らし、雇者を呪ひ、其の態度が如何にも下劣醜惡である。労働者にはその仕事を堪へ難い負擔だとし、出来るだけ僅かな努力を以て之を濟し、成るべく早く此の負擔から免れやうとする傾向がある。併し此れは道義心を裏切る態度と云はねばならぬ。労働者は今よりも熱心にその仕事に従事し、それをよく果たすところに愉快を見出さねばならぬ。此の世の辛酸を嘗めた人ならば誰れでも、自分の仕事を喜んでするほどの善いことは外にはないといふことを認めるであらう。現今の労働者の不平不満には現代社會を根柢から覆さうとする社會主義の煽動に由るものが少くないが、社會主義の如きは人類の是迄の努力の結果として生じた社會の建設的方面を認めぬ謬見に支配されたものである。

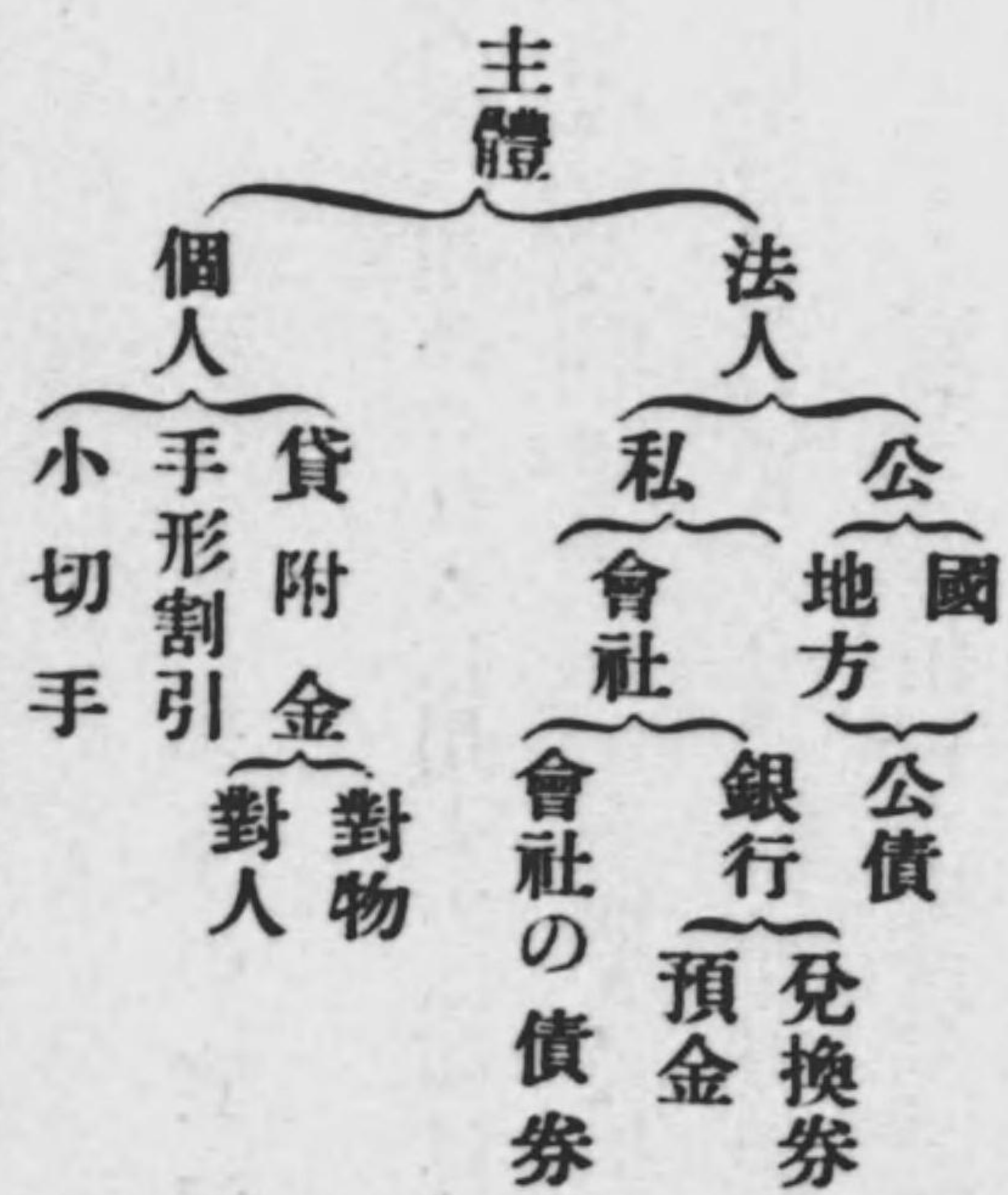
## 第八章 信用及び契約

### 一 現今の實況

普通に用ひられる信用と云ふ語は、或る人が他の人を徳義を守るものとして當てにすること、即ち其の人の品性に對する他人の信賴のことを指すのである。經濟界に於ける信用も本來此の意味に用ひられたもので、例へば現金取引の場合に、買手の方では値段に相當する品物を必ず渡すものとして賣手を信任し、延勘定の場合に、賣手の方で買手は必ず代價を支拂ふものとしてそれを信賴するが如きである。かゝる信用は、一と通り商業の開けた所なら何處にも見出されるもので、これの發達したのには、固より利益觀念が大に與つてゐるが、其の外に、當時商業上の活動の範圍が狭く、商人と顧客とが互に知己の間柄であるが爲めに、自然の人情として不正は出来ぬと云ふことも餘程重きをなしてゐるやうに思はれる。我が國の徳川時代の商人が家名を重んじ、暖簾の手前を穢すまいとし、又顧客の側で、自分の取り附けの商店又は出入商人を一定して無闇に變へないと云ふ風習の行はれたのは全く此の點に基いたものである。然るに經濟界が更らに發達し



て賣買取引が空間的に又時間的に延長さるゝに至つて、是迄知己の間に行はれてゐたやうな個人的順應は到底出来なくなり、賣買力と云ふやうな共通の抽象的能力に依て一般の人々と對應せねばならなくなつた爲めに、信用の意味も大に局限され、貸手の方からすれば、資本又は貨幣を支拂ふと云ふ約束が履行されると云ふことに對する信認を指し、借手の方からすれば、資本又は貨幣を支拂はうとする約束を以て、現在の支拂に代へる能力、即ち其の辨償力又は起償力を指すことになつた。<sup>(三)</sup>此の如く信用の意味が限定されて來ると、如何に人格の高い人であつても、資産の



無い時には、經濟上の能力が缺けたことになるから、現今の制度では信用は與へられない。之に反して相當の資産を有する者は、假令其の品性に如何はしい點があつても、其の資産を抵當とし

て信用貸しを受けることが出来るのである。此の如く信用の意義が局限されたこと云ふことは、取りも直さず經濟上に於ける交易が全般に亘つて統一的に整頓されたこと云ふことになる。今現今の信用制度の範圍と其の諸相とに就て觀るならば、その分化の状況は大體上記の表の如くである。<sup>(三)</sup>

かゝる信用の分化は云ふ迄もなく經濟上に於ける大なる進歩を示すものであつて、其の社會に齎らす利益は少くないのである。先づ其の利益の點に就て觀るならば、

一 經濟活動の時と所とを擴めることである。時を擴めると云ふのは、商品なり其の使用なりに就ての契約の取り交はされるのは現在に於てであるが、其の受授される迄には或る時期が含まれてゐる。それが爲めに契約者は將來に於て生ずべき生産物を當てにして現在の事業を營むことが出来、其の権利が未來まで擴張されるのである。隨て時と云ふものに價値が生じ、貸金の如きは時の立つに従て利子が殖えるのである。次に所の擴張とは、主として銀行てふ信用機關を通す場合を云ふのであつて、銀行が客に手形を渡すことに依て、其の近在だけに知れてゐた信用を世界にまで行き亘らせるのである。若し吾々が田舎の銀行に行つて信用上手形を得るならば、其れを倫敦に送つて倫敦の銀行から現金との引き換を受けることが出来る。吾々が直接倫敦の市民から信用を受けやうとしても不可能であるが、銀行の手を通せば其れが極めて容易なのである。<sup>(四)</sup>



二 資本の効力を増加する。信用によつて個人なり團體なりが多額の資本を集め、其れを以て種々の事業を興すことが出来る。假令資産の乏しい人でも世間からの信用が厚ければ、其れに依て莫大な資金を集めて事業を經營することが出来る。況して相當の資産を有する人であるならば、信用を利用することによつて、自己の資産に幾百倍した効果を擧げると云ふことは決して難事ではない。されば信用は交換の手段であつて、其れが直ちに生産的資本だとは云へないにしても、時に由ては殆んど資本と同等の効力を現はし、普通の場合でも資本の力を増加するだけの効果はある。殊に近代に於ける極めて大規模の事業、例へば鐵道とか土地の開発とかになると、何うしても公私の營業團體が信用に依て莫大な資本を募集せねば之を經營することが出来ないのである。更らに又外國貿易に於ては、此の信用てふ制度が世界に行き亘つてゐるが爲めに、其の交易が極めて簡易に且つ敏活に行はれるのである。

三 事業を起す能力なき人の資本を用ゐて有能者が事業を經營し得ること。世には相當の資産を持つてゐても別段それを運用しやうと欲しない人もあれば、又老人幼少者婦人の如く之を運用する能力の無い者もある。然るに他方には資本を運轉すべき能力は充分に具へてゐても、資力の不十分な人もある。信用は斯る無能力者の資産を有能者の手に移して運轉させる役目を務めるもの

である。されば信用は云はゞ持ち腐れとなるべき財を生かして働かすもので、其の結果からすれば個人なり社會團體なりの資力を増進することになる。

四 交易を敏活にする。信用の行はるゝ時には、手形、小切手、其他各種の信用證券が貨幣に代用される爲めに、重苦しいものを遠方まで持ち運ぶ勞が省けて、取引が極めて輕便に行はれる。又信用に基いて商業上の殆んど凡ての契約は結ばれるのであるが、信用は一々現金とか現品とかを遣取りすると云ふ煩瑣な勞を省くが故に、其の履行を迅速機敏にすることが出来る。

五 恐慌の際に信用のある人は災禍を蒙ることが少い。恐慌の際に、若し世人からの信用が無いと、金錢を融通してくれる人が無いから、大なる打撃を受ける。然るに信用があると、他人が餘り烈しくは追求せず、時に依つては資金を融通してくれることもある。

之を要するに信用の發達は、經濟界全般の上から觀て、資金の停滯や個人的活動の緩漫を防ぎ金融活動と財の交易移轉とを敏活にし、社會に於ける富を著しく増進するものである。

## 二 道徳的觀察

上述の如く信用は現今の經濟界に取つて極めて必要のものであるが、其の半面には又多くの弊



害を宿してゐる。例へば(一)生産者が信用を利用して、身分不相應に過剰な生産を営むが爲めに一度不景氣に遭ふと忽ち倒産して他人に甚だしい迷惑を及ぼすとか、又(二)將來の不確かなことを當てにして投機的に事業を經營するとか、(三)信用を假りて不確實な負債を起すとか、或は其れを濫用して暴利を貪るとか、或は(四)將來の決算を當てにして契約を結んでゐるが爲めに、一旦恐慌に遭ふと支拂が出来ず、爲めに幾多の破約者や倒産者を生じ、恐慌を一層甚だしくするとか云ふやうなのはその重なるものである。或る人は、斯る弊害は利益の増加に伴つて自然に起つたもので其の利益の大であると云ふ方面から観るならば物の數でない云ふであらうが、併し弊害が假令些細だとしても、其の儘に放任して置く時には、社會の秩序は此の一角から崩れることになる。されば社會の福祉の増進を主眼とする道德に於ては、何うしても斯る弊害の由て來る所を探究してその矯正の方策を講ぜねばならぬ。

然らば斯る弊害の由て來る所は何處に在るか云ふに、其れは信用が分化して、從來個人的又は人格的關係に在つたものが、器械的又は營業的關係に移つた點に在ると思ふ。從來の信用は人と人との間の順應であり、義理沙汰であつたが、現今の信用は約束又は支拂能力の交換であり、主とする所は金銭關係である。從來自己の家名なり暖簾なりを穢さざらんとし、「賣るよりも先づ

御客を得ることを心掛けた」ものであるが、現今では成るべく安く買つて高く賣らうとし、信用を自己の權利の主張の爲めにのみ使用するやうになつた。之を銀行家に就て云ふならば、以前に於て一の銀行に信用があると云ふのは、其の銀行の評判の良いと云ふことで、其の評判は主として銀行主たる個人に歸せられたものである。然るに現今の銀行に於ける信用と云ふことは、資本又は配當金のたと云ふことに歸せられるやうになつた。そして詐偽的行爲の露現せぬ限りは、假令銀行主が悖徳であり破廉恥であつても、其の營業は正直に營まれてゐるものと見做されるのである。此の如く信用が人格的關係から移つて資力の助手てふ位置を占むるに至つた爲めに、信用と云ふことは利得の上のみから使役され濫用されるのである。斯る點が上に擧げたやうな諸種の弊害の生ずる重なる原因であらうと思ふ。斯く云ふと或る一部の人は、斯く信用が分化して組織立てられるやうになつたが爲めに經濟界は活氣を呈して利益の増進を來たすのである。それを認めずに唯だ人格とか徳義とか云ふ融通の利かぬ聖人君子の道から遠ざかつたと云ふので殊更咎め立をするのは、甚だ固陋な時勢後れの謬見だと云つて反駁するであらう。勿論私とても信用の分化發達を賞揚するに吝かなるものではない。唯だ經濟界に於ける目まぐるしい進歩にのみ心を奪はれて、其の活動の目的たる人生の價値を忘れたり無視したりするのに對しては、何うしても非



難せざるを得ないと云ふのである。元來信用は人の品性又は人格に基いて生じたものである。然るに其れが一の能力に局限された結果、人格とは關係のないものやうに考へられ、利益の爲めには之を犠牲に供しても顧みぬといふのが間違であると云ふのである。是れに就て想ひ起すのはアダム・スミスが穀物商に就て述べた話である。彼れの言ふには、前代の人々は穀物は穀物商から買ふよりは農民から直接買った方が安い。商人と云ふ者は自己の利益の爲めに大概は高値を附けるものだとした。斯うした考から彼等は穀物商に其の商賣を止めさせやうとして見たり、又其の職業を妨げやうとして見た。彼等は穀物商に對して制裁を加へ、其の正直で公平だと云ふ證明が無くては商賣を營むことはならぬとした。併し斯うなつて生産者たる農民自らが穀物の賣却に當ると、其の生産費の幾分かを其れの爲めに投じなければならなくなり、其の全部を生産に注ぐことが出来ぬと云ふ不便を生ずる。其の爲めに折角設けた制裁も行はれなくなり、仲介者の存在に就ても大目に見た方が生産上の利益を増すことになつた。言ひ換へれば穀物商が農夫に代つて穀物の賣買を營む方が多量の穀物が生産され、消費者の方では却て安價に買ふことが出来、生産者並に消費者の方の利益になつたと云ふ話である。私は此の話にある穀物商を排斥した昔の人のやうに、今更乍ら信用組織を排斥しやうとは思はない。信用の發達は此の話の中にある穀物商

の出現の如く經濟界に取つて必要缺くべからざるものである。唯だ穀物商が正直で又實直でなければ、其の商賣から弊害が生ずるものとされたやうに、信用制度も誠實廉直を以て行はれぬ時には、弊害のみ生じてその利得は少いと云ふのである。かく信用の基礎を健全な品性に置かねばならぬと云ふ事は、其の代表機關とも云ふべき銀行業が明かに之を例證してゐる。米國有数の銀行家の一人たるヘップバーン(A. B. Hepburn)氏の言に依れば「凡そ人物程大切なものはない。品性如何と云ふことは銀行に於て頭取以下の事務員を選択すべき唯一の標準であり、又顧客を檢查する場合の最後の據所である。銀行の方では、何んな人でも其の品性に就ての確かな保證がなくしては、顧客として受け容れる譯には行かないし、又顧客の方では世人から何等の非難も受けず、そして將來有望な營業振を示す所の銀行でなければ依頼することが出来ぬ」と。是れは其の營業振の敏活とか、利子が良いとか云ふことよりも、銀行主や社員の品性の健全でふことの方が銀行の信用を博する最も重要な基礎だと云ふことを主として述べたものであるが、一般的に觀ても良心は品性を作り、品性は信任を作り、信任は信用を作り、信用は事業を作り、事業は世界を作るものと云へるのである。



## 三 契 約

次に契約に就て一言述べて見よう。契約も御互の信認と誠實とがなければ成立せぬのであるから、矢張り信用に關する事柄だと云へる。

契約は現代に於けるあらゆる經濟活動の基礎をなすものであるが、殊に即時に財貨なり報酬なりの授受されぬ交換は全く之に基いて行はれるのである。されば契約は社會生活の血脈とも云ふべき交換の原動力であつて、これの行はれることによつて交換は敏活になり社會は活氣を呈し進歩を來たすのである。若しも兩當事者が繼續的になり又は將來の或る時期に於てなりその責務を果たすといふ契約を結び、それを履行すると云ふことが行はれないならば、文化生活の血脈たる交換は全く途絶え、社會は沈滞して野蠻の状態に陥るであらう。されば契約は經濟生活に於ける重要な要素で、之を堅く守ることは實業家の重大な義務でなければならぬ。若し實業家が之を破る時には社會に少なからざる悪影響を及ぼすのである。例へば商人が自己の競争者と或る契約を結んだ購買者に對して、強迫買収其他の手段によつて、その契約の破棄を勧誘するとか、又は雇主がその競争者と雇傭の契約を結んだ被雇者に對して同様の手段によつてその契約を破るやう勸

誘するとか云ふが如きは、實業の基礎根柢を覆すものである。更らに又購買者が一旦買ふと約束したのに、物價が低落したといふので、それを破談にしようとしたり、又賣却者が物價の騰貴した時に商品を引渡す責務から免れようとしたり、或は又雇者が雇傭の約束期限の充たぬ前に被雇者を解雇しようとしたりするものも、皆契約を破棄するのであつて、斯ることが勝手に行はれては御互に信賴が出来なくなり、經濟活動は停頓することになる。

かゝる契約の破壊者に對しては法律で制裁するのが適當の處置であるが、併し法律では一々の特殊な場合に對して適切な制裁を加へることが出来ないばかりでなく、假令法律が適用されることが出来ても、之を裁判沙汰とするのは經費もかゝれば又御互の感情を害することにもなり、餘り賞むべきことではない。それよりは同業者なり當事者なりの間に於て契約履行に關する規定を設け、之を破つた者には充分に反省を促すとか、又は何等かの制裁を加へるといふことの方が一層よく此の弊風を矯正し得るものゝやうに思はれる。

それと同時に此の場合にも實業家がその道徳的觀念を高めて自己の言責を飽くまで重んずるといふ氣風を喚び起すことが極めて必要である。例へば物を買はうとする際に、買手が賣手に對して申込んだ注文は、買手の誓ひの言葉であるから、苟も實業家たる以上賣手が納得するやうな理



由のない限りは、その注文を取り消すやうなことはせぬ。苟も一人前の人ならば誰れでも手形や小切手に對する責務から免れやうとはせぬであらう。それと同じやうにその賣買上の契約は必ずそれを履行せねばならぬ。證文に書かなかつたと云ふやうな言譯は法律上では或は行はれるかも知れないが、商業道德では行はれない——と云ふやうな信念を堅むべきである。

想ふに商業の基礎は眞實であり、正直と名譽とは商業上最も必要な道義である。商業の骨子をなすものは正直と品性とであり、奉仕と商品とは之に次ぐものである。一旦表示したる意見は、口を通さうが筆に依らうが、法廷に於ける誓ひの如く眞實であり、個人的保證の如く神聖でなければならぬ。(二四)

## 第九章 廣 告

廣告は現代の實業に於ける極めて重要な用具で、之を用ひなければ生産者も賣却者もその業務を充分に果たすことは出来ない。廣告は今では實業活動の附屬的要件ではなくて、根本的要件即ち資本の一部をなすに至つた。

廣告の主たる目的は供給を土臺として需要を探究するか、又は鼓舞するところに在る。世の中には或る財貨を要求はしてゐるが、何處でそれを得べきかに就て全く知らない人が多い。かゝる人々に對して生産者なり商人なりが自己の持合せてゐる品物を豫め示すのは御互の有無を通ずる上に極めて必要なことであつて、此の役割を務めるものが廣告である。次には又世人が明かに要求はしてはゐないが、内心にそれとなく欲してゐるものを引立てて明かな要求たらしめ、更らに又内心には別に之と云つて欲してゐなくともそれを刺戟して新たな欲望を起させるのも亦廣告の力である。

廣告は斯る性質を有するが故に、實業の進歩に伴つて發達するばかりでなく、却つて實業の進



歩を促すものである。商品を生産又は賣却する者はその外觀なり包装なりに念を入れて人目を牽き、その欲望をそゝらうとする。之を購求する人も亦實質よりはその外觀や包装によつてその取舍を決めるのが普通である。自ら手に取つて検査し、或は又實際に使用して見ればその品質の如何は解らぬのであるが、多くの場合には左ういふことをせず、その外觀によつて購求するか否かを決めるのである。ところで此の外觀を實質から離して出来るだけ適切に之を公衆に示さうとするのが廣告の役目なのである。されば人々は遠隔の地にあつても、廣告さへ見ればその實物の如何なるものなるかを知ることが出来、又數年後に仕上がる製品でも廣告によりさへすればよくその實質を知ることが出来るのである。又昔は物賣る際に賣却者は路傍に色々の商品を列べて置いて、通りすがりの人に、それを見て氣に入つたものがあれば御買ひなさいといふやうな遣方をしてゐたのであるが、今の廣告は此の展示の方法を擴張して、遠隔の地に在つて家に座してゐる人々にも、その品物の實質に就て詳しく知らせることが出来るから需要者に取つては大に便利であるが、同時に又賣却者に向つてもその販路擴張の機會を與へるのである。

廣告の價値は今述べた所で大體明かなことと思ふが、次にその弊害に就て少しく述べて見よう

一、誇大に失すること。廣告者は世人の注意を惹かうとするところから、事實を誇張し又は捏造

する傾向がある。それも廣告する人の數が少い時には大した事もないが、多數の者が他より一層多く人目を牽かうとして競ふ時には、その誇張の度が次第に高まり、寸小棒大な辭句を用ひるやうになる。例へば有りふれた品物に極上とか無類飛切りとか前代未聞とかいふやうな最上級を現はす形容詞を用ひ、それが効力がなくなると、滅法界とか殺人的とか云ふ不快な文句を濫用するやうになる。併しかゝる誇大な廣告は事實を偽つたものである。公衆は斯る廣告に初めは瞞まされるが、忽ちその虚偽を覺り、後にはそれを割引して見るばかりでなく、斯やうな廣告をする人々の商賣上の根據を疑ふやうになる。世間が誇大的なことをば廣告のやうだといふてゐるのを觀ても、誇大な廣告が如何に世間の信用を墜してゐるかがわかるのである。

二、虚偽を敢てすること。誇張は既に一種の虚偽であるが時には事實無根のことを麗々しく廣告することがある。それは賣藥の廣告などによく見ること、萬病に特效のあるやうに書き立てゝゐるが、それを化學的に分析して見ると、少しも效能のある要素は含まれてゐないと云ふやうな場合が時々ある。是れは全くの詐欺で、地方人などの中にはこれに引掛かつて、大變な損害を受けた人々が少なくない。かやうな方法が屢々用ひられると、世人は廣告を信じなくなるばかりでなく、一種の疑の眼を以て觀るやうになり、却て營業發展の妨げとなるのである。



三 自然の風致を害すること。これは重に屋外廣告に關することであるが、公道や鐵道線路の脇に大きな無趣味な廣告板を立てるとか、公園の傍に見苦しい看板を掲げるとかいふやうなことが、甚だしく自然の風致を害するのである。自然の景色は凡ての人々の樂しむべき公産であるのに、醜惡な廣告を立て、勝手にその風致を害するのは、人道上甚だ好ましくないことである。

四 出費を醸すこと。廣告が盛になると廣告費が多くかゝるが、此れは商品の價格の中に繰り込まれることになるから、消費者は價格の割合に品質の劣つた品物を購求せねばならなくなる。斯やうに廣告には種々の弊害があるから、之れを矯正する爲めに何等かの制裁が設けられねばならぬ。我國に於てもこれに關する制裁の方法は既に法律で規定されてゐる。即ち『不正競争取締法』の内に、虚偽な廣告を爲したる者には二年又は五年以下の懲役千圓以下の罰金に處すといふことに規定されてゐる。又警察違犯處罰令の中には、屋外廣告の制限、賣藥及醫師の廣告の制限風俗を壞亂する恐れある文字の制限、富籤類の廣告の制限等に就て規定されてゐる。

言ふ迄もなく廣告の目的とするところは、顧客の注意を惹き、その知遇を得るに在る。然るに廣告をした爲めに顧客から警戒されたり、忌避されるのであつては、廣告をしない方がましである。されば廣告の目的を達する爲めには正直な廣告をして、顧客の信用を受けねばならぬ。それ

には單に法律の力に依るだけでなしに、廣告者自らが力を協せて、その誇大虚偽に陥る弊を矯めねばならぬ。

米國では近頃實業家が此點に特に心を寄せ、専らその改善に努めてゐる。米國でも永い間詐欺的廣告が行はれてゐたが、初めの間は、それに反對な情操も起らなかつた。商人は新聞に詐つた廣告を掲げて、それによつて利益を占めてゐた。又世間一般も廣告に瞞されるのは購買者が悪いのだとしてゐた。此の時代とても正直を守つた商人が全くなかつたといふのではないが、併し虚偽な廣告をするのが一般の風潮であつた。其の後新聞雜誌その他の公開の手段が發達し、廣告といふことが一の職業となり、品性能力の優れた人々が之に従事するやうになつてから、是迄のやうな詐欺的方法は近視眼的であつて、目前の利益の爲めに永久の利益を犠牲に供するものである。かゝることを行つてゐては世人の信用を失ひ、遂には本當のことを述べても世人は信じなくなると云ふ見解が高まり、一時も早く之を改善せねばならぬのであるが、それには一層高い倫理的標準に據らねばならぬといふことになり、正直な廣告をせねばならぬと云ふ氣運が高まり、それが法律の制定となり、『虚偽な詐欺的な廣告をするものには罰を加へる』ことになつたのであるが、更らに實業家の間に世界廣告俱樂部といふ團體が設けられ、各地にその支部が設けられ、偽つた詐



欺的廣告を掲げることが禁止する規定が定められてゐる。次に擧げるのは或る協會が定めた廣告實施に關する規約である。

最大賣上高とか最大仕入とか前代未聞とかいふ最上級の語を用ひることを避けよ。かゝる語を制限なしに用ふるのは、あふな氣があるばかりでなく、公衆はそれを割引して見るやうになる假令事實であつても、世人の信じさうもないことは、幾分かその調子を下げの方がよい。商品の品質に就て述べる時には、正確を主とせねばならぬ。百萬弗の賣上高と云ふた時には、小賣値段に換算して總計百萬弗となるといふ意味でなければならぬ。廣告に出した品物は店にあるか倉庫にあるか又は持合せてゐて、賣り出しを始めたらいつでも用立て得るものでなければならぬ。「三等品」とか「疵物」とか「汚れもの」とか云ふことははつきりと記して置かねばならぬ。「ほんの僅か」だと云ふやうな文句で胡魔化さずに、「傷があつても着用には差支へない」と云ふやうな文句を使はねばならぬ。又商品の形狀性質外觀を欺くやうな廣告は之を避けよ。建物の形狀なり構ひなりを誇張するやうなことも之を避けよ。

廣告は今では實業のあらゆる方面を通じて賣子の役目を務めてゐる。そして廣告の爲めに費される費用は、その廣告が購買者たる顧客から信用される程度に應じてその價值が生じて來ること

になる。今では小賣商は、その總賣上高の二分から五分までを廣告費に掛ける必要があるとされてゐる。或はこの位は己むを得なからう。要は此の廣告費を最も有效ならしむるにある。その爲めには世間の信用を増すやうにせねばならぬ。ところで之を實現するには一軒や二軒の店が正直を守るのではその効果は少い。多くの實業家が力を協せてその標準を高めるやうにせねばならぬ。かやうに觀て來ると、廣告の改善といふことは結局社會道德の振興といふことになるのである。



## 第十章 正當の價格及び正當の利益

物價といふことは誰れにも關係のある問題であるが、殊に貧者には生活の安否に關する重大な問題である。又社會の上から觀ても、物價と賃銀との評價が妥當であるかどうかといふことが、全體の福祉に取つて極めて深い關係を持つてゐる。若しも此れがその妥當を缺くならば、所得の不公平から社會は混亂に陥り、怨嗟不平の念が高まり、遂には道徳的に破産するに至るであらう。然らば正當の價格とは如何なるものを云ふか。經濟學者は需要供給の上から此れに就て詳しく説明してゐるが、併し今日の如く個人的企業が自由で、個人間の競争の盛んな時代に於ては、惡辣不正な手段を以て一般の需要をそつたり、又多量の供給を人爲的に調節たりするから、財貨の價格は經濟界としては正當だとしても、社會一般としては決して妥當だとは云へないのである。されば此の問題は寧ろ社會一般の上から觀察し攻究する方が正鵠を得るのである。そして斯る態度を取つた人は、經濟學者よりは寧ろ宗教家道徳家の間に見出されるのである。今その代表者とも云ふべき聖トーマスの説を擧げて見るならば

『賣手と買手とは互に他によつて己を利さうとするのであるから、賣買は共通の利益の爲めに行はれるのである。されば交換は兩當事者の共通の利益の爲めに行はるべきで、其の間に結ばれる契約は兩者に向つて平等でなければならぬ。一方が他方より多く苦められるものであつてはならぬ。ところで人の使用する物品の價値はそれに向つて、支拂はれる價格によつて測られるのであつて、之を測る用具として貨幣が發明されたのである。されば若し價格が品物の實質的價値以上であるか又は以下であるならば、それは不當なものとなる。隨て物品をその實質的價値よりも高く賣るとか、又は安く賣るといふのは不正邪惡な行爲である』<sup>(二)</sup>

此の説に依れば、正當の價格とは一定の時に一定の場所に於て一つの品物が現はす實質的價値に相當するものといふことになる。これは改めて言ふ迄もない自明のことであるが、唯だこゝに問題となるのは、此の正當の價格を如何にして決めるかといふことである。或る時期に或る場所に於てこれが數學的嚴密さを以て定められるものだらうか、或は又賣手と買手との間の契約によつて決まるものだらうか。

若し之を道徳的に觀るならば、賣手と買手とが同意して決めたといふだけではその價格は正しいものとは云へない。この道理は雇者と被雇者との間で決められる賃銀の場合にも當嵌るのであ



る。若しも斯やうにして決められた價格が正しいものとされるならば、富める者や狡猾な者の方が貧しい者や正直な者よりも遙かに多くの利益を占めることになる。是れは甚だしい不公平なことで道徳上是認することは出来ない。併し道徳とても此の方法に對して絶對的に反對するものではない。他に適當な標準のない時には賣手と買手との自由な同意に基いて價格を決めても差支ないとするのである。例へば骨董品とか珍品とか藝術上の傑作とか、又は兩當事者の間では容易に評價し難い品物だとか、使ひ古された品物だとか云ふやうな類である。此等は賣手と買手との同意によつて決めらるべきもので、かやうにして生じた價格は『慣習的』價格として社會一般に通用するものである。

併しこゝでは斯る道徳的觀察等は差し置き、一般的に之を觀察して見やう。一般に正當な價格と云はれるものは『法律的』價格のことか、又は『普通』の價格のことになる。法律的價格とは法律によつて確然と規定された價格のことである。例へば中世紀に於てギルトによつて決められた物價の如きはそれで、此のギルトは官廳の保護監督の下に立つてゐるから、商人は此の價格を必ず守らねばならぬ。若し之を守らぬ時には官廳から罰せられたのである。

かやうな法律上の規定のない際には物價は一定の時に一定の場所に於て人々の共同の評價によ

つて之を決めるより外はない。これが普通に行はれてゐることで、かくして決められた價格は之を『普通』價格又は『自然的』價格と呼ぶのである。此の普通價格は法律的價格のやうに嚴密な數字で之を現はすことは出来ない。たゞ最高價格と最低價格と中庸又は平均價格とを決めることが出来るだけである。最高價格とは眞に正直な人が一つの品物を賣らうとする時の値段であり、最低價格とは眞に正直な人が他から一つの品物を買はうとする時の値段であり、中庸又は平均價格とは此の兩者の中間に於ける値段である。之を品物に就て云へば、單に人の快樂や贅澤に供する物品は最高價格と最低價格との差が最も大であり、之に反して生活上の必須品はその差が最も小である。

以上は加特力派の道德學者の主張するところであるが、その代表者の一人であるアルフォンサスは更に之を實際の賣買に適應せんが爲めに一つの法則を設けた。それに依れば中庸價格を假りに五とすれば最高價格は六で最低價格は四、又中庸價格を十とすれば最高價格は十一で最低價格は八、中庸價格を百とすれば最高價格は百五で最低價格は九五とした。併し此の場合の最高價格を百とし、最低價格を九五とすべきだと主張した人もある。いづれにしても代價が低くなるとその比率は代價の高い場合と同じにはならぬのである。



こゝに注意すべきことは、正當な価格は賣手と買手との多數が集つて生産や運搬や販賣の過程に於けるあらゆる要素を考察に入れた上で之を決めねばならぬのであるが、斯くして生じた価格はその賣買の行はれる場所に於てのみ通用する評價であつて、外國に於て同じ品物を求める際にも同じ値段となるものとは決まらぬのである。

又假令最高普通価格と最低普通価格とが正しくとも、詐欺的手段によつて實質的價値の少いものを最高価格としたり、又實質的價値の相當にある物を最低価格としたりすることがある。かやうに普通の市場価格をば人爲的に釣り上げたり引き下げたりするのは大なる罪惡である。

併し加特力教派の道德學者は此れにも又例外のあることを認めてゐる。聖トーマスに従へば、或る品物を賣つた人が其れを手離すが爲めに或る特別な損害を受けると云ふやうな場合には、その品物の価格は之を並以上に高めても差支ない。それは所有者がその品物を特別に愛着してゐるとか、又は相傳の不動産だとか、或は又手離したら將來に於ける利益を得べき機會を失ふとか云ふやうな品物の場合である。併し又これと反對に賣手が自ら進んで手離さうとするやうな品物は之を最低の普通価格以下で買つても差支ないとしてゐる。併し聖トーマスも聖アルフォンサスも或る品物が買手に取つて特殊の價値があると云ふので、最高の普通価格以上で賣つてはならぬと

してゐる。トーマスの説によれば、「品物を買ふ人の方で大なる利益を占め、賣手が其れを手離しても別段に損をしない場合に、賣手は最高の普通価格よりも高くそれを賣つてはならぬ。その理由には買手に向つて特殊な利益を與へるのは、賣手から生じたことではなくて、全く買手の事情から生じたものだからだ」と云ふのである。されば此の説によれば、需要者に向つてその眞に必要とする品物を賣る際に、如何に需要者の要求の度が強いからとて、それに對して相當價格以上の値段を附けるのは善くないと云ふのである。

之を要するに、加特力教派の道德學者の考では、財貨の價格はその有用性に基いて、生ずるものであるが、併しそれを有用とする程度は人により時により場所によつて異なるのである。そこで社會一般が欲求するやうな財貨を賣手と買手との多數が集つて賣買することに決めた時のその價格を以て平均價格となし、個人の特殊な欲望を充たすべき價格は之に準じて當事者の間に於て定むべきである。併し此の際に一方が他方の弱點に投じたり、又は詐欺的手段を以て故意に價格を釣り上げたりしてはならぬと云ふのである。是れは現代の實業界に行はれてゐる理論や實際とは甚だしく懸け離れてゐるが、併し極めて妥當公正の見解と云はねばならぬ。

次に正當な利益に就て述べんに、これは既に正當な價格の中に含まれてゐる。正當な價格は又



賣手に正當な利益を與へるものでなければならぬ。隨て正當な利益も亦正當な價格と同じ合法的根據に基いて生ずべきものである。その合法的根據とは、利益は勞役に對する報酬であると云ふこと、凡ての當事者を利するものでなければならぬと云ふこととである。

然らば一つの商品の正當の利益とは如何なるものを云ふか。それは生産と販賣とに關する費用を差引き、事業に投じた資本と事業經營の爲めに費した勞力とから生じた餘分額のことである。例へば石炭の正當な利益とは發掘費、運搬費、販賣費等をその賣上高から差引き、自己の投じた資本と自己の費した勞力とに應じた報酬を指すのである。

云ふ迄もなく實業の職能は社會の要求する財貨を生産し分配するに在る。隨て之を理論的に云へば、利益はかゝも職能を果たしたのに對する社會の報酬であつて、勞役の直接の返報ではないのである。ところで此の職能を果たす爲めには先づ或る程度の資本がなければならぬ。併し資本を掛けたからとて無法の利得を占めることは出来ない。どんな營業に於ても利益の最低限度がある。それは其の營業の危険を見越しても、尙ほ新しく資本をつぎ込まうとする心を入々に起させるその最低局限のことである。そこで生産額が一定して永く繼續する會社に於ける利益の最低限度は色々の實際的事情を參酌して觀るに、一年に全投資の一割位が先づ至當であらうと思ふ。さ

れば社會が一つの營業を持続せしめようとせば、生産及び分配の實費以外に此の位の報酬を拂はねばならぬ。然らざればその營業は立ち行かぬことになる。此の最低限度以上の所得は賞與と云ふべき性質のもので、これは丁度無能な人に對してはその罰として此最低限度以下を支拂ふのと同じ道理に基いたものである。

以上は利益の大體の標準であるが、現今の實業界には種々な事情が伏在してゐて、之をそのまま實際に適應することは困難である。例へば現今の製造工業では價格隨て又利益は購買者によつて決められるのである。製造業者は、人々が將來何を買ひ、又その製品に對してどれだけ支拂ふかを定めることは出来ない。かゝる危険が現今の實業組織の内に存在してゐるから、製造業者の利益の最低限度は一割以上に高められねばならぬ。併し又近代の營業が無法な危険を冒すが爲めに、莫大な損失を蒙ることがあると共に又法外な利益を占めることもある。併しかゝる利益は正當のものとは云はれない。これを改正する爲めには獨占を取締り、不正競争を防ぎ、計算力を養成し市場の知識を普及することによつて、利益に對する一定の標準を定め、その賭博的要素を除去せねばならぬ。



## 第十一章 投機取引

## 一 投機取引とは何ぞや

投機取引とは価格の變動から利益を占めようとする唯だ一つの目的で營まれる取引のことを云ふのである。隨て投機者とは、価格の變動から利益を得やうとして財貨を賣買する人だと云ふことになる。此の投機者は普通の投資者又は商人とは大に異つたところがある。之を實例で示すならば、數日後に高價で賣らうとする目的で鐵道株を買つた人は投機者である。然るに配當金を得んがために鐵道株を買つた人は投機者ではなくて、投資者又は商人である。前者は価格の變動から利益を占めようとする者であり、後者は財産から生ずる利益を得やうとする者である。次に又こゝに二人の人があつて、何れも市場で麥を買つたとする。その中の一人は自己の水車で其れを粉に挽かうとしてゐるが、他の一人は別に使はうとする考なしに之を買つたとすると、後者は投機者である。彼は其の麥の形を變へやうとか、又は消費者の許へ持つて行かうとかはしない。唯

だ價格の動搖に乗じて利益を得やうとしてゐるのである。之に反して水車を持つた人は、小麥を粉に挽くことによつて其の功用を増すのである。彼は生産的な又社會的な奉仕をなし、それに對する報酬として利益を得るのである。此れと同様に鐵道株を買つた人が受ける配當金は、其の資本を生産的な仕事に投じた報酬なのである。されば此の人や又曩の水車を持つた人は功用の生産者である。然るに麥の株を投機的に買つた人は財貨の功用を少しも増しもしなければ、又生産上に何等貢獻したところもないのである。<sup>二</sup>

かやうに投機取引には實際の賣買とは異つた所があるが、更らに又その契約の締結される方法に於て特殊な所がある。上に述べたやうな價格の變動から利益を占めようとする取引が一定の組織の下に行はれるのが取引場である。そして此の取引場で行はれる取引には直取引、定期取引、延取引等があるが、投機取引の本體は、投機者が未來に於ける受授てふ名義の下に大量の商品又は有價證券を賣買し、實際は商品も證券も所有せず、唯だその價格の差違のみを拂ふ差金取引によつて利益を占めようとするのである。<sup>三</sup>此の場合に買手は商品を自分で受取らうとする意志がなくて、取引をしてゐるから、買はれた株は買手の所有と支配とに歸しはしない。唯だそれが賣られるまで仲買によつて持ち越されるだけである。又買はれた生産はどんな方向へでも一步も動き



はしない。唯だ買手が此等のもの、取引を終つた時に、その価格が上つたか下つたかの程度に應じて金圓を支拂つたり受取つたりするだけである。即ち實際に品物を授受せず唯だその差額だけを拂ふのである。現行はれる投機取引は大概はかゝる差金の取引である。隨て自己の目算の外れた時に、価格の差違から生ずる損失額だけを支拂ふ準備をしてさへるれば、誰れでも之を行ふことが出来るのである。されば拾圓の資金で千圓の取引をするとか、或は又百圓の資本で一萬圓の相場を試みるとか云ふ人が多數にあるのである。是れから此の投機取引の價値と缺點とを經濟上及び道徳上から觀察して見よう。

## 二 經濟上の利弊

投機取引が經濟的活動に取つて重要なことは、その著しい發達が明かに之を證明してゐる。今それに就て述べるならば、一、生産物に對する需要と供給との實況を明かにするのである。商業の幼稚な時代に於ては、小賣と卸賣とは同一の人が之を營んでゐたが、其の後取引すべき商品の種類や分量が多くなり、又取引の範圍が擴がつて來た爲め、小賣業者では廣く市場の狀況を察して適當に價格を定めることが出来なくなり、卸賣を専門とする人々が出て専ら價格の決定を司つた

ものである。併し是れでも廣く市況を洞察することが困難になり、遂に經驗と資本とを有する投機専門の營業者を生じ、其等の人々が年々收獲される貨物に就て、實物の呈示を経ずに、互に其の見込を戦はして取引を行ふやうになつたのである。之を實際の例に就て述べれば、茲に一人の木綿業者があるとする、此の人は前以て成るべく早く其の注文を取ることが出来れば、業務の手配りも良く、隨て又利益も多いのである。若し彼れが不確かな注文を當て込んで、綿の現品を多量に仕入れ、之をその倉庫に積んで置くことになる、火災や天災に遭ふ恐れがあるばかりでなく、購入費の利子も高まるから、甚だしい損になる。然るに此の場合に、彼が將來の綿の値段を豫め知ることが出来たならば、斯る面倒な手数は省け、經費や損害は少なくて済むのである。併し彼が自ら之を推測して見やうとしても、經驗も識見も乏しいのであるから、到底成功の見込はない。されば彼は天候と綿の收獲高との關係とか、前の季節の残額とか、公衆の需要とか云ふことに就て綿密な知識を有する老練な仲買人に就て將來の價格を尋ね、其れに依て綿を賣買し、自分に引き合ふやうに其の業務を營むことが出来るのである。勿論この場合に仲買人に違算のないと云ふことはない。併し木綿業者自身ほどの甚だしい見當違はないから、是れにた倚る方が己一個の了簡で事を決めるよりも遙かに安全である。



二 一般の商人は取引場の相場を標準とし、其れに由て商品の賣買を行ふことが出来るから、其の業務は大した見當違がなく安全に営まれるのである。<sup>(三)</sup>

三 其の時に於ける種々雑多な価格を平準にする。換言すれば同じ商品の価格が地方に由て異なる場合に、其れを互に融通して其の平準を得しめるばかりでなく(轉買取引)、經驗とか先見とか周到な報告とかに由て將來の危険を觀測し、價格の激しい變動を豫防し得るのである。かゝる物價の調節は個人經濟の指針として極めて必要なばかりでなく、國民經濟の上からするも、財政上又は政治上の原因より恐慌の生じた場合に、物價の暴落を防ぎ得るが故に、極めて重要な施設である。

■ 投機取引は又未來の危険を投機者に轉嫁することが出来るから、一般の商人は交易上の保證を與へられたことになる。若し數ヶ月後に市場に供給し得べき商品の代價が、現在の先物取引に由て決定されるならば、生産者は其れに由て將來の市場に於ける物價變動の打撃を受けずに済むことになる。更らに現今の取引場に於ては、現物を賣買すると同時に先物を賣買して置き、他日物價の暴落した場合に利益と差引する「現買先賣」又は「現賣先買」一名「繋ぎ取引」(hedging)と稱する損失合法法が行はれてゐる。<sup>(四)</sup>例へば茲に製粉業者があつて、或る分量の小麥を「現買先賣」

したとすると、若し小麥の値段が引渡期日前に下落した場合には、彼は粉に於て損失を蒙ることになるが、これは先物賣の利益によつて償はれるのである、之に反して小麥が騰貴した場合には差額取引に於ては損失を蒙るが、それは先物買の利益によつて差引かれるから、其の損失は之に由つて賠はれるのである。此の如く投機取引は日常の賣買より生ずる不慮の損失を保障するが故に、一面に於ては保險の役目を務めるものと云つてもよい。

斯る點から觀ると投機取引は經濟上重要な制度で、之を中心として現今の大規模の賣買は行はれ、財貨の交換が廣い範圍に亘つて敏速に果たされるのである。乍併他面から觀れば其の弊害も亦少くない。それを制度上の缺陷と運用上の邪惡とに分けて述べて見よう。先づ制度上の缺陷に就て述べれば

一 現今の取引場の組織は、仲買又は職業的投機者だけが交換に於て利益を占めることになつてゐる。投機取引を試みる一般の公衆又は商人は、市場の錯雜な事情に就て明かな知識を持たず唯だ間違つた報告にのみたよつて賣買するから、多くは損失を招くのである。そして此の損失はやがて株屋又は仲買の利得となるのである。

二 投機取引は社會の資本と指導的才能とをおびたたく汲收するのである。投機取引の行は



れる爲めに、莫大な資本が此の方に向けられ、その爲め生産的な企業に用ひらるべき資本が大に減少することになる。又實業の他の方面で活動したら、大に役立つやうな人材が此の方に奪はれる。そして彼等が之に與はると、暴富者たらんとする希望を高め、眞面目な生産的な仕事を嫌ひ唯だ機運に乗じ、一攫にして千金を得やうとすることにのみ心を挫くやうになる。<sup>(五)</sup>

次に運用上に於ける不正邪惡に就て述べれば、これは結局色々の方法を講じて價格を操縦するといふ點に存することになる。今その重なるものを擧げるならば、

一 財産なり市場の状況なりに就て間違つた報告や風説を撒き散らし、それによつて公衆の心を動かさうとするのである。例へば或る會社が初めに株の配當金を直ちに發表するといふ報告を出し、その風評が基になつて株が上つた時に、其の會社の重役なり又その知人なりが其の持株を賣り飛ばし、續いて配當金に關する以前の報告は嘘だと取消するのである。さうするとその株は忽ち下落する。株が下落すると資本の少い投機者や素人は慌て、その持株を賣り拂ふ。その際にその會社の重役や又その知人は前に株の上る時に思惑で株を賣つて大なる利益を占めたのと同じ筆法を用ひて、其の下つた株を安く買ひ込んで、二重の利益を占めるのである。

二 第二の操縦法は景氣を煽ることによつて利益を占めるのである。餘り價値のない株を持つ

てゐる者が、その株が如何にも有利であるやうに見せ掛けたり言ひ振らしたりする。そして他方では大規模で此の株の賣買を開始してその景氣を煽るのである。此の方法の目的とする所は、此の株の所有者が、此の株が將來有望だと見込んでゐるといふことを一般公衆に信じさせるのである。そして若し一般公衆が之を信するやうになると、その株は騰貴するから、その騰貴が頂上に達したと思ふ時に、之を賣り飛ばすのである。

三 操縦の第三の方法は、一人なり數人なりの投機業者が、或る財貨の賣手が非常に多いので、その相場が下落したやうに見せ掛けたり云ひ振らしたりするのである。それが株式市場に知れると其の株は下落する。その下落に乗じて利益を占めるのである。併し此の場合には同じ人が買手となり又賣手となつてゐるのである。即ち彼は二人の仲買を雇ひ、一人を賣手とし、他を買手としてゐるのである。されば此の場合に於ける賣買は賈物である。

四 第四の方法は廣大な純然たる賣買によつて株の價格を上下せしめようとする企である。此れは普通に多くの投機業者の共同資金によつて行はれるのであるが、此の方法によつて財貨を買ひ、その値段を釣り上げやうとするのを指して買占めと云ふのである。若しも此の買占めが成功すると、一人なり數人なりの人々が或る生産品又は株を獨占して、勝手にその價格を釣り上げる



ことが出来る。併し此れの成功することは甚だ稀れである。

上に挙げたのは普通に行はれる價格操縦の方法であるが、此等は何れも間違つた風説を濫用した上に秘密な報告を利用したものである。若しも此の秘密な報告が價格の自然的變動を現はすものならば、又此の報告を得る爲めに相當の勞力を費したものであるならば、又此の報告に不確かなところがあるならば、——之を利用して利益を占めたからとて別に不正だとは云へないのである。乍併若しも此等の條件の中のどれか一つが缺けてゐるならば、その利益は怪しいものになる。今假りに或る株が人爲的に釣り上げられやうとしてゐる際に、或る人がその報告を得て、上つた際に賣らうとする目的で或る數の株を買つたところ、果して株が上つて高く賣れたとすると、彼は他人の株を奪ひ取つたものだと言へる。何となれば一人の人に人爲的に生ぜしめられた利益は他人に取つては人爲的に蒙らせられた損害となるからである。然るに假りに此の價格の騰貴は商業上の自然的法則と自然的事情とに基いて生じたものとせよ。かゝる際には市況の知識と先見の明とを有する人が、價格の騰貴することを豫知して或る株を買ひ、それによつて利益を占めても、それは不當のものではない。その才能の働に對する報酬として當然享くべきものである。次に又或る人は別に勞力や熟練は費さなかつたが、餘りたよりにならぬ報告に基いて投機取引を行つた

とすると、それによつて得た利益は危険を冒した報酬として、之を是認することが出来る。併しながら、若しその報告が極めて確實なものであり、而かも本人は何等の勞力も費さずに得たものとするならば、斯る利益は、假令價格の自然的變動から生じたものなるにせよ、道徳上如何はしいものである。よしや其れが價格の差違から生じたにせよ、かゝる利徳は特殊な知識を有しない他人の衣囊から、その金銭を奪つたもので、斯る取引は他の者を不利に陥れる一の賭博である。

### 三 制度の改善

斯やうに投機取引には經濟上重要な所もあるが、併し又他面からすれば經濟的に不備な點があるばかりでなく道徳上非難すべき缺陷が少くないのである。されば此等の缺陷を矯正するのは經濟上は勿論のこと、道徳上から觀ても極めて重要なことである。仍て先づ制度上の改善に就て述べ、然る後に道徳的考察に移つて見よう。

制度に對する改正意見としては現今の取引場は之を改善すると云ふやうな微温いことをせずし寧ろ之を撤廢するがよいとする説がある。その説に依れば、生産物を商ふ人々は價格變動の危険を自らで負ふべきである。今では投機業者が此の危険を引受けようとし、商人自身は斯ることを



しようとは欲しないが、併し商人なり輸出業者なり製造業者なりは、その營業に於て偶然に起る危険は之を特殊な階級に負はせず、彼等自身で負ふべきである。さうでないに公衆がどんなに損害を蒙るか知れない。若しも商人なり製造業者なり輸出業者なりが自らその危険を引受けることになれば、倒れる人も多く出て來やう。併し假令さうなつても社會としては不適任者が除去されることになり、全體の利益は増進することになる。今では職業的投機者の有する市況に關する知識と、價格變動の範圍を局限しやうとする彼等の業務とは過大視されてゐる傾向がある。普通の商人や製造業者でも才能さへ優れてゐれば、今の職業的投機者と同じ程度の知識と先見とを具へ得るのである。危険を冒して賣買することを唯一の目的とする一團の人々だけを他と離して存在せしめるのは、分業の原理を必要なしに極端まで推し進めたものである。専門の投機業者の方が小さな資本家よりも種々の有價證券の眞の價値を一層よく知つて居り、又彼等は投機取引といふ活動の行はれる時よりも一層正しく價格を決め得ることは事實である。しかし假令株の賣買は行はれなくとも株式市場は存在するであらう。言ひ換へれば假令職業的投資者はなくとも、そして株は單にその配當金の爲めにのみ買はれても、投資者は安定した相場で充分に正しくその株を買ふことが出来るであらう。これは現今の投機取引では賣買も交換もされてゐない有價證券が多

數に存在することによつても證明されるのである。獨逸の有力な經濟學者は、生産品の交換は必要な制度であるが、株の交換は不必要にして有害な制度であると公言したのによつて觀ても、現今の投機取引には制度上の缺陷の存することが認められる。以上が取引所撤廢説の主張の要點である。

これは極めて徹底的な見解であるが、併し是迄相當に發達して來て居り、今でも經濟上重要な役目を務めてゐる現今の取引場を今直ぐに撤廢しようとするのは餘り突飛な説である。そこで比較的實行し易い方法と云ふことになると、現今の制度に於ける弊害を改善するより外はないと云ふことになる。今我國の取引場に於ける制度組織上の改善すべき點に就て觀るならば、それは簡單に擧げ盡せぬ程多いのである。例へば取引所以外に於て所謂呑み屋の手に由て取引が秘密の裡に行はれるとか、取引者が實物現金を受授せぬと云ふ默契の下に於て取引して差金を授受し乍ら取引所に對しては受授を終つたと届出る假裝的取引の如きはそれである。此等に對しては取引所以外に擔保制度を設けるとか、其の組織を公共の營造物として、公共の管理に屬せしむるとか、又は株式組織として、其の株の大部分を仲買人に所有せしむるとか、仲買人をして共同の積立金を爲さしめて、鞏固な合資組織にするとか、其他仲買人の資格を改善するとか、身許保證金額を引



上げるとか、又は保証人制度を厲行するとか、取引所の違約賠償の範圍を擴張するとか色々な方法がある。此の中で最も必要なのは、仲買人の地位を高めることである。これが爲めには仲買人志望者の知識経験を検査し、又其の身許財産を調査して、相當の資産あることを確めた後に、之に就業を許すと共に、仲買人の團體に相當の權限を與へて、各自をして其の任務を自覺せしめ、品性の向上に充分に意を注がしむべきである。現今の投機取引に於ては、仲買人は申すに及ばず投機業者までが充分の資力を有せず、唯だ公衆を欺て奇利を博さうとしてゐるが爲めに種々の弊害が生ずるのである。されば斯る弊害を除かんと欲せば、仲買人や投機業者をして、將來に就て確かな保證を有せしめて、眞に公衆の欲求に應ぜしむるに在る。他人の金を當てにして契約を結ぶのであつては、利益のある時には、其れを自己のものとし、損害の生ずる時には其れを他人に稼することになる。斯くては全くの賭博で、商賣ではない。されば仲買業者や専門的投機業者に向つて何より先に要求せねばならぬことは、將來の保證となるべきだけの資金を所有すべきことである。現今の歐米の實業界に於ては、相當の資本と經驗とを有し、正當の利益を目指す規模の大きな委託商か仲買商でなければ、一般の需要に應ずることは出来ぬことになつてゐる。そして此等の諸國に於ける目下の緊急問題は、公衆の要求する生産と安固とに就て、正しく豫測する投機業者に

對しては相當の報酬を拂ひ、他人の金のみを當て込み詭計を弄することに由て暴利を貪るやうな投機業者や仲買人に向つては宜しく懲罰を加ふべきだとする點に存する所を以て觀ても、現今の投機取引改善の焦點の奈邊に存するか、略々推察されるのである。

#### 四 道徳的缺陷

投機取引の道徳上の缺陷は上にも述べたやうに、價格を操縦して人爲的に利益を占める點に存するのであるが、斯ることの行はれると云ふのは、之に與はる人々の考に於て間違つた所があるからである。投機を試みる人々は取引場をば人々互に利を争ふ戰場だと解し、各人皆自己の武器で敵と戦はうとしてゐるのである。戦争では手段を擇ばない。取引を戦争と心得てゐる彼等は、自己の利益を得る爲めには價格の操縦もしよう、秘密な報告も出さう、詐欺も行はうと云ふことになるのである。かゝる所から歐洲の有名な經濟學者の中には、投機取引は明敏な辯護士でもどこから詐欺が始まり、合法的行爲がどこで止んでゐるかを精確に定めることの出来ない程に精巧な法則によつて行はれてゐる一の竊盜だと述べた人さへある。

そしてかゝる態度で投機取引に従事すると『人々の神経は極度に緊張し、その心意は常に張り



つめてゐる。商業的危険を冒すといふ商業上の原理の指導によらずに、多數者の意見に基き、或る株の變動を見張つたり、それを堪へ忍んだりし、彼が始めから支拂つた金だけの値打ほかないものに對して法外な價值を評價してゐる。かゝる商賣は高尚なものではない。かゝる商賣に従事する人で人格の高い人は殆んどない<sup>(二二)</sup>のである。

第二の缺點は全く機運のみにたよる賭博であることである。ラスキンは斯る投機取引の弊害を認めて「概して云へば、近代の投機取引は自己の利益を求めて他人を危険に陥れるものである」假令其れの最もよく行はれた場合でも、賭博か寶物探しの域を脱しない。恰も路傍の銀鑛を探さうとして手堅い農業や巡禮を廢めたり、或は虚榮市に於て骨牌の賭けに熱中する時のやうに、自己の思考と熱情とを骨牌札の落ち具合のみに傾けて、健實な勞作よりも變轉窮りなき機運に就くものである。されば常に平和と徳とを破壊するばかりでなく、更に激しい害惡を世に及ぼすものである<sup>(二三)</sup>と述べ、その實例として一人の投機業者の身上話を擧げてゐる。この人が生ひ先の短い晩年になつて、今迄夢中で過ごした己が半生を追懷して、うたゞ感慨に堪へざるものゝ如く、思はず嘆聲を發してゐる。あゝ吾は吾が職業の爲めに如何ばかり身心を挫いたことであらう。それが爲めに中年の元氣は衰へ、意氣は沮喪し、腕力は竭き、老年に入つてからは慘憺たる境遇に陥つ

てしまつた。吾が幼くして兩親の膝下で幸福なそして平和な日を送つた時に、吾が心に輝いた希望は決してこんなものでなかつた！と。幼時心た描いた希望が遂げられぬと云つて、老年に至つて悔ゆるのは此の人だけに限つた話ではないが、無智な他人を誤魔化して、己れ獨り機運に乗ずることによつて莫大な利益を占めようと云ふ淺ましい仕事に半生を投じただけに、その悔悟の情の一層切なるものがある譯である。

併しこゝに起る疑問は、投機取引が經濟上必要だとすると、こゝに一人の人があつて、少しも不正な手段を用ひずに之を行ふ際には、その行爲を如何に評價するか。全く價格の變動のみによつて利益を得やうとする目的で交換市場で賣買するのは悪いことだらうかと云ふことである。此れに對しては直ちに悪いと言ひ切ることは出来ない。併し此れは抽象的に觀ての答であつて、實際の事情からすると、現今の投機取引には制度として如何はしい所がある上に、之を運用する人々が不正な手段を取つてゐるから、此れに與はつて相當の利益を占めようとせば、どうしても現在行はれてゐる運用法に順應せねばならなくなり、自然不道徳に陥るのである。事實に於て投機取引に手を出した人は貪慾になり、同胞の損失によつて己が利益を占めようとするあさましい欲



望を高め、正直を守らず、生産的勞働を嫌ひ、結局自己を破産せしめるのである。

されば投機取引の性質と結果とをよく知つてゐる人や又高尚な道德的觀念を有する人は、現今のやうな純然たる投機取引に一身を投じやうとはしないのである。

之を要するに投機取引は頭下し悪いものだとは云へないとしても、經濟上から觀れば、その功の疑はしい制度であり、道德上より觀れば、大部分不正な方法で行はれてゐるから、之に與はる人は如何にその志操が健實であつても、不正な行動を全然避けることは出来ないのである。

## 第十二章 競争

### 一定 義

若し現代に於ける人心の特徴を一言で表はすならば、それは忙しいと云ふことであらう。誰れもかも其の仕事に追はれて、片時と雖も伸んびりとした気分になることがない。その中でも實業界の忙しさは又格別で、人々は唯だもう營利の爲めに醒寤として日も是れ足らぬと云ふ有様である。何うして斯う忙しくなつたかと云ふに、其れは全く競争の激烈な結果である。現代ほど社會の各方面に互つて競争の激烈なことは未だ嘗て其の例を見ないのであるが、取り分け實業界は生活に直接必要なものを得ることを主とするが故に、實業界に於てはそれが最も甚だしいのである。元來競争は個人に向つて奮勵努力を促し、經濟界に活氣を與へるものであるが、其れが激しくなると、他に打克つことが主となつて、手段を擇ばず、爲めに種々の弊害を生ずるのである。



競争にはかやうに長所と缺點とが存するのであるが、其の中孰れが一層大であらうか。或は両者が互に匹敵し、其の弊害は其の進歩に向つて拂ふべき當然の犠牲と見るべきであらうか。若し後の場合だとすれば之に對する解決は自然の成り行きに任せるより外はない。併し若し人々の短見淺慮が此く競争を激しからしめたとか、或は優者が自己の利権を伸ばさうとした結果かく競争が激烈になつたとか云ふことであれば、其れに對する矯正の道は充分に之を講究せねばならぬのである。

競争の實狀に就て考察する前に明かにせねばならぬのは競争といふ語の意義である。是れは日常の會話に於て社會問題が話頭に上る時には必ず引合に出される語であつて、其の意義は誰れにもよく解つてゐて、今更改めて説明する迄もないやうに思はれる。併し一度び之を糺して觀ると甚だ漠としてゐて、人に依て其の解釋を異にしてゐる。或る人は之を進歩發展の原動力と解し、他の人は冷酷我慾の原理と觀てゐる。同一の事實に對して斯く全然反對の見解が取られると云ふのは未だ其の眞義が明かにされてゐない證據である。

然らば競争とは如何なることを指すかと云ふに「同一の活動に就てゐる個人が他人を排し除けて自己の利益を占めやうとする行爲」、即ち「多くの個人が同時に同一物を獲やうとする所から生

ずる敵對的行爲」のことである。されば其の主眼とする所は、對象を得るに在るが、同時に其れを得んとする他人の存する爲めに、それと對抗し、それを凌がうとするのが競争に於けるあらはな方面である。併し經濟上の競争では單に當事者の雙方のみでなく顧客と云ふ第三者が加はるのである、即ち實業界に於ける競争では兩當事者が第三者に向つて奉仕なり財貨なりを同時に提供するのである。そして第三者に取つて最も役立つものを提供したものが迎ひられて報酬を受けるのである。されば實業上に於ける競争は生存競争とは異つてゐる。生存競争では第三者に害を與へるのが普通である。例へば二匹の虎が同じ鳥を争ふ場合に鳥は害のみを受けて利益は受けないのである。然るに二人の工場主が同じ職工を争ふ場合には職工は其れが爲めに利益を占めるのである。互に争ふ者の身に取つては何れか一方の損失となるが、第三者の立場からすれば、競争が激しい程利益が多いのである。鳥に取つては虎の多い方が不安を増すことになるが、職工に取つては工場主が多くゐて互に争ふのが利益である。

次に生存競争では生存を目標とするが、實業界の競争では營利を主眼とする。營利は生存上極めて必要であるが、併し是れに事缺いても餓死する迄には至らない。されば營利の競争に於ける失敗者が直ちに生存競争の失敗者とはならない。彼等は窮境には陥らうが、生活の程度を低める



とか他に寄食するとか云ふ方法に由て生活だけは續けることが出来る。換言すれば經濟上の競争は營利心と云ふ個人に於ける一つの能力の競争であるから、是れを發揚することが他人よりも劣つた爲めに利益を得べき機會は失つても、其の人の生死には關係しないのであるが、生存競争は各人が全身を捧げてする所の命掛けの競争であるから、其の成敗は直ちに個人其もの、生死に關するのである。實業界に於ける競争は單に反撥力の強弱によつて雌雄は決せられない。其の時の状況に對する順應力の巧拙に由て成敗が決められるのである。獸類が互に餌食を奪ひ合ふが如き競争は實業界に於ける競争ではない。眞の經濟的競争であるならば、何うしても社會の必要に應ずることに由て自己の利益を進めることを主眼として行はれるものでなければならぬ。

## 二 實 質

競争は實業界のあらゆる方面に於て行はれてゐる。其の生産に關するものは、企業組織の規模とか、職工の募集とか、生産品の質量とか云ふやうなことに於ける争が其の著しいものである。併し現今に於ける生産は殆んど皆顧客の爲めに、市場に向つて營まれるのであるから、生産の競争は實は賣買の競争の中に含められ得るのである。依て本章に於ては賣買の競争に就て述べよう

と思ふ。是れが現今の實業界に於ける競争の中心をなすものであり且つ又最も激烈なものである。賣買の競争は、賣主相互の間にも、消費者又は買主相互の間にも、また賣主と買主との間にも起る。賣主間の競争は、需要の方が供給よりも少くなつた時に生ずる。此の需要の少いと云ふことは、需要する物質が一定の分量に限られてゐるか、又は購買力が微弱であるか、孰れか其の一に基く。第一の分量が一定の分量に限られてゐると云ふのは、速かに消費さるべき財貨が過多に生産された場合に起る現象で、實際からすると極めて稀であるが、斯ることから生ずる競争は、其の結果として物價を暴落させる。併し物價は暴落しても商人は自己の商品を賣り拂ふことが出来ないから、甚だしく困難な地位に陥るのである。第二の購買力の微弱と云ふことは重に贅澤品に於て起る現象で、此の場合には賣手は其の商品を賣り捌く爲めに値段を引き下げねばならぬ。併し値段を引き下げると、賣手に財政の餘裕がない限りは到底遣つて行けないから、遂には投げ賣りをする。併し其れでも間に合はないと、遂に市場から脱走せねばならなくなる。

次に買主の競争は重に日用品に於て起る。日用品は供給が不足しても消費者の方で其の需要を減少することが出来ないから、比較的不必要な他の品物は節約しても、是れ丈けは是非共得やうとする。隨て價格は益々騰貴する。若し是れが贅澤品であるならば、供給の減少した時には價格



を引上げさへすれば需要が減少するから、斯る競争は起らぬのであるが、片時と雖も缺くことの出来ぬ生活上の必需品に於ては斯る調節はとも出来ないのである。

此の外に價格決定の爲めに賣主と買主との間に起る競争がある。此れの最も著るしいのは労働者と資本家との間に起る競争で、其れが賃銀の標準を上下するのである。

### 三 競争の利害

上に述べた事情から賣主は競争の無いことを欲し、買主は競争の盛なことを欲する。又職工は労働の競争がなくて賣買の競争あらんことを欲し、事業主は労働の競争があつて、賣買の競争の無きことを欲する。斯く其の境遇によつて競争に對する見解を異にすると云ふことが、競争其ものに利害の兩方面が含まれてゐることを示すものである。そこで此の兩方面に就て少しく觀察して見よう。其の利益としては。

一 物價の常正を保つこと。若し競争が無ければ物價は慣習とか、官廳や獨占者の專斷とかに依て定められる。左うなると價格は固定したもとなり、社會一般の需要では動かさなくなり、其の結果は經濟的活動を緩漫にし、其の進歩を阻害する。之に反して競争が充分に行はれる時に

は、各個人は其の欲望や努力を市場に於て自由に取り交はせて、其の欲するまゝのものを得、其の需ぐものは買はれることになるから、因襲的に固定した價格を恪守する場合よりも個人に取つてはどの位便利か知れないのである。そして斯る競争が供給者の間に行はれる時には、價格の暴騰を防ぐことになり、又それが需要者の間に起る時には其の暴落を防ぐことになり、自然の状態に應じてよく價格の常正を保ち得るのである。併し是れに就て注意すべきは、斯く價格の常正を保ち得る爲めには多數者の参加を必要とすることである。若し賣手が少數であると、賣り惜しみをしたり、又合同して價格を高めたりする。又買手が少數であると、互に連合して賣手に當り、競賣を強ゆるから、價格は常正を保ち得ないのである。然るに多數者であると、容易に結托が出来ぬから、其の間に自然と競争が起つて、價格は常正を保ち得るのである。

二 製品及び營業法の改良を促すこと。生産者間の競争は結局其の製品の捌け口の争ひ合ひとなるが故に、各自社會の歡迎するやうな品物を生産せんとして種々の改良や工夫を施し、成るべく無駄を省いて巧妙に且つ又多量に生産するやうになる。

三 競争の行はれる爲めに個人は活動力を進め、智能を發揮する。若し競争が行はれないと、個人は生活さへ出来れば、其れでよいとして満足し、新しい活動の方面を開拓しやうといふ望を



起さない。然るに競争が激しいと愚圖々々してゐては忽ち他人に壓倒される。其れが爲めに奮勵努力して成るべく新規なそして有効な方法を取らうとして苦心するから、自然と知見も開け、進取の氣象や活動力も強くなる。自發性とか創始力とか獨立心とかは誰れにも具はつてゐるのであるが、其れを働かせないと遂には萎縮してしまふ。競争があると此等の可能性は刺戟されて著しく發達するのである。<sup>(七)</sup>

四 適材を適所に置くこと。<sup>(八)</sup> 生存競争に於て觀られるやうな適者殘存てふ自然淘汰の法則は經濟界にも或る程度までは當て嵌るのであつて、競争の激しい結果は能力者が重要な位置に就き、無能力者が其れに相應した容易い仕事に當り、各人が夫々自己の最善を盡すことが出来るから、社會全體として能力の標準が高まり、情實や身分や制度の力で無能力者が重要な位置を占めたり有能者が其の能力を充分に伸ばすことの出来ぬといふやうな場合よりも、個人としては仕事に對する一層の満足と興味とを催うし、實業界としては精力や能力の浪費が省けて、其の効果が著しく舉ることになる。

次に弊害としては

一 價格の割合に品質の劣惡な商品を社會に供給すること。<sup>(九)</sup> 競争が激しくなると、其れに克た

うとして廣告料とか手数料とかに多額の費用を充てることになる。例へば樂隊とか引札とか新聞の廣告とか云ふやうな人目を牽く種々の考案を回らし、其れに掛ける費用は決して少くはないのであるが、其れを悉く生産費の中に加へるから、價格の割合に品質の劣惡な商品を賣り出すことになる。

二 破壊的に陥る。<sup>(一〇)</sup> 競争は優良な生産品や精巧な商品を促す反面に於て、劣等な生産品や粗惡な商品を市場から驅逐するものである。元來生産者又は賣却者は商品の賣れ行きを主とし、其の品質の適不適に就て考慮を費すものであるが、競争が激しくなると生産法や品質のことは二の次ぎにして、先づ競争者を壓倒し、何とかして之を競争場裡から驅逐しやうとし、其の爲めに全力を集中するやうになる。斯うなると生産費の大部分は破壊の爲めに投ぜられることになり、社會に取つては非常な損害である。

三 品性を下劣にする。<sup>(一一)</sup> 競争に克たうとする方面の能力のみが發達して、他の高尚優美な性質が微弱となる。かの隨所に掲げられる毒々しい廣告が如何に不快な感を世人に抱かせるかといふ一事を以て觀ても知られる通り、競争の激しい時には各自が他人を凌がうとして劣惡不正な手段に訴へる爲めに、狡猾とか冷酷とか我執とか云ふ劣惡な方面のみ發達して、他人と共に交歡和



樂するといふ高尚優美な方面は次第に委靡し枯渴するのである。

四 貧者と富者との間の意志を疎隔する。<sup>(一三)</sup> 競争の激しい時には、優者は成るべく多くの利益を得やうとして職工を酷役し虐待する。そして斯る冷酷な手段を用ひたものが成功して、社會の資本を獨りで運轉し又消費する權力を握るが爲めに、其れを恃んで益々横暴を極め、貧窮者に對しては同情は愚かなこと、却て其の意氣地のないのをじれつたいこととして益々冷酷な態度に出で易い。之に反して劣者は如何に働いても生活に追はれる爲めに、その奮發心や活動力が鈍り、情氣、懈怠、失望等が益々募り、自分等を斯る不幸の境遇に陥れたのは、残忍酷薄な事業家だとして益々憎惡怨恨の念を高め、其等の者のする事は悉く猜忌嫉妬の眼を以て眺め、機會あらば、其れに反抗し、其れを破壊することによつて切めてもの腹癢せにしようとするやうになる。

凡そ人類社會に存する活動の體制には、孰れにも利害の兩方面を含むもので、其の價值は兩者を比較して觀た上でなければ定らぬのである。若し經濟界に於て各個人が其の勞作の優秀を競ひ、其の能力の發揮を争ふと云ふやうに正々堂々の陣を張つて競争を行ふならば、個人としては自我の發展を進め、經濟界としては利益を増進し、其の存在の價值は充分に現はれるのである。之れに反して若し個人が其の努力の向け方を誤つたり、或は盲目的行動を取るならば、其の弊害は決

して少くはないのである。例へば自己の利益のみを目指して、需要の如何をも顧みずに其の製品を市場に向つて過多に供給するとか、又は自己の品物を無理に買はせやうとして卑劣な手段に訴へ、時に依つては相手を壓倒したり破壊するとか云ふやうなことが紊りに行はれる時には、其の弊害の方が利益よりも遙かに大となるのである。而かも現今に於ては、斯る弊害の例に接することが少くないのである。斯くては社會の紊亂を來すこととなるから、之に對しては然るべき制裁の方法が講ぜられねばならぬ。我國に於ては斯る行爲を一括して不正競争と名づけ、それに対する取締法が設けられてゐる。仍て是れに就て少しく觀察して見ようと思ふのであるが、その前に不正競争と云はれるものに就て一と通り攻究して見よう。

#### 四 不正競争

不正な競争の起る場合は種々雑多であるが、その中の重なるものは生産者の間に起るもの、卸賣業者の間に起るもの小賣業者の間に起るもの等である。<sup>(一四)</sup> 生産者の間に行はれる不正競争として第一に擧ぐべきは、製造業者が獨占權を得て他の同業者を壓倒する場合である。例へば或る電氣會社が外國の電氣會社から或る特別の電球を製造する特權を譲り受けて之を製造販賣するが如き



場合である。かゝる際に一般の消費者は廣告によつて動かされ、又特異なものを得んとする好奇心に促されて頻りに之を求めるので、卸賣業者や小賣店は是非共それを備へて置かねばならなくなつて、之を仕入れる。その爲めに他の電球製造業者は大なる打撃を受けるのである。製造業者の間に行はるゝ他の不正競争としては、卸賣商なり小賣商なりに對し、若し他の製造業者から買はぬならば特別な割引をするとか約束したり、或は又原料品の値段を釣り上げて財力の乏しい競争者を驅逐したり、又は自己の競争者たる他の會社の設備、生産力、職員、營業振等に對して色々悪口造言をして顧客に疑念を起させ、その製品の購求を思ひ止まらせるが如きものがある。次に卸賣業者間の不正競争としては地方的廉賣を擧げることが出来る。地方的廉賣とは或る競争の盛んな地方に於ては生産費以下の廉價で商品を賣却して競争者を壓倒し、その代りに競争者のない他の地方で高價に賣つて之が埋め合せとするのである。次には又製造業者を買収して自己の競争者には商品や器械を供給せしめぬやうにし、若しも之に賣つた者のある時には、それに對して非買同盟<sup>イコット</sup>を起して脅嚇するが如きも此れに屬する。第三の小賣業者間に於ける不正競争としては、銀行家を抱き込んで己が競争者に資金を融通せしめぬやうな處置を講ずるが如きはその著しい場合である。例へば或るデパートメント・ストアの店主であり、且つ又銀行の頭取である人がそ

の競争者に對して、自己の銀行の金を貸すことを拒むばかりでなく、市中の凡べての銀行家と結託して己が競争者に金を貸さぬやにして之を壓迫するが如きである。尙ほ此の部類に屬するものには廣告を利用して競争者に損害を與へるものもある。例へば或る米穀商が自分の家で賣る米には早搗粉が全く這入つてゐないと廣告をするやうな場合で、之を觀た人々は早搗粉の衛生上に害のあることを知つてゐるから、他の店の米を斥けて、その廣告した店の米を買はうとするのである。併し實際に於ては幾分か早搗粉を入れて搗かなくては多量の白米は到底供給が出来ないのである。その他自己の鬻ぐ商品の生産地や品質等に就て虚偽又は誇大な廣告をするとか、賄賂を行使して顧客を牽き付けるとか、或る種の商品に限り唯だ口錢だけを取つたり、又は損耗を見込んで販賣したりして、その香餌を以つて顧客を牽き寄せて他の商品を賣り付けやうとするとか、他人の營業又は商品に就て虚偽の聲言をなし其の信用を傷けるとか、又は他人の營業上の秘密を不正な方法に依て探知して、それを競争の手段に供するとか、或は他人の商號、看板、商標、商品の包装、意匠、體裁、特許等を模倣し又は侵犯して自己の營業又は商品を他人の營業又は商品と誤認せしむるとか、自己の商品の産地品質等に關して虚偽又は誇大な廣告をするとか云ふやうな類は皆この中に入るのである。<sup>(二四)</sup>されば一言で云ふならば、他人に迷惑を及ぼすやうな手段に訴



へて競争に勝たうとする行爲は凡べて不正競争てふ名目を被せることが出来るのである。

かゝる競争の募る時には、單に當業者相互の破壊となるばかりでなく、引いては社會の紊亂を來たすことになるから、之に對しては適當の制裁を加へねばならぬ。其の方法として經濟上に於て行はれてゐるのは合同であり、思想上に於て唱へられてゐるのは社會主義である。經濟上に於ける合同は一見すると個人的競争の弊害を除き得るやうであるが、世界を通じての一大合同の生ぜざる限り、合同者間の利害の衝突の絶えることがないから、結局、角を矯めて牛を殺すことになる。又社會主義は理想としては立派なものであるが、其の主張するが如き競争なき調和の状態は到底實現されるものでない。されば不正競争に對する防止法として現今最も有効なのは法律上の制裁である。我國に於ては是れが種々の規定となつて現はれてゐる。その一般の規定としては民法第七十九條に「權利ノ侵害ヲ以テ不法行爲ノ要件トス」とある。商號に關するものは其特別法として發布され、信用の毀損又は業務の妨害に就ては刑法の第二三二條及び第二三四條及び内務省令第十六號警察犯處罰令第二條五號に、懸賞富籤に就ては明治三十三年公布の内務省令第二十六號に、不正廣告に就ては警察犯處罰令第二條第六號に規定されてゐる。此等の規定に依て社會の紊亂を來たすやうな甚だしい不正行爲に對してはそれ／＼その制裁が加へられるが爲めに、

我國の社會の秩序は兎も角維持されてゐるのである。併しながら同じ經濟界に起る行爲を斯く別々の規定に依つて律しやうとするのは、實に其の處置の統一を缺き、手續上の繁雜を來たすばかりでなく、同種類の規定が諸所に散在してゐては、社會秩序の維持に取つて最も重要な制裁に對して社會一般の注意を集注せしむることが困難であり隨て又其の效力も減少することになる。左なくとも經濟界が分化發達して、實業家の行爲の標準が各方面に依て區々雜多に傾きつゝある今日、あらゆる不正行爲に對する制裁の方を統一することは、實業界の健實な發達に取つて極めて必要のことだらうと思ふ。

### 五 道徳的矯正

併し如何に法律上の規定が整頓しても、其れのみに一任して置いては、不正競争は到底止むものではない。其の譯は(一)法律上の規定は其の性質上一般的でなければならぬ。所で之をそのまま現今の實業界に適用しようと思へば、込入つた特殊の事情に向つて適切を缺く恐れあると共に又競争的社會の下に成立した個人の權利や職能に向つて不當な干渉を加へると云ふことにもなる。(二)法律となれば、威力を以て強制するのみで、懇ろに説諭して改悛させやうとする所がなく、



監督とか刑罰とか云ふ冷酷な手段を以て其の規定を厲行しようとするから、其の命令の厳しい間は其れに恐れて服従するが、其れが少しく弛めば、忽ち悪事を新にするようになる。(三) 當業者は巧みに法網を脱れる道を講じ、勞働者を私かに買収したり、新しい危険な事業を興したりして法外の利益を占めようとする。隨て法律は何時でも不正行爲を後から追つ掛けて行くやうなことになる。(四) 又如何に法律上の規定を設けても、個人の利己心の失はざる限り、不正行爲は絶えるものでない。雇主は自己の利益の上から職工を酷使し、職工は自己の利益の主張の爲めに破壊を敢てする。其れが爲めに假令慈悲寛大な雇主があつて勞働時間を短縮し、衛生的條件を改善しても、職工はそれを少しも感謝せず、却つて疑の眼を以て觀ると云ふことになる。更らに甚だしきは假令法律上の刑罰を受けても、其れと差引いた結果自己の利益となることが明かであると不正を敢てして恬として耻ぢざる破廉耻漢さへ生するのである。

されば不正競争を防止する手段としては法律だけでは不充分である。法律よりは寧ろ社會の制裁の方が有力である。社會の制裁と云はれるものの中には無論法律も這入るのであるが、こゝでは法律と云ふやうな明かな形式を取らぬところの社會の輿論と慣習とを重に指すのである。輿論は社會に於ける多數者の意見の一致であり、慣習は時代から時代へと傳承される行爲の標準であ

るが、此等は個々別々に働いては健全な制裁力とはならない。輿論は出來なりの思想で、その形もはつきりとせず、常に動搖して一貫した所がないし、又慣習には保守的で時代の進歩に添はぬところがあるから、新しい事情に對するものとして適切でない。されば有力な社會的制裁力たる爲めには兩者が合體して働かねばならぬ。即ち『斯ういふことはしてはならぬ』と云ふ事が慣習的に成立して居り、之に背いた者に對しては輿論が強く責めると云ふやうになつてゐなければならぬ。グロートが慣習に威力の存する所以を説明して『事物に於ける既定の事實であり又状態である。其の起源は不明であるが、人々は生れながらにして其の存在を見るのである。そして此れが個人の天性の一部ともなり、心意の習慣ともなり、心的傾向の形式ともなり、これに従て一々の經驗は説明され、各個人の行動は評價を受けるのである。そして此の社會的信條に反抗する個人は社會の憎惡と輕蔑と嘲笑とを招き、社會からの好意と尊敬とを失ふ』と述べてゐるが、これは慣習が同時に社會の輿論となつてゐるのであつて、慣習が大なる威力を有するのは全く此の點に存するのである。實業界の不正競争を防ぐのにも慣習の輿論的制裁の盛んなことが極めて必要で、これによつて或る程度迄邪惡狡猾な行動は抑壓され、物價とか勞働者の待遇とか契約の履行とかに關する標準も一定し、當事者は平等の基礎の上に立つて實力によつて競争することが出来るの



である。

近代の個人主義的風潮の影響を受けて歐洲では慣習の勢力が大に衰へたが、それでも尙ほ可なり有力なものがある。獨逸や佛蘭西が近代に至つて不正競争禁止の法律を制定したことなどは直ちに慣習の力だとは云へないにしても、少くとも慣習の受持つべき社會的制裁力が尙ほ勢力を占めてゐることを示すものだと思はれる。又英國の經濟學者フーバーが嘗て『我がヨークシャー州の商工業は産業上の幾多の經驗に打ち克つて時代と共に進歩してゐる。これに對しては外國の競争は毫しも恐るゝに足らぬ』と述べてゐるのが、これは英國に於ける産業上の方法に對する信頼を現はしたものであるが、併し又その方法が多年の經驗によつて正しきを得てゐると云ふ自國の商習慣に對する誇りを現はしたものだとも云へるのである。

我國に於ては明治維新前には商工業者の間に『風俗』とか『格式』とか『商の道』とか『商人の法』とか云ふ名目の下に、個人の行動の標準たるべき慣習が大なる勢力を有し、個人は之に背かぬやう深く心を用ひた爲めに、その行動が常規を逸せずによく社會の秩序を保ち得たのである。萬治の頃商人が借金の證文に『萬一此の銀子返濟不申候はゞ人中にて（又は町内打寄り）御笑ひ被成候とも其節一言の申分無之候』と記したのによつて觀ても知られる通り人々は世人の嘲笑てふ社會

的制裁を最も恐れて正道を守つたのである。然るに明治維新の際に幾多の良風美俗が打破されたと同時に商工業者の間に行はれてゐた慣習も殆んど皆消え失せてしまつたのである。斯ることが商工業者をして不正を敢てして憚らざるに至らしめた有力な原因をなしてゐる。

併し輿論はその時の事情によつて急激に變化して一定しないし、又道徳的なこと、悖徳的なこととを區別してゐない。その爲め輿論では時に不義亂倫な行爲を大目に觀たり、又はその積んだ富の一部分を社會公共の爲めに寄附した故を以て窃盜的暴富者を賞讃したりする。されば不正競争を防止する手段としては輿論だけでは未だ不充分である。もつと一貫的な合理的制裁力が必要である。ところで左ういふものが果してあるだらうか。全くないことはない。それは企業者の間又は組合の内に於ける道徳的法典又は實業上に於ける行爲の典範である。則ち實業家の團體又は組合が各人の守るべき條項を定め、各自それを堅く守るやうに心掛けることが、不正行爲を矯正すべき最も適切な方法であらう。例へば製造業者ならば粗製品又は混製品とか、賄賂の行使だとか云ふものを禁止し、小賣商ならば顧客の信用を重んじ、正直な廣告をなし、契約を正しく守り不當の廉價を避けるやうな規定を設けるが如きはそれである。若しもかゝる法典が定められて、各自が堅くそれを守るならば、御互の間の誤解も解け、營業上の危険も減じ、無用の勞費を省き



各當事者が同じ基礎の上に立つて、その業務を行ふことになるから、競争も自づと正しきを得るのである。

斯く道徳法典の規定は不正競争を防止する爲めの必要な手段であるが、併し此の制裁には外附的強制的な所が多くて、自發的積極的などころが缺けてゐる。換言すればこれは他律的であつて、未だ眞に自律的になつてゐないのである。實業家が自律的に不正な競争を避け得る爲めには、自己の使命任務を充分に自覺することが必要である。即ち實業家は人々の生活上の必需品を供給することによつて人類の福祉の増進に向つて應分の寄與貢獻をなすべきだとする自覺を一層高むべきである。實業家が其の使命任務を自覺すれば、行動するに當つて、必ず社會に對する奉仕を主眼とするやうになる。製造業者ならば品質の優れた製品を提供し、商品には合法的な價格を附し、小賣商ならば顧客に對して丁寧親切を旨とし、銀行業者ならば顧客に最も便利なやうな貸附けの方法を講ずるやうになる。若し左うなれば不正競争は自づから減少することになる。併し競争が眞に正しく行はれる爲めには實業家が自己の使命任務を自覺するだけでは未だ充分だとは云へない。更らに進んで競争の眞の意味をよく理解するに至らねばならぬ。即ち競争をば他を凌ぎ壓倒する機會だとせず、自己に向つて刺戟を與へる機會だとするに至らねばならぬ。吾々の従事する

如何なる事業と雖も他人の刺戟と獎勵とによらねば充分に成就はしないし、又吾々の活動の一點一畫と雖も他人の仕事と比較對照せねば充分に營まれるものでない。吾々は他人の成功や業績から常に大なる力と光明とを得ることによつて、初めて自己の業務をよく果たすことが出来るのであると云ふ斯様な見地に達しなくては競争を眞に正しく行ふことは出来ないのである。然るに若しも實業に従事する人々が斯る見地に達するならば、競争をば社會に於ける合理的善の實現の手段として生かすことが出来るのである。されば實業界に於ける競争の正しきを得るが爲めには、結局實業家はその智見を高めて、自己の使命と競争の眞義とを深く知覺することが最も必要である。



## 第十三章 國家と實業

實業に對する我が國家の方針は時代により方面に應じて多少其の趣を殊にするが、大體の所は爲政者又は國民によつて屢々口にせらるゝ富國強兵と云ふ綱領の上に現はれてゐる。この綱領は國運發展上に於ける焦眉の急務を概括的に示したもので、我國が是迄に贏ち得た世界に於ける一等國たる位置を保つて行く爲めには、屈強な兵力を以て外患に備へる外に、財政を裕かにし、經濟上の發展を圖らねばならぬ。我國の兵力は世界の列強と比肩して優るとも劣ることなき程に進んでゐるが、經濟力を進むべき實業に至つては歐洲列強の最下位に位し、英國の五分の一にも及ばぬ狀況に在る。かくては文明の發達を圖り、國民の福祉を進め難きは勿論のこと、一旦緩急ある時に優勢な兵力を充分に活動せしむることも出来ないのである。されば我國に於ける緊急な政策をば武力と富力との増進に在りとし、而かも強兵よりも富國の方を先にしたことは——恐らく語路から出たのであらうが——實際に於ける重要な順序に従つたものと觀られるのである。

このうち強兵に關することは問題外であるから之を措き、富力の増進に就て國家が如何なる政策を採るべきかに就て少しく考察して見ようと思ふ。

國家の富は國家自らが生産するのではなく、國民各自の努力勉勵の力に由るのである。隨てこの場合に國家の採るべき方針としては、成るべく個人に活動の自由を許し、其れが公安を害さぬやう適當な掣肘を加へ、個人の經營に任せて置いては、弊害が生ずると思はれるものだけを國家が經營すべきである。換言すれば個人が其の利益を進めることが難て公共の利益の増進となるやうに國家が指揮し監督すべきである。現今世界の一等國に於いては多少の差違はあるが大概かゝる政策を採つてゐる。是れが世に國家社會主義と呼ばれるものである。

我國に於ては維新の際に從來の秩序が打破され、歐米の新思想が輸入された結果、遽かに個人主義の旺盛を來たし、營利の競争が激烈となり、是迄信用と體面とで堅められてゐた町内が一變して錙利の巷と化した感がある。併し斯る變化の間に於ても、際立つた貪慾、破廉恥の行動に對しては政府が常に掣肘を加へ、有望な事業には保護を與へ、個人では到底經營の出來ぬ事業は國家自らが之を經營し、只管國民利福の増進に努めたもので、この點からすれば我國は歐米で唱へられる國家社會主義を最も良く實行しつゝあるものと云へるのである。

乍併社會が迅速に進歩し、各國間の競争の益々激烈を加へつゝある今日、若し國家が將來に於て生じ易き社會の變動に對して最も適當な處置を取らうとせば、實業に對する政策に就て一層慎



密な攻究を加ふべきだらうと思ふ。

本章に於ても此の點に就て少しく考察して見ようと思ふのであるが、其の手始めとして現今我國の採用してゐる國家社會主義的政策に就て一應觀察して見ようと思ふ。

我國に於て生産の手段と機關とを政府が所有して、個人が利益を私するやうな凡ての機會を取り除くことを主眼とする國家社會主義の政策を採つてゐることは、鐵道業や鐵、鹽、煙草、樟腦等の製造を官營としてゐるのを見ても明かなことである。此等の事業は個人や私的團體では經營の出來ぬものを國家が引き受けたと云ふよりは寧ろ個人や私的團體の手に墜つべき利益を、國家自身の手で收めることを主眼としたものと云ふべきである。換言すれば同胞の勞働より生じた富を少數者の手に收める弊害を防ぎ、國民全體の爲めに使用せんとするものであつて、國家の採るべき處置としては其の當を得たものと云つて差支ない。併し是れとても程度の問題で、國家が生産の手段と機關とを所有するならば、個人間の競争は絶滅するやうにも思はれるが、併しその半面に於て營業の活氣を殺ぎ、事業の澁滯を來たし易いのである。個人や私的團體の經營する場合には利益が靚面に自己の上へ降りかゝつて來るばかりでなく、競争が激しい爲め油斷してゐては忽ち他人に壓倒される。其れ故腦漿を搾り、新規な工夫や考案を凝らし、敏速に商機を捉へやうとし

て、奮闘するやうになる。然るに國家が經營することになると、指揮監督の位置に立つ人々も多くは雇人根性を抱き、其の働き振が他動的な微温いものになる。又その事業が多く利益を生じなくとも、或は多少の損害を生じても國家の費用を之に充當するから直接には何等の打撃も受けぬことになる。斯る所から事業に對する管理者の意氣込が弱く、自然その事業は委靡して振はぬことになる。殊に官營となると萬事が御役所式になり、繁文褥禮に拘泥して、臨機應變の所置に出づることなく最も機敏を要する産業活動としては最も其の當を得ぬと云ふことになる。又假令國家が經營しても其の中に働く重役の利己心は失はず、位置や俸給の奪ひ合ひとか、收賄官金費消とか云ふ醜行をさらけ出し、最も責任のある國家が經營せる事業が普通の營利會社よりも劣つた惡結果を來たし、其れが爲めに國民の期待に反くことが決して少くない。又その下に働く勞働者とても、私の雇主の代りに官吏てふ名前の異つた雇主の下で働く迄のことで、別段の優待も受けないから、何等の難有味も覺えず、又別に勞働の愉快や奮發心も起らぬのである。

されば國家の利益てふ點からすれば、國家が産業を經營するよりも大規模の私的團體の經營に任せ、それが餘りに横暴を極めて同業者を壓倒するとか、職工を酷使虐待するとかいふ邪惡不正を行はぬやうに、適當の監督と制限とを加へ、其の利益に對する相當の割合額を國家に納めさせ



る方が遙かに適當の方策であらうと思ふ。換言すれば各個人が自己の利益を増進することが同時に公共の利益となるやう國家の力を以て管理すべきである。

此れは世界の各國が採りつゝある政策であり、我國でも現に實行しつゝあるのであるが、實際の問題としては、國家が個人や私的團體に對して如何なる點まで干渉と制裁とを加ふべきか、なか／＼決定し難いのである。さればこゝでも此れに就ては大體の方針を述べるより外はない。國家が個人又は私的團體に對して採るべき制御は大體に於て事業主に對する制裁と不當の利得に對する取締との二項に歸しようと思ふ。此の中の前者に就ては既に工場法が設けられて精細に規定されてゐるから之を省き、こゝでは専ら後者に就て述べて見ようと思ふ。

一概に不當の利得と云ふても、其の内容は種々雜多である。併し之を其の原因から觀ると大體二種に分れる。(一)自然的増收と、(二)人爲的博利とである。自然的増收とは行爲者自身は豫想しなかつたが、外圍の事情の變化に由て物價が騰貴した爲めに法外な利益を占める場合である。例へば歐洲戰亂の際に物價の騰貴したのに乗じて莫大な利益を收めたといふやうな場合や、又交通機關の布設、都市の發達から地代が著しく騰貴した爲めに多大の利益を收めると云ふやうな場合はそれである。次に人爲的博利とは初めから物價を騰貴させやうとする目的を以て買占めたり

賣借んだりして、物價の騰貴を激成させ、其れに由て多大の利益を占めるものである。第一の場合には國家全體に割り當てらるべき利益が經濟界の變調によつて少數者の手に歸したもので、他方には必ず廻り合せの悪い多數の貧困者が生ずることになる。されば斯る利得に對しては國家が嚴密な調査を行ひ、普通の所得税よりも遙かに高率な利得税を課し、其の税を以て社會公共の事業殊に貧民救済の費用に充つべきである。第二の場合は自己の利益の爲めに同胞の利益を犠牲にしやうとする明かな惡意に出たものであるから、是れに對しては政府が嚴重な懲罰を加ふべきである。

以上は實業に對して國家の採るべき方針に就て一般的に述べたのであるが、次に現在我が國家が實際に採つてゐる方針に就て論評し、其れに依て國家の任務を明かにしようと思ふ。

第一は富國と強兵とを並べて唱へられることである。思想の比較的單純な人々に由て唱へられる富國強兵てふ綱領と知識階級をよく口にする武力戰に對する經濟戰てふ觀念には孰れにも對比として正鵠を得ぬところがある。彼我の有無を通じ、利益の交換を主とする商業をば外敵に反拉して其れを壓倒することを主とする軍事と類推するのは當を得た見解ではない。商業にも競争の方面があるが、それは商業の本體ではなくて副産物である。經濟活動を戰爭と同一視するのは、



一朝事ある時に貨幣を悉く兵器たらしめんとするが如き謬見である。斯る誤解に基いた富國強兵説が唱へられるが爲めに、商人は外國貿易に於て其の場限りの姑息な手段を以て自己の利益を占めようとし、國家將來の名譽如何の如きは全く之を顧慮せぬやうになるのである。外國貿易に於ける我が商人の不評判は多くは斯る姑息な態度に基いてゐる。外國と通商することの國家に取つて如何に利益が多いかは、徳川時代の永い鎖國に由て物質上及精神上に多大の損害を受けたのによつて見ても極めて明かな筈である。それをも顧みずに平和な調節を必要とする貿易上にも、殺伐な武斷主義を適用しやうとするのは甚だしい料簡違ひである。元々我が武力と雖も久しい年代を経て充分に精練され道徳的に美化されてゐたもので、それが日清日露の二大戦役に於て遺憾なく發揮されたと云ふことが世界の賞讃を博したのである。然るに商工業に對しては國民は其れと全く反對の態度に出で、久しく養ひ來つた信用とか正直とか云ふ美德は弊履の如くに之を脱ぎ棄てて、外人と見れば悉く夷狄扱ひにしたのである。是れが爲めに武力に於て賞讃を博したのに反して貿易上に於ては甚だしい非難を受けたのである。或は之をば、永い間の訓練を経た武力から發達未熟の商業へ移るべき過渡期に於ける混亂だと觀れば觀られぬこともないが、其れよりは順應を主とすべき商業を反撥的なものと觀たといふ謬見が之を禍してゐるのである。

次に富力の増進でふ國家の方針が動もすると、富豪を保護する政策に出で、それが意外の惡結果を來たし易い。政府が富豪を保護優待するのは種々の見地から出たもので、一概に非難することは出来ないが、其の結果から觀ると、概して良好とは云へぬのである。今その保護の理由とせらるゝ所を觀るに、國家の爲めに巨額の金圓を寄附し、國家的事業の振作に貢獻したが爲めと云ふのが其の重なるものである。かく國家又は公共の爲めに盡瘁したと云ふ理由で富豪を優待するのは適當の所置のやうにも思はれるが、併し是れにしても唯だ寄附の金額のみに着眼して、その富の如何なる手段に由て得られたかに就て綿密な攻究を費さぬ時には、政府は品性よりも金錢を尙ふことを國民に向つて公然と發表することになり、之を觀た國民は如何なる不正手段に訴へても、其れに由て積んだ富の一部分を國家に寄附さへすれば、國家から優遇されるものだとする不健全な思想を抱き易い。左なくとも惡辣な手段を以て暴富を成した俄富限者が法外に幅をきかす今日、富豪に對する政府の態度は大に慎重を要することと思ふ。

次に一般の世人は勿論のこと、政府の當局者も時々抱く誤つた意見は、國民が富裕になれば國家も亦富裕になると云ふことである。一寸考へると國民は國家の一員であるから、其れが財産を積みあげ、やがて又國家の富が増進するものやうに思はれるが、併し必ずしも左うなるものとは



限らぬのである。國家には個人の所有する富以外に國家の所有すべき富がある。國家直屬の土地とか道路とか建物とか云ふ如きはそれである。かゝる富を個人が私有することに由て如何に其の富を積んでも、國家は少しも富まぬのである。例へば深山の間に在つて該地方に於ける多數の農家の灌漑の根源となつてゐる官有の森林を交通不便で極く安く拂ひ下げて貰ひ、之を建築の材料として都會に供給するが如きは其人に取つては大なる利益となつても、國家の上から視れば寧ろ損失になるのである。されば國家が富豪を無差別的に優待する時には國家は富の掠奪者を援助すると云ふやうな甚だ思はしからぬ結果を來たすことになる。斯る公共の富の掠奪者は暫らく措くとしても、現今の經濟界に於て人々が財産を積むのを見るに、正當の方法によるものたらざるものがある。その方法の當を得ぬと云ふのは、上に述べた通り經濟界の亂調に基く機運に乗じて、同胞の手に墜つべき利益を掠めて自分の手中に收めるもので、此の如きは非經濟的な手段に訴へたものである。隨てこの場合には一方に暴富者の生ずる代りに他方に多數の貧困者を生ずるのである。若しかゝる暴富者を政府が優待する時には、徒らに我慾を獎勵して不遇な者を冷遇し、國民多數の寧福を顧みざることになる。此故に國家が富豪を取り立てる際には、經濟的手段に由つて富を成した者、即ち國家の富を増進することに由つて自己の富を積んだ人々を明

かに辨別して特に之を賞揚すべきである。

之を要するに一國が擧つて物質的利益のみを求める時には、一般の氣風が淺薄卑俗になり、富を積める者は奢侈遊惰に耽り、資産なきものも射倖投機に走り、社會には浮薄な傾向が募るやうになる。凡そかゝる風紀上の紊亂ほど國家の健全な發達を阻害するものは他に又とないのである。之と反對に着實穩健の氣風が國家の健全な發達に取つて如何に必要であるかは、我が國民が是迄義勇奉公を尙び極度の克己自制を果たしたことが能く我が國家今日の隆盛を來たしたのに依つて觀ても明かなことである。

されば國家の發展に向つて重要な役割を務むる實業家は、其の富を積むに當つても、深い精神的價値を認め、此の上から其の獲得の手段や消費の方法を制御すべきである。此の如きは富の極めて必要な今日、甚だ迂遠な説教のやうに思はれるかも知れぬが、苟も自己の行爲を以て國家の爲めに貢献せんとする以上、此の點まで立ち到らねば其の本旨を全うすることは出來ないのである。國家も個人も「道の濶く門の大なる」に惑はされずに、「小さくして窄き門より入ることを心掛けなくては、到底「永生」には到り難いのである。

それ故爲政者は、國家の使命を深く心に留め、物質的利益を得るが爲めに多數の精神的價値を



犠牲に供するやうな個人に對しては充分に制裁を加へ、正當な經濟的手段に由て富を積める者は大に之を賞揚し、其の富をば文化の増進の爲めに使用せしむべきである。

又多額の富を積んだ個人は國家の恩惠によつて之を獲得し、國家の保護によつて之を保存し得るのだといふ打算的見地からのみでなく、自分は社會の福祉を増進すべき任務を有してゐるのであると云ふ深い自覺からして、其の富をば國家又は公共の爲めに献げて、貧窮者、病弱者、罪人等の救済の用に供したり、又は教育、學術の進歩、衛生、治療、娛樂の改善の爲めに充つべきである。

苟も自己の理想を實現せんとせば、國家も個人も物質的快樂は之を或る程度まで禁壓抑制して掛らねばならぬのである。成金の如く國家の保護に由り、又機運の助けによりて意外の金力を贏ち得た者は、それだけ自己の情欲を牽制して社會公共の爲めに寄進することに由て始めて一個の國民たる價値を發現し得るのである。

### 第三編 實業道徳の理論及び實踐